裏切りの代紋（中編2 性奴編）

大親分の来訪

とうとう、村崎親分と村崎會の大幹部の一行が到着した。

村崎の一行は、前回女達を鬻り尽くした大広間に案内された。

この日のために畳も襖も真新しい物に張り替えられており、青々とした畳の清々しい匂いが立ちこめていた。

高価な掛け軸の掛けられた上座に設えられた豪華な肘掛け椅子に、紋付袴姿のデブプリと肥満した巨体の村崎親分が腰を下ろし、それを中心として、左右には親分に随行して来た黒眼鏡、黒スーツ姿の男達がズラッと並んで椅子に腰掛けていた。

いずれも村崎會の最高幹部であり、かつては奈和もその一員であった村崎會の中樞を構成する大きな組の親分連中であった。

剛沢達は下座に畏まって正座し、村崎一行を迎えた。

足下に正座して恭しく控える剛沢達をゆっくりと一瞥してから、肥満してでっぷりとした上体の太い首の上に載せられたまるで鯨の顔に見える大きな顔をした村崎が、難しい表情を作って静かに口を開いた。

「剛沢よ、儂も過ぎてしまった事をとやかく言うつもりは無い・・・しかし、一門の中には、今回のお前さんのやり方を非難する者も多い。儂としても目を掛けてきた奈和の組がこんな事になってしても、複雑な気持ちや・・・しかし、今は時代が違う。昔みたいに弔い合戦やゆうて、派手に騒ぎを起こせばそれこそ、桜の代紋の思うツボや。儂も一門の親分連中を宥めるのに苦労してる・・・」

村崎の発する言葉を一つ一つ吟味しながら、村崎の本心は解散した目高組を完全に見捨てたことと、一門を宥めるための工作資金と称して、実は、上納金が入って来なくなった目高組に代わって大亜門戸会から金をせびるつもりだ一と、本音を読み取り、傍に居た幹部に目配せした。

剛沢の意を受けた幹部が、白い紙包みを載せた大きな赤い漆塗りの三方を村崎一行の前に運ばせて来た。

紙包みはまるで結納の品のように金銀や赤の水引で美しく飾られていた。

華麗な熨斗飾りを付けた、紙包みを載せた大きな漆塗りの三方が三つ村崎の目の前に並べられた。

ざっと三億円か？と、村崎が目算した。

「これは、ほんのご挨拶代わりで御座います。」と。剛沢が恭しくお辞儀した。

三億の出費は大きい、女達をほんの二月も働かせれば、充分回収出来る額だ。それより今は村崎親分の歓心を買って、村崎會の後ろ盾を得て、組の安全を保障させるのが先決だと、剛沢は心の中で算盤を弾いた。

こうして、村崎の一存で、大亜門戸会が、解散した目高組に代わってS市の縄張り一切を引き継ぐことと、大亜門戸会の村崎会一門への加盟が正式に認められた。

同行して来た村崎會の幹部の中には、この決定に不満を感じている親分も多くいたようであるが、さすがに大親分には口出し出来ないようで、苦々しい表情を浮かべて見詰めていた。村崎と剛沢の間で親子固めの杯が取り交わされ、剛沢は晴れて村崎会を構成する幹部の一人となった。

これで、村崎會の後ろ盾を得ることが出来て、まだ小さく敵も多い大亜門戸会も不安が解消された一と、居並ぶ大亜門戸会の幹部もほっとして、受杯の様子を覗いた。

村崎と杯を取り交わしながら剛沢は、「今はジッと我慢の時期だ。俺には大きな野心がある。その野心の実現の為には今此所で村崎会に勝ち目の無い戦いを挑む訳には行かない。こんな豚みたいな爺じいにおべっかを遣ってでも、堪え忍んで組を存続させて、その機会を待つしか無い。」と、心の中で念じるのであった。

杯交換の儀式が終われば、次は宴会だった。

境を隔てていた襖を開け放つと、そこには酒宴の容易が整っていた。

精一杯めかし込んだ銀子や剛沢の愛人達も村崎や随行員に酒を注いで回った。

村崎は、酌をする剛沢の愛人達の中に銀子の姿を見付けて、懐かしそうに銀子を呼び寄せる嬉しそうに言葉を交わしながら酒を注がせ、そのまま銀子にも返杯した。

美人の酌を受けて、村崎達一行は、嬉しそうに注がれるままに酒をあおっていた。

親子固めの儀式の際に感じられた不満分子の醸し出す緊張感も愛想を振りまく美人の注ぐ酒に流されていく感じであった。

酒肴も一通り回った頃、村崎が何かを探すように、周囲をグルッと見回した。

これに気付いた剛沢が、頃は良しと、手をパンパンと叩いた。

宴席の正面の襖がすっと開いて、そこに現れた三人の女の姿に、居並ぶ男達は、思わず驚きの声を上げた。

それは同行した親分連中も良く知っている、かつての兄弟分の女房と愛娘と愛人に納まった壺振り女であった。

「黄原の野郎、趣向するじゃないか！」と、女達の姿を見て、思わず剛沢がニンマリと呟いた。

普段、女達が客の前に出る時は、晴江とお竜は着物姿、暁美はシルクのチャイナドレス姿で、それに併せて暁美はストレートのロングヘア、晴江とお竜は和風に結い上げた髪型をすることが多いが、今回は、女達の髪は全員アップに結われ、硬く結い上げて露出した額には、アクセントとして捻り鉢巻が巻かれていた。

そして、その下には上半身裸の上から直接法被を着せられていた。

晴江は赤い法被、お竜は青い法被、暁美は黄色と派手な色とりどりの法被姿であった。

まるで夏祭りで男に混じって御輿を担ぐ近頃の威勢の良い女を連想させる法被姿をした三人の女が艶めかしく映っていた。

女達が突然暴れ出すのを恐れてか、全員裸身の上から直接麻縄で後ろ手に縛られた上から法被を被せられているようであった。

そのため法被が充分に前まで回らず、法被の正面の合わせ目からは、女達の深い胸の谷間からキュートな臍も露わに腹部が露出し、特に暁美とお竜は、ボリュームのある胸をしているので、法被の前からその豊かな乳房がチラチラと見えそうであった。

そして、その短い法被の下に見える下腹の肝心は部分には、本来法被に合わせて股引きを履くところであるが、何も衣類を着けておらず、代わりに、赤と白の繊維を振り合わせて作った紐が、まるで褌のように股間を割って背後に続いていた。

恐らく、水引の材料に使うような赤い和紙と白い和紙を束ねて、振り合わせた物だろう。

体の左側からは、まるで、しめ縄のような太い白い腰縄が前に回り、右側からは、同じように赤い腰縄が前に回っていた。

その和紙を振って作った紅白二本の紐が体の正面、臍下で振り合わされ美しい一本の紅白の紐となって股の間に消えていた。

腰縄の部分は相撲の横綱が土俵入りの時に締める化粧綱の様に太く作られていたが、股間を割る部分は和紙の量を調節して秘部に向かって段々細くなるように作られていた。

三人の女はここに連れ込まれる前に、漸く元通りに生え揃った春草を黄原の命を受けたサブ達により跡形も無く刈り取られていたので、童女のようなスベスベとした肌を晒していた。カミソリによる剃毛後の肌荒れを防ぐためか、剃り跡にはたっぷりクリームを塗られていたので、柔肉の狭間に深く刻まれた峡谷は光を受けて艶々と輝き一層卑猥な景色を作っていた。

秘所に向けて最も細くなるように形作られた水引は、ツルツルに剃毛された秘所を隠す役目を果たしておらず、逆に周囲の艶々と光る柔肉を押し広げ、女達の肉感豊かな秘貝の間に深々と挟り込んでその姿を没し、裸の下腹を直接曝すより一層卑猥な様子を形作っていた。

そして背後に回った紐は水引の結び止めのように大きな蝶のような輪を描いてと結び止められていた。その太く大きな輪は、まるで歌舞伎の荒事の帯の様に、あるいは、横綱の土俵入りの化粧まわしの綱のように派手に高く立ち上がっていた。

この裸の上に法被と水引の禪を締めただけの女達の出度くも卑猥な姿に、さすがの村崎も目を点にして、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

女達も普段と違う衣装で、裸体を覆い隠す役目を持たず、逆に卑猥さを強調するような格好で男達の前に引き出されたことに、何時も以上の羞恥を感じ、少しでも無毛の秘部を晒す事の無いようモジモジと股を振り合わせたまま、全身を赤く染め、正面を向くことも出来ず俯いていた。

息を呑んで見詰める男達の熱い視線を感じて、ふと顔を上げた時、正面に紋付袴姿のデブリと太った村崎親分の姿を見て血の気が引くような驚きを感じた。

これまで長い間、村崎会のために尽くして来た目高組であるから、目高組が潰された今、後ろ立って大亜門戸会と対峙して、自分たちを救援してくれるのでは無いかーと、剛沢達に覺られないよう、密かに期待していた村崎親分が剛沢と並んで座り、楽しそうに酒を酌み交わしあっているという景色が目飛び込んで来たのだった！

信じられないような光景に女達は心臓が冷たく凍りつくような驚きと理解の出来ない恐怖を感じ、急激に鼓動は早くなり、冷や汗がどっと噴き出すのを感じた。

「おう！これは晴江姐さん。久しぶりやな。相変わらず綺麗やな。まるで油で磨いたよう

や！」

こちらを睨み据えるような晴江の鋭い視線を感じて、照れたように村崎がニヤニヤと笑みを浮かべて晴江に声を掛けた。

厳めしい刺青を全身に纏っている晴江であったが、首すじから胸の谷間を通して股間までは白い素肌を晒しており、法被に覆われた前面からはその刺青をうかがうことは出来なかった。そして、女性として最も重要な部分に在った飾り毛は綺麗に剃り上げられていたため、童女のような柔らかい肉の贅を村崎會の男達の目の前にさらけ出していた。

その危ない狭間に紐の様に細く振られた水引が容赦無く食い込み、辛うじて秘裂の最後の様子を隠すだけの扇情的な姿に村崎が生唾を呑み込みながら、粘っこい好色な目でじっと秘所を見入った。

「お嬢ちゃんの方も、最後に合ったのは、確か女子高生の頃やったけど、ええー別嬪さんになったな・・・」と、続けて好色な目で隣に立つ暁美を上から下までじっくりと眺め回した。大親分の嫌らしいネットリとした視線をほとんど裸同然の体に浴びせられて、暁美が羞恥に身を振らせた。

「お竜さんも賭場で壺を振る凜々しい姿が、今でも臉の裏に焼き付いているけど、こうして見ると男好きのするええー一体してるな・・・」と、続いてお竜の裸身に好色な視線を移して声を掛けた。

村崎の熱っぽい淫猥な視線が、紅白の縄褌のような紐で強調された、剃毛されツルツルの股間に注ぎ込まれていることを意識して、お竜が顔を赤く染め、思わず大腿を固く閉じ合わせた。

まるで猛獣使いの様に凶暴な男達の中に立って、男達を一喝し自分の意のままに扱ってきた凜々しい女親分としての晴江の姿や鉄火場と呼ばれる殺気立った賭場を取りまとめる男勝りのお竜の姿が記憶にまざまざと残っている村崎には、今、目の前に裸同然の惨めな姿で立たされている女達がこれまで見ていた同じ女達であるとは信じられない思いに捉われ臉を何度もパチパチするのであった。

目高組が大亜門戸会の前にあっさりと敗北してしまい、目高組の女親分であった晴江やその娘と幹部級の位置にいた壺振りお竜達の話がその後不明となっていたが、裏社会の噂では三人は大亜門戸会に拉致され、奈和親分の延命と引き換えに大亜門戸会お抱えの売春婦に成ったと耳にしていたが、今、目の前に裸同然の姿で 一いや、ある意味全裸より扇情的な姿で引き据えられて来たのを目にして、噂はやはり真実であったと確信するのであった。

村崎はこれまで何度も目高組の組事務所を訪れたことがあり、その都度、晴江の美貌に目を奪われたものであるが、傘下の親分の妻を奪い取るなど出来るはずもなく、^{よこしま}邪な欲望を胸に秘めて、晴江の容姿をジッと覗いていたのであった。

しかし、晴江が目高組の片翼を預かる立場から売春婦に墮とされたとなれば話は別で、これまで胸に秘めていた^{よこしま}邪な肉欲を実現できるのでは無いかと、自ら大亜門戸会の事務所を訪問して来たのであった。

本来、剛沢と杯を取り交わすだけなら、剛沢本人を村崎會の本部に呼び寄せれば事足りるはずであった。

村崎の前に引き据えられた女達は、本来なら自分達を味方するはずの大親分から、全身を粘っこい嫌らしい目で嘗め回されて、異様な気配を感じ、ぞっとするような羞恥に襲われ思わずその場に立ち竦んでしまっていた。

三人の女は黄原に背を押されて、村崎の前まで進められ、無理矢理正座させられた。

黄原に肩を押されて無理やり畳の上に座らせられた女達は、正座の姿勢を取ることにより禰のように股間を一字に割る縦紐がより一層女肉の間に強く食い込むのか、思わずアッと小さく声上げ、顔を赤く染めて、腰を小さくもじつかせた。

何度か村崎が目高組本部を訪問したことがあり、黄原は村崎の顔を良く覚えていたが、目高組ナンバースリーの男に対して、村崎は記憶していないようであった。

村崎は黄腹には目もくれず、まるで生贄のように目の前に供された三人の女を粘っこい目で繁々と見詰めていた。

村崎の隠微な視線に耐えかねて、助けを求める様に左右に居並ぶ男達を見つめた。

村崎親分の両側に席を占める濃いサングラスを掛けて黒スーツをまとう村崎會の最高幹部は、奈和とも義兄弟の杯を酌み交わし合った親分衆であり、その内の何人かは実の親戚兄弟の様に交際する間柄の男達であった。

男達は、晴江の^{すが}縋るような視線を感じたが、濃い眼鏡の奥で視線を泳がし、無視する様に素知らぬ顔で正面を見ていた。

奈和親分と義兄弟の杯を交わした親分衆も死に馬に乗って自分の組を危うくする気はサラサラ無く、複雑なものを胸に感じながらも目高組を見捨てる決心をしたのであった。

村崎の前に引き出された晴江が、何か有り得ないような異様な事態が起きているとは理解しつつも、最後の望みと、藁にも縋るように村崎の目を見つめた。

これは何かの間違いに違いない！目高組が親とも縋る村崎会が敵対する大亜門戸会と^{よしみ}誼を結ぶ訳が無い！村崎親分は剛沢に何か騙されているに違いない！一と、村崎と剛沢が、裸の自分達に好色な視線を送りながら、楽しげに酒を酌み交わすという有り得ない現実を無理矢理否定しようとした。

「親分！目高組は、大亜門戸会の卑劣な罠に嵌って潰されてしまったんです！親分、どうか仇を討って下さい！」

晴江が、目に涙を浮かべながら村崎に向かって叫ぶように悲痛な声を上げた。

「それは、出来ん相談や。」

肥満して鯰の様な横に張った頬をした村崎が、両手を豪華な椅子の肘掛けに置いたまま、椅子の背に肥満した体を反っくり返らせて、ニコニコしながら応じた。

「何故です？内の奈和は親分と親子固めの杯を交わした仲！子の無念を親が晴らすのが渡世の義理とします！」

なおも晴江が目には涙を浮かべながら食い下がった。

涙に霞む視界の中で、奈和とも義兄弟として親交のあった村崎と並んで座る男達も、助け船を出そうとせず、押し黙ったまま、視線が合わない様に目を逸らしたり、成り行きを見守る様にサングラスの奥から、じっとこちらを見つめていたり、中には冷酷な薄笑いを浮かべる男も居て、晴江にジリジリとするような焦りと怒り感じさせるのであった。

本来なら、黄原も女達の口を閉じさせる所であったが、女達の背後でニヤニヤ薄笑いを浮かべながら、村崎会が完全にこちらの側に回ったことをこの目高組の頂点に存在した女達に理解させ、現在の自分達の置かれている立場を思い知らせるために、言いたいだけ言わせておくことにしたのだった。

「親子固めの杯やが、・・・それは目高組が自主的に解散を決めた時に、杯を返したと言う事や・・・そやから、今となっては、村崎会と元目高組は何の関係もあらへん・・・

組の大きさから言っても貫禄から言っても、農の跡目を継いで村崎會の総長になるのは奈和しか居らんと思ったのに、さっさと組を解散してしもて、全く残念なこっちゃ！」

村崎は、落ち着き払って返答した。

冷酷にも目高組を見捨てると云う村崎の宣言に、鉄棒で打ちのめされたように頭の中が真っ白になった。

その後、村崎が幾つもの牽強^{けんきょう}付会^{ふかい}の言葉を並べ立てたのは分かったが、最初の宣言で脳髓に高圧電流を注ぎ込まれた様に頭が痺れて、精神が麻痺情態に墜とし込まれた晴江には何を言っていたのか覚えていなかった。

まるで脳震盪を起こしたようにクラクラする意識の中で、漸く村崎の言葉が耳に入って来た。「それと、今さっき、この剛沢と親子固めの杯を取り交わしたばかりや。今の剛沢は儂にとって実の子同然や！」

目高組の事を弊履を棄てるように見捨てただけでなく、その仇の大亜門戸会が村崎會の直参の組となったと聞かされ、

「そんな、義理も人情も無い話って・・・」

悔しさと惨めさに身を振るわせて泣き崩れる晴江であった。

お竜と暁美も唇を噛み締めて、村崎の非情さに怒り、打ち震えた。

村崎の隣で黙って聞いていた剛沢の口の端がニヤッと歪んだ。

厳しく縛められた体をわなわなと震わせ、目に悔し涙を浮かべながら、なおも女達が何か言おうと唇を動かした時、村崎が先に口を開いた。

「あんた達にも色々言いたいことは有るやろうけど、目高組が正式に解散してシマを含む一切切を大亜門戸会に譲り渡したことは、譲渡書に搔かれている通り、動かし様の無い事実や・・・」

この狷介な老人は顔色も変えず、それどころか口の端に穏やかな笑みを浮かべて晴江達を見回して言葉を継いだ。

「それから、詳しいことは知らんけど、あんたらが剛沢親分から大層な額の借金をして、今は借金返済のため大亜門戸会のために働いている事も知っている。・・・さっき剛沢から借用書と契約書を見せてもろうたけど、何処に出しても通用する立派な借金の借用書や。そやから、今までの経緯は、綺麗さっぱり水に流して、一所懸命働いて借金を返さないかんで。」と、穏やかに諭すように話しかけた。

これを聞かされて、女達は、最後の望みの綱と期待した村崎会からも裏切られ、見放されてしまった悔しさと、底知れない絶望感に厳しく縛められ体を身悶えして泣き叫んだ。

女達の悲嘆に崩れる姿がサディスティックな暗い本能を燃え上がらせるのか、女達と村崎のやりとりを聞きながら、村崎の隣で剛沢が勝ち誇ったように片頬を歪めて微笑んでいた。

「折角の村崎親分と剛沢との親子固めの目出度い席で、こんな愁嘆場を見せられたんでは、酒が不味くってしまうぜ！ お前達も契約の通り今では大亜門戸会のお抱え娼婦なんだ

から、しっかりとその役目を果たすんだ！」

と、女達にひとつきり涙に咽ばすと、三人の後ろに立った黄原が、村崎達の目前で三人の上半身に羽織っていた法被をサッと剥ぎ取った。

その瞬間、女達の白い裸の上半身が露わになった。

豊満な乳房が、隠す物も無く野卑な男達の視線に晒されたことを知覚した女達が、我に帰ったように体をビクッと緊張させた。

「おお！噂には聞いてたけど、立派な彫り物や！」

上半身を覆っていた法被を取り去られ、胸割れの見事な騎龍観音の彫り物が隠す物も無く露出し、村崎の目を釘付けにした。

「お竜姐さんの昇り龍の彫り物は、賭場で見せてもろたけど、昇り龍、降り龍が対になって、いつ見ても立派なもんや！」

「お嬢ちゃんの方は、若いだけあって艶々のええ肌してるやないか。それに、どや？その大きな形のええおっぱいは！」

と、目の前に現れた美女の裸体を見て、村崎は有頂天になっていた。

高手小手に縛られ、余った縄を胸の上下に二巻き、三巻きされて、たつぷりと脂肪を載せた柔かな乳房の陰に縄が埋没し、魅力的な乳房の形を一層強調するように突き出した、蠱惑的な姿に居並ぶ男達の目が釘付けとなった。

紅白の水引を禪のように股間にかけてただけで、裸身を覆い隠すことも出来ず、全裸よりも扇情的な姿で村崎達の前に正座する女達が、恥ずかしそうに腰をモジモジとさせていた。

「どうした、お前達、親分の前でしゃがんでいだけじゃなく、早く親分に酒をお注ぎしないか！」

晴江達の尻を平手で叩きながら、黄原がお酌をするように促した。

「・・・と、言っても両手を後ろに縛られていては、注ぎようがないか？・・・どうだ、口移しにお酌するというのは？」

と、女達の顔を覗き込みながら黄原が提案した。

「相手が、ブスなら兎も角、こんな美人から口移しにお酌して貰えるなら文句ないでしょう？」

と、銀子も村崎にしな垂れるように言った。

村崎も相好を崩して、「前々から、こんな美人の女房を貰って、奈和のヤツも果報者やと思

とったが、その美人の嫁ハンから口移しでお酌して貰えるなんて、こんな幸せなことはないな・・・」と、村崎も黄原の提案に満更でも無い様子であった。

散々忠義を尽くしたのに、あっさりと目高組を見捨てて、大亜門戸会に付いた、卑劣な男と嫌悪したが、最早この男達には、敵わないと観念するしか無かった。

動かしたい事実の前に、心の中で敵意や反発心がボロボロと崩れていくのを感じた。

「お願いします、その前に私にもお酒を飲ませて下さい・・・」

晴江が黄原に哀願した。

村崎の卑劣な裏切りに対する激しい怒りと底を知れぬ絶望感、憎い男達の目に恥ずかしい姿を晒さねばならない惨めさと羞恥心—それらが、ない混ぜになり晴江の心の中を駆け巡っており、酒にでも溺れなければ、とても耐えられない気持ちとなっていた。

良いだろうと、黄原がお銚子を掴むと、晴江の口に押し当てた。

薄く開いた口に生暖かい日本酒が流し込まれた。

ゴクゴクと咽を鳴らして嚥下する晴江の唇から溢れた酒が咽を伝って極彩色の刺青を施した乳房にまで流れた。

「おお、ええ飲みっぷりや！」

村崎がニコニコしながら大声を上げた。

一本の銚子が、たちまち空になった。急に大量の酒を咽に流し込んだため、晴江も急激に体に酔いが回るのを感じていた。

空になった銚子を置くと、黄原は二本目の銚子を手にした。

一気に酔いが回り、肌が上気して来た晴江の様子に、「おお、ええ色になって来たやないか。肌が桜色に染まって背中のお観音さんの刺青も一段と映えるわ！」と、上半身を縛られ、無理矢理口に押し付けられた銚子から酒を注ぎ込まれる美女の扇情的な姿に村崎が大きな声を上げた。

「もう充分飲んだろう。」と、黄原はお銚子の最後の酒は飲み込まず、口に含むように命じた。

黄原に注ぎ込まれるままに銚子の日本酒を口に含まされた晴江は、黄原に後頭部を掴まれるようにして、村崎と唇を重ねさせられた。

村崎の興奮した煙草臭い熱い息が頬に掛かった。

ガサついた鱈子の様な太い唇と自分の唇がピッタリ重なったことを確認して、相手の唇を押し開くように優しく自分の唇を開いて、村崎の口内に酒を移し入れた。

その様子に、取り巻きの人間からは、「ようよう！ご兩人！」とか、「お熱いねー！」とか野次が上がった。

口移しの美酒を味わいながら、村崎は無防備な晴江の体をまさぐり、片手で乳首を摘んで弄り回し、もう一つの手で尻を撫で回していた。

口移しで酒を飲む間、不気味な蜘蛛のように全身を這い回る村崎の気色の悪い指の動きに、鳥肌が立つような嫌悪感を感じていた。

そして、唇を重ねたまま酒を嚙下し終わった後に饅⁺えた臭いのする舌先を晴江の口内に差し入れて来た時、固く閉ざした晴江の目から、ひとすじの涙が頬を伝った。

黄原は、晴江が口移しのお酌を終えたのを知ると、次に暁美の口に酒を含ませて村崎の前に引き出した。

暁美も、最早拒否しても無意味なことを悟ったのか、大人しく晴江をまねて村崎に口移しで酒を注いだ。

村崎は口移しの酒を飲み下しながら暁美のボリュームのある乳房を握りしめた。

このようにして、村崎は、晴江が終わったら暁美、暁美が終わったらお竜と次々に口移しのお酌を受けた。

女達の甘い唾の味が混じった濃厚な香りがする生暖かい酒を堪能しながら、熟女の妖艶な肌や、若い女の張りの有る肌や、女盛り柔肌に思う存分指を這わすことが出来て、すっかり舞い上がっていた。

「お前達、親分にお酌をしたのだから、次は、ご返杯を受けたらどうだ？」と、黄原が、また口を挟んだ。

「もっとも、両手が塞がって、お猪口を持ってないから、親分の下の方から飲ませて貰うって言うのはどうだ？」と、続けた。

そして、村崎の耳元で、何やら黄原が囁いた。

「ええ、ホンマかいな？ちょっと照れくさいな・・・」と、村崎が照れたように言ったが、すっかり酔いが回り、女達の柔肌を撫で回した興奮に浸る村崎は、満更でも無いと言う様子であった。

そして、自ら袴をズリ下げると、下穿きをずらして、自らの一物を取り出した。

これを見た周りの人間が、さすがに親分の物は立派だとか、人の上に立つ人間の持ち物は違うとか褒めそやした。

実際それは、並の男の物よりは大きな物であったが、剛沢の逸物に比べれば、やはり小さな物であり、迫り出した大きな腹の下に隠れてしまいそうであったが、周囲から煽てられた村崎は良い気になって、自分の物を得意げに周りの者に見せ付けた。

「何時まで、見惚れていやがるんでー！早く、啜えてご返杯を受けないか！」と、黄原が村崎の前に正座する晴江の肩を叩いた。

黄原に急き立てられ、仕方なく晴江は剥き出しになった村崎の物を口中に含んだ。

晴江の鍛えられた口技により、温かく湿った口中で柔らかく舌先で愛撫され、村崎は天にも昇る気持ちでウツトリとしたように、「アアー、良い気持ちや」と、呟いた。

しばらくの間、晴江にしゃぶられる内に、急に村崎がそわそわし出した。

「あかん、酒の飲み過ぎや！儂も歳やなー、小便したなって来たわ！」と、照れくさそうに笑いながら周囲にもらした。

トイレは何処やーと尋ねる村崎に対して、

「それなら、このまま女の口の中に放出すれば、良いじゃ無いですか？それこそ本当の返杯ですよ」と、黄原が応えた。

真顔で、女の口中に小水を漏らすように言われて、信じられないと言うように、

「ええんか？ホンマにええんか？」と、剛沢の方を確認するように見た。

「どうぞ、どうぞご遠慮なく、この女達はそんな事も出来るように仕込まれています。」と、剛沢が大きく首を縦に振るのを見て、それ程までに言うならと、サディスティックな欲情が込み上がって来るのを感じた。

今まで女に自分の小便を飲ませた経験の無い村崎は、晴江に自分のモノを啜えさせながら最初は照れくさそうな笑いを浮かべて左右を見回していたが、大量に摂取した酒により込み上げて来る尿意に負けたように、

「ほしたら、行くでー！」と、一声叫ぶと、パンパンに張っていた膀胱と強い尿意に堪えていた尿管の緊張を解いた。

晴江も悔し涙を流しながら、逆らう術は無い物と諦めて、村崎の放出に準備はしていたが、突然陰茎の先から溢れ出た、熱い液体の奔流に驚き、目を白黒させた。

それは渦を巻くように一気に口内を満杯にし、更に後から後から濁流の様に流れ込んで来た。

「おお！出るわ、出るわ！」

しこたま酒を喰らい、痛い程に張っていた膀胱の圧力が徐々に減少していく開放感に酔い痴れながら、大きく口を開いて笑いながら村崎が喚いた。

「折角の親分のご返杯だ！一滴たりとも溢すんじゃ無いぞ！」と、男達に凄まれて、嘔びながらも必死に飲み下そうとする晴江がいた。

晴江の嚙下能力が限界と見た黄原は、お竜を引っ張って来て、直ぐさまお竜に代わらせた。お竜も必死になって、冷や汗を流し、咽を痙攣させながらも、村崎の酒臭い排泄液を飲み下した。

代わる代わる三人の女により、アルコール臭が混じった熱い排泄液が飲み下された。最後の一滴を暁美が飲み干し、銀子の調教で教えられたように尿道に残った残尿を吸り上げた。

年齢により排泄力が弱まり、尿路中に溜まっていた残尿が、ジュルリと暁美の口内に流れ込んだ。最後の放出液を飲み込むと、そのまま舌を絡めて村崎の肉茎を清めた。

目高組の三人の女が剛沢の手に落ち、娼婦にさせられた事実は理解できたが、あの気性の激しい女達をかくも陰惨な行為ができる程の売春婦にどの様にして改造したのかと信じられない思いで横に侍る剛沢の方をチラと覗き見た。

村崎の視線を受け、男勝りの女達を娼婦以下の完全な女奴隷に貶めたことを自慢するように剛沢の口の端が緩んだ。

村崎は暁美に最後の処理をさせながら、満足そうな顔をして、苦しそうに肩を上下させて喘ぐ女達を好色な目で眺め回した。

女達の歓待にすっかり気を良くして、「次は、いよいよ別嬪さん達の弁天さんを拝まして貰いたいもんやな・・・」と、ニヤニヤしながら剛沢の方を向いて、露骨に次の欲望を口にした。

「それが、この水引の禪は和紙を糊で固めて作ってあるので、解くのが容易じゃ無いんですよ・・・」と、黄原が剛沢に代わって済まなさそうに村崎に告げた。

「それじゃ、切ってしまえば、ええやないか？」と、村崎が黄原の方を向いて問い返した。

「本日のお目出度い席に、『切る』は、縁起が良く有りません。」

シレッと、真顔で黄原が応えた。

村崎は、少しムツとしながら、「難儀なこっちゃな一、それじゃ、どないせいちゅう一んじゃ？」と、融通が利かない男だと、言う様に黄原を見詰めて問い詰めた。

村崎の詰問を受けても黄原は落ち着き払った様子で、

「この水引の禪は紙で出来ていて水に弱い・・・女達に自分達で禪を溶かして貰いましょう。」

と、言ったので、これを聞いた周囲の男達がエッとするような顔をして黄原の顔を見つめた。

黄原は落ち着き払って、ポケットからリモコンを取り出した。

そして皆の目の前にリモコンを高々と掲げると、カチッとスイッチを入れるた。

その瞬間、女達が突然電撃を受けた様に横倒しになり、甘い悲鳴を上げ、腰を振って苦悶し始めた。

見守る男達の目には女達の下腹がブルブルと痙攣する様子が見えた。

「何や、股の間からモーターの音が聞こえるなー？」と、村崎が呆れたような声を上げた。

「女達の前の穴と、後ろの穴にはリモコンバイブとローターを仕込んであります・・・いま、私がスイッチを入れたので、余りの気持ちよさに悶えている所ですよ・・・」黄原が村崎の方を向いて、シレッとした顔で説明した。

黄原は予め、女達に水引の褌を掛ける前に、前後の2つの穴に電波で操縦できる性具を仕込ませて置いたのだった。

女達が村崎の前に引き出されて、腰をモジモジとさせていたのは、この体内に埋め込まれた2つの性具の発する妖しい違和感によるものだった。

その2つの性具が、今本来の機能を発揮して、内側から女達を責め始めたのだった。

銀子達の肉体調教により、何時でも何処でも牝の肉欲の本能をさらけ出すことが出来るように開発された肉体は、リモコンバイブの激しい振動により性感のスイッチが入れられたかのように抑えも効かず身悶え始めたのであった。

自分達を裏切った憎い男達の前で在るにも関わらず、体内を荒れ狂う強烈な性感は、その様な恨みも羞恥も吹き飛ばし、淫靡に腰を振り、甘美な呻き声を発して、男達の情欲を昂揚させるのであった。

前後の二つの秘所をリモコンバイブに責められ、上気した肌にビッシヨリ汗を浮かべ、横倒しに身悶えながら、食欲にも更なる快感を得ようとするかのように、無意識に自分の股間のしこった突起物をガサついた紙の紐に押し付け、僅かでも快感を高めようとするかのように、腰を前後に振って悶え続ける女達をじっと見下ろしながら、

「両手を縛られているんで、自分達で感じる部分を撫でることも出来ないだろう・・・」と、黄原が冷たい目で女達の身悶えを見下ろしながらポツリと言った。

強い性感に煽られつつも、股間からの刺激だけでは、逝けずにいる女達の快感を更に高めるべく、黄原と銀子と剛沢が後ろ手に縛られ無防備な三人の女体を愛撫し始めた。

前後の快樂のツボをバイブに責められ、女達の快感のウィークポイントを熟知した黄原達の

巧みな技巧に責められ、憎い敵方に寝返った男達の目に見詰められているにも拘わらず、何時の間にか女達は、歓喜の呻き声を上げ始めていた。

そして、快感に彷徨う女肉からは、熱く豊かな愛液がドクドクと溢れ出し、股間を濡らし始めていた。

村崎は、女達のその豊富な愛液の量に目を細めた。

女達の股間を厳しく割って這わされた、紅白の和紙を振って作った水引の紙の量を上手く調節して、腰から下腹に向かって次第に少なくなるように織っていたので、最初からその細い紙製の褌は、女達の股間を隠す役割はせず、逆に丸みを帯びた二枚貝を思わせる柔らかな左右の肉塊を絞り上げ盛り上げて卑猥に強調して、男達の好奇心な視線を釘付けにしていた。

そして、秘孔の真上に位置する部分の紙の量が最も少なく、細く薄くなっており、かろうじて桃の蕾と後ろの菊の蕾を隠すに留まり、その細い撚り紐の両脇からは、柔らかな襞と繊細な皺が見え隠れしていた。

その、股間に一条に食い込むよう封印していた、紅白の和紙の繊維は、直上の秘孔から熱く迸り出るサラサラとした樹液を吸収して、薄黒く膨潤し、次第に柔らかく変化して行く様子が、誰の目にも分かった。

間断なく股間から突き上げるズキズキする様な快美感と神経を蕩かすような剛沢達の巧妙な手技に、堪らず女達がアアーと甘い喘ぎを漏らした。

今が潮時と、黄原は暁美を背後から抱き起こすようにすると、自分の両脚を絡めて、暁美の両脚を大きく聴衆に向かって扇の様にひろげさせ、柔らかい豊かな乳房を激しく揉み立てるなど、上気した女体に対する責め手を一層激しくした。

黄原の巧みな愛撫を受けて暁美が一瞬クッと唸ると、体をグッと硬直させた。

絶頂を迎えて反射的に体を振った時に、強く股間の割れ目の間に通されて、柔肉に厳しく食い込んでいた和紙の紐がプツツと前後に切れた。

後には愛液を垂れ流すピンク色した可憐な肉洞が露わとなり、「おお！見えたぞ！」と、見守る男達から歓声が上がった。

暁美に少し遅れて、お竜も、晴江も絶頂を迎え、自らの愛液で紅白の水引の褌を溶かし終えた。

「みんなツルツルピカピカのパイパンやないか・・・」

水引の褌を失い、すっかり露わになった三人の股間を見渡ししながら、村崎が感嘆の声を上げた。

剃り跡に擦り込まれたクリームと女達の体内から滲み出た愛液が混じり合い、開き切った女達の股間は艶々と輝いていた。

「折角、村崎親分に大事な所をお見せするのだから、邪魔な物を全部剃り上げて、何もかも良く見えるようにして欲しいと女達に頼まれてね・・・」と、黄原がしれっと応えた。勿論女達が自ら陰毛を剃り上げる事を懇願するはず無く、本日の趣向として、村崎親分に強烈な印象を与えるために、サブと吉原に命じて無理矢理剃毛させておいたのだった。

「それにしても、晴江姐さんは、立派なお豆さんを持つてるや無いか！」
激烈な性感の余り、大きく隆起して外部に飛び出した、恥ずかしい蕾を目敏く村崎に指摘され、村崎の取り巻き達も大声で笑い上げた。

女達は、後手に厳しく縛られていた縄は解かれたが、絶頂の余韻で、夢うつつの様に横倒しになったままであった。

ハアハア息を吐きながら、下半身をピクピク痙攣させる晴江の尻を、剛沢が平手でピシヤピシヤと叩いた。

絶頂の高波が引き、弛緩を始めた股間の柔肉の間から、その妖しげな魅力を放つ、毒々しく充血した幾重にも重なった柔らかな花卉をムクムクと押し開いて、鮮やかな色をした肉洞の内部から徐々に明るい緑色をしたパイプが顔を出し始めた。

禪による封印を失ったパイプは、遮る物が無く、まるで鶏が卵を産むように、粘調な愛液の糸を引きながらポトリと体外に排出された。

晴江の体内から放出された鮮やかな蛍光色のパイプは、未だ匂い立つようなネットリとした粘っこい愛液に塗されたまま、モーターの振動音を発てながら畳の上で蠢き続けていた。

暫くすると、菊の蕾が内側からムクムクと膨らみ始めた。

やがて蕾を内側から破って、可憐な花が開くように、白いローターが低い音を発てながらその姿を体外に現した。

ラグビーボールのような長円形をしたローターが、まるで火山の火口のように迫り出した菊花の中心から半分顔を出して、ブルブルと振動続ける様子に男達の視線が集中した。

そして、菊花の皺がいっぱい伸び切り、董色した滑らかな粘膜を晒して、一杯に尻の穴を開くと、まるで後産のように、ポトリとローターを尻穴から産み落とした。

前後の孔から産み落とされた大小二つのパイプが、まるで双子の悪魔の赤子のように、畳の上でセミの様な耳障りな鳴き声を上げながら、バタバタと跳ねまわっていた。

遅れて、暁美とお竜も次々とパイプとローターを力なく体外に排出した。

この扇情的な光景に、村崎親分も取り巻きの男達も堪らずフーと息を吐いたまま、声も上げることが出来ず押し黙ったまま、くずおれたままの女達を見つめ続けた。

「何時まで、良い気持ちで寝てやがるんでー！今のは、これから始めるショーのための準備としてのご開帳だ。さっさと起きてショーを始めろ！」と、剛沢が力なく^{うずくま}蹲る女達の尻を蹴り上げ、非情な声を上げた。

アップテンポなディスコ調のダンスミュージックが流れ、暁美のアクロバティックなストリップダンスが始められた。

柔軟な体を折り曲げ、股を大きく広げ脚を高く振り上げ、激しいテンポの曲に併せて男達の目の前で踊り続けた。

ダンスに併せて揺れ動く豊かな胸や、股間を思い切り開いた時に見える秘密の花園に男達の熱い視線が痛いほど突き刺ささって来ることを暁美は踊りながら意識していた。

そして、この男達の下卑た視線が何か妖しい刺激となって暁美の心身に変化をもたらすことをこれまで幾度も経験して来ていたのだった。

ただ、この激しいリズムに没頭して踊っている時が、暁美にとって頭の中を空白にして、何もかも忘れられる僅かな時間であった。

男達に向けて股間を 180 度開脚した瞬間に音楽が止まった。

静止した身体を中心部分が野卑な観衆の目に晒された、

これ以上無いほど開脚させられたその中心部では、ぷっくりと肥大した若い柔媚な秘唇をパツクリと開き、その間の乙女の花園が隠しようも無く晒されていた。

男達の粘っこい視線がその部分に遠慮なく注ぎ込まれた。

男達の隠微な視線に晒されながら早く音楽が始まらないかとジリジリと焦る暁美であった。

暁美が踊っている間、母親の晴江は、剛沢に命じられて、村崎親分の股間に顔を埋めて、村崎の肉茎を嘗め続けていた。

村崎は晴江の口に含ませたまま、目は暁美の扇情的なダンスに釘付けとなりながらも、自由な手で晴江の裸体を弄り回していた。

晴江からは暁美の様子は見えなかったが、男達が歓声を上げたり生唾を飲み込む音を聞いて様子を頭に描くことは出来、隠す物も無く、裸身を男達の好奇な目に晒して踊る娘の姿に涙

した。

曲がスローテンポなバラードに変わり、暁美のアクロバティックダンスもスローな動きに変わった。

客達に尻を向けた姿勢で両脚を180度近く開脚した時、開き切った暁美の雌芯から一条の粘っこい液が糸を引いて、ポタリと畳にこぼれ落ちるのを目敏く見付けた男が、堪らず溜息を吐いた。

最後に両脚を真上に向かってV字に広げると、徐々に両脚を前に傾け始めた。

大きく広げた股間が仰向けに横たわる顔の上に徐々に近づいて行った。

開いた秘奥が顔の目の前に迫って来た。

不自由な姿勢のまま、その自らの羞恥の中心部に向かって顔を持ち上げた。

そして、大きく舌を前に突き出すと、尖った舌先で自らの秘裂の上を前後させ始めた。

自らの舌先で自らの秘部をクニニするという、信じられない秘技に見守る男達から驚嘆の聲が上がった。

元々柔軟な身体を持っていた暁美が超絶な調教の末に身に付けた誰にも真似の出来ない秘技であった。

自らの秘密の花園に唇を押し当てて愛撫し、滲み出たネっとりとした樹液を舌先で掬い取りながら腰を悶えさせ甘く鼻をならした。

もちろん男達の劣情を刺激するための艶技ではあったが、その凄まじい技に男達は目を釘付けになった。

「さあ、選手交代だ！」剛沢が村崎親分の肉塊を加えていた晴江を解放し、代わりに卑猥なアクロバティックダンスを終えたばかりの暁美にその場を変わらせた。

村崎の前に正座した暁美が、最早逆らっても無駄だと諦めたように、ついさつきまで母親の口腔で愛撫され、母親の唾液で濡れ輝る、まだ逞しく隆起したままの肉茎にそっと唇を重ねた。

「今日は、村崎親分に、日頃鍛えた技をお見せしたいと、女達が懇願するものですから、つまらない芸ですが、最後まで見て行って下さい」と、黄原が口上を述べた。

男達の見守る前に全裸のまま立たされた晴江の前に、莫塵が敷かれてその上に大きな和紙が広げられた。

晴江の芸の準備が整うまでの時間繋ぎとして、剛沢が、「お前の柔軟な所を、親分にお見せ

したらどうだ？」村崎の物を口に含んで吸い上げる暁美に声を掛けた。

暁美は村崎の物を舌先で愛撫しながらうっすらと頷いた。そして、両手を畳の上に着くと片足を高く後ろに振り上げ、そのままゆっくりと上半身を反らして行った。

口内に隆々とした肉塊を含みながら、ほとんど逆立ちのような体勢となり、背を思い切り反らせると振り上げた片脚を村崎が腰掛ける大きな椅子の肘掛けの上に預けた。

片方の脚のひらを踵まで肘掛けの上に乗せて、しっかり安定したことを確認するともう片方の脚も反対側の肘掛けの上に預けた。

暁美の柔軟な背中が思い切り逆海老の姿勢に折れ曲がり、大きく開いた両脚が椅子に腰掛けた村崎の上体を挟むような姿勢となった。

いまや、村崎のモノを口に含んだまま、思い切り体を仰け反らせて、大きく太股を開いて、剃毛され艶々と輝く股間が隠す物も無く村崎の眼前に迫っていた。

「何という柔らかい体や！」村崎が暁美のアクロバティックな体位に驚きの声を上げた。

そして、村崎の眼前に出現した羞恥の花園は、嫌らしい村崎の視線を恥じるかのように羞恥の樹液を内部に溜め、しっとり湿っていた。

女の嗜みとして、事前に銀子から股間に香水を振り掛けられていたので、剥き出しの花弁からは芳香が漂っていたが、その芳香に混じって濃厚な牝の臭いが立ち上がり始めていた。

その生々しい牝の体臭に憑かれたように、目の前に出現した股間の中心の羞恥の花園に両手を伸ばすと、その花弁を左右に広げた。

村崎の無骨な指先が、秘められた花弁の襞に触れた時、隆起した男の物を口に咥えたまま暁美がウッと声を上げた。

両手で上体を支える暁美は、ほとんど逆立ちに近い、苦しい体勢の下で必死に村崎の業物に口技を与えながら、村崎の指先で柔らかい襞が捲り上げられた時、その内部に溜めた熱い愛液が、ドロッと流れ出すのを感じた。

そうこうしている間に、莫塵の上に敷かれた和紙の傍に、高そうな天然石の硯が置かれ、墨汁が並々とその大きな硯に流し込まれ準備が終了した。

「この女は、筆を持たせれば、立派な字を書きますが、あそこに筆を咥えて書いても大層な字を書くことが出来るんですぜ。」

と、黄原が生唾を飲み込んで見詰める村崎會の男達をグルッと見回して説明した。

そして、根本が殊更太く加工された巨大な筆を手にとると晴江に差し出した。

黄原が差し出した筆は、太さが4センチ程で長さが8センチ程のバイブを加工して、バイブの根本に筆の軸先を取り付けた、卑猥な珍芸用の特別な筆であった。

その男根を模した卑猥な部分には、体内に収めてもずれないようにするためか、幾つもの大きな突起が突き出していた。

晴江は哀しげな目で、自分の膣内を責め立てるであろう、そのおぞましい形状をした筆をしげしげと見詰めた後、ホッと一つ溜息を吐くと、諦めたようにその卑猥な筆を黄原から受け取り、太股を開いてへっぴり腰の姿勢となり、自ら股を開いてその太い筆の根本を秘孔の上に宛がった。

そして、フーッと深く息を吐くと、決意した様に筆を握る手に力を込めて、表面に卑猥なイボイボが付いた巨大な男のモノを模したバイブをズブズブと自らの秘裂の奥に埋め込んでいった。

そのバイブに植え込まれた無数の突起が晴江の体を内部から責め立てるのか、自らの手で珍具を埋め込みながらも、時々ピクッピクッと体を痙攣させ、アッアッと小さく喘ぐ様な声を上げた。

周囲を取り巻く男達は、柔らかな肉襞を左右に押し広げ、巨大なバイブが下腹に呑み込まれて行く様子に目を瞠った。

禍々しい形をしたモノは今や完全に晴江の体内に姿を隠し、習字用の長い筆だけが何事も無かった様にピッタリと閉じ合わされたピンクの肉襞の間から真下に向かって生え出していた。晴江の準備が整ったのを見て、黄原が何か書いて欲しい字は無いか、嫌らしい目付きで眺める男達にリクエストを募った。

「晴江の嫌らしいお尻」と書けとか、「ちんちん大好き」と書けとか、男達が面白がって次々に卑猥な言葉を口にした。

黄原が男達の叫ぶ猥褻な言葉を受けるとその一つを晴江に書くように命じた。

両手を膝ひざの上に置いて、力士が股を割って蹲踞の姿勢をするように、大きく股を拡げたまま、腰を真下に向かって降ろし、股間から突き出した筆の穂先を硯に溜まった墨汁の中に深々と浸した。

そして、余分な墨を落とし、穂先を馴染ませる様に、硯の上に何度も筆先を匍わせた。

そんな僅かな動作や少しばかりの力でも梃子の原理で何倍にも増幅されて、晴江の肉洞内に埋め込まれた野太い柄を取り巻く淫靡な突起が晴江の性感を内部から刺激するのか、辛そうに眉を蹙め、アッアッと小さく溜息を漏らすのであった。

筆の準備が調い、精神を集中して真顔に戻った晴江は決心を決めて、股間から筆を吊り下げた蟹股と云う滑稽で卑猥な姿勢のまま、隣に敷かれた半紙の方に向かった。

太いグロテスクなパイプは完全に晴江の体内に没してその姿を隠しており、繁みを剃り上げられ隠す物の無い恥ずかしい褻の間から巨大な筆の軸先が尻尾のように突き出していた。

固唾を飲んで見詰める男達の前で、太股を大きく広げ、腰を落として、普通の女なら恥ずかしくて出来ないような、M字開脚の姿勢を取って紙の上に穂先を置いた。

蹲踞のような姿勢を取る晴江の股間からは、真下に向かって太い筆が突き出しており、その穂先が晴江の体重を受けて和紙の上で柔らかく撓った。

墨書に精神を集中しないと膣内から込み上げる妖しげな感触に負けてしまうと一何かの気合いを掛けるような甲高い叫び声を上げて自分を励ますように、そのまま蟹のように体を横に移動させ、墨痕鮮やかに一文字に横線を引いた。

そして、そのまま少し腰を上げて運筆を続けると、その先に引いた一文字に斜めに交差するように斜線を入れ、腰を艶めかしく動かして、滑らかに筆を運び和紙の上にひらがなで『ち』の字を描いた。

一文字書く毎に筆に墨を含ませ、又もや恥ずかしい動作を繰り返し、大きな和紙の上に男達がリクエストした卑猥な字を書き上げた。

股間に啞えた筆で書いた文字ではあるが、その力強い流麗な書体に男達が歓声を上げ拍手を送った。

村崎も指先で熱く湿った暁美の内部を楽しみながら、「大したもんや！」と感嘆の声を上げた。

「晴江姐さんからは、以前に何度も手書きの手紙を貰って、達筆なおなごやと感心してたが、
■コで書かしても立派な字を書きよるわ！」

暁美に肉茎を啞えられ、暁美の若い身体に顔を埋め甘美な露を貪りながらも、目は晴江の姿に注ぎながら大声を上げた。

重く大きな筆を股間の力だけで支え、長時間へっぴり腰の姿勢で筆を運ぶことは大変な労働であり、字を書き上げた晴江の体はビッシヨリ汗を浮かべ、荒い息を吐いていたが、黄原はそんなことに気を止める事も無く、次のリクエストを求めて、休ませることなく晴江に次々と墨書させた。

晴江の周囲には、書き終えたばかりの卑猥な言葉を並べた、紙が散在していた。

それまで、目で晴江の猥褻な書道を眺めながら、暁美の剥き出しの股間に口付けて、濃厚な

樹液を啜っていた村崎が呆れた様に声を上げた。

「お前達のリクエストは卑猥すぎる・・・今度は『天下太平』と書いてみい。目高組と大亜門戸会の抗争も丸く収まって世間も平和になった事やし。

この女は力強い、え一字を書きよる。これを掛け軸に収めて、床の間に飾って遊びに来た余所の親分さんに、これが元目高組の大姐が、■■■■コ使こうて書いた字やて、自慢したろと思ってるのや。きっと、みんな目を剥いて驚くで！」と、自分の思い付きを楽しそうにしゃべるのであった。

疲労感で腰は非常に重く、筆の柄に取り付けられた太いバイブを啜えた下腹は痛みと妖しげな快美感の様な不可思議な感触を発していた。

何枚も墨書を重ねた後で、疲労で腰はガクガクと震えている状態であったが、黄原に急かされて何度目かの硯の中の墨汁を筆に含ませる作業を行った。

肉洞内部から込み上げる強い感触に突き動かされるのか、股間や顔を真っ赤に上気させ腰をブルブルと震わせ、薄く目を閉じてほっそりと開いた唇からは切なげな吐息を吐き続けた。

既に意識は感じ無くなっていたが、太いバイブを呑み下した晴江の秘孔からはサラサラとした透明な樹液が溢れ出し、筆の軸を濡らして滴り流れ、硯の中の黒い墨汁の上に透明な液が拡がって行った。

晴江のその部分に熱い視線を注ぎ続ける男達は、その様子を生唾を飲み込みながら見詰め続けた。

穂先に十分な墨を含ませた晴江は、ふらつく腰で半紙の上に向かった。

少しでも気を緩めればたちまち崩れ落ちそうになる身内から激しく込み上げる性感に抗い、字を書く事にだけに精神を集中させて、半紙の上に筆を降ろした。

鋭い気合いの様な声を上げて、腰の震えを押さえ込み、何とか和紙の上に見事な字で天の字を書き上げた。

硯に向かい再び穂先に墨を含ませている間に、黄原が村崎の傍に歩みよると、何やら村崎の耳元で囁き始めた。

「実はですね、今晴江が啜えている筆の軸先に取り付けられた張り型はリモコンバイブになっているんですよ。このリモコンで動かせますから、晴江姐御を遠隔操作して見てはどうですか？」と、懐からリモコンのコントローラを取り出して村崎に手渡した。

村崎は黄原の差し出したコントローラを興味深そうに受け取った。

『下』の字を書いている途中で、長く下に縦線を伸ばしている所で、村崎が突然リモコンのボタンを押したので、晴江は何か弾かれたように腰を振るわせ、本来筆先に力を溜めて縦線を止める所が跳ねるような字になってしまった。

その様子を見て「おいおい！字が違うだろう！そこは跳ねる所じゃないだろう？」と、身悶える晴江に男達が面白そうに野次を上げた。

更に村崎は、リモコンの色々なスイッチを面白がって操作して悶えさせたので、『太』の字の横線は、最早力強い一文字の横線とはならず、波を打つような上下にくねくねとうねる線となったしまった。

「ああー！なんちゅうひどい字や！これでは床の間の掛け軸は無理やな！代わりに寝室に飾っておこうか？この字を見る度に晴江姐さんの悶えっぷりを思い出すことやろ！」と、暁美に男根を含ませながら、大きな腹を揺すって笑った。

なおも面白そうに、リモコンを操作するので、とうとう晴江は字を書き進む事も出来なくなり、和紙の上で四つん這いに倒れ込んでしまった。

「全く何んちゅー書道や！半紙の上に俯せになって、汐噴いてイキよったで！」

胎内から責め立てる激しい刺激に最早身体を動かす事が出来なくなった晴江が半紙の上に突っ伏しながら大声で泣きじゃくった。

男達の卑猥な嘲笑の中で身悶える晴江を終わる事無く、パイプの激しい振動が責め立て、尻尾のように股間から突き出した筆の穂先がグルグルと宙で揺れ動いた。

激しく振動する穂先から墨が飛び散り、和紙の上に無数の染みを作って行った。

後ろ向きのため、母の姿を見ることは出来なかったが、周囲の様子から、また残酷に責め立てられている事を理解した暁美が、村崎の熱く隆起した肉塊を口腔でしごきながら、熱い涙を流した。暁美の流す涙が頬を伝って、村崎の股間を濡らした。

「どうも、大変失礼しました。掛け軸にする書は、この後で晴江の体調が良い時に書かせますので、今日の所は酒の席での余興だと思って笑って下さい。」

黄原が村崎に詫びの言葉を述べた。

そして、和紙の上にうずくまって尻を高く上げたまま身悶える晴江の尻を蹴り上げると、「おい！何時まで良い気持ちで汐を吹いていやがんでー！」と、怒鳴りつけ、ブルブルと振動を続ける筆を鷲掴みにして、ズボッと音を立てて、体内から乱暴に引き抜いた。

自分を内部から責め立てていた性具を抜き取られ、ほっと安心したように気を抜いて、放心するように倒れ込もうとするのを、黄原は許さず、手を掴んでぐったりとした晴江の上体を

無理やり引き起こすと、憎い男達の前で二度までも羞恥図を晒してしまった悔しさに耐え切れず、泣き叫ぶ女を引きずるように村崎の前まで連れて来た。

一方曉美は、逆立ちの様な姿勢で海老反りに背を反らして男の肉茎を口腔で愛撫するという、苦しい体勢からようやく解放されていたが、筋肉が硬直して痺れたように動くことが出来なかった。

悲鳴を上げるような背中の中の張りのために身動き出来ず、村崎の肘掛け椅子の傍に蹲る曉美の目に黄原に引きずられるように連れて来られた哀れな母親の姿が目に入った。

「どうだ？パイプで内部を搔き回されて、熱い生身の肉棒を突っ込んで貰わないと我慢が出来ないだろう？」

黄原が蔑むような目で、嫌らしい笑みをたたえて聞いた。

黄原に指摘されたように、銀子達の調教で肉体改造された熟れた女体は、ドクドクと血の通った熱い肉棒で、パイプを取り去られた後の虚ろを満たして欲しいとの欲望で抑えることが出来なくなっていた。

どうだ？と念を押されて聞かれ、恥ずかしそうに晴江の首が肯いた。

「それじゃ親分をお願いしてみろ。」と、畳み掛けられて、目高組を裏切り敵方に付いた憎い男を見詰めた。

この非道な男に哀願するのは気が遠くなるような屈辱であったが、ジンジンと股間から突き上げる欲求は、そのような意地を溶かしてしまうよう熱い疼きであった。

「お願いします・・・」涙に潤んだ目で村崎を見詰めながら小さく言葉を発した。

「何や？」晴江の懊悩を目にしなが、村崎が素知らぬ素振りで聞き返した。

「お願いします・・・入れて下さい・・・」頬を紅潮させて、小さな声で哀願した。

「何や？・・・何を何処に入れて欲しいんや？」なおもとぼけた素振りで聞き返した。

「親分の逞しいチンチンを晴江の嫌らしいオコに入れて下さい！」とうとう我慢出来なくな、泣くような声を上げた。

「そうか、そうか？そんなに色っぽい目で見詰められて頼まれたら、しゃー無いな。こっちにおいで。」

村崎に手招きされて、黄原や剛沢も手伝って晴江を村崎の座る大きな肘掛け椅子の上に載せ上げた。

村崎と向かい合って座るため、晴江の両脚は左右の肘掛けの上で大きく開いた。

その開き切った股の中心の村崎の隆起した物がズブズブと埋め込まれて行った。

「何や、これは？ヌルヌルのグチョグチョやないか！それに中は熱く火照っているで！」

熱い女の樹液を溢れさせる秘孔を貫きながら村崎が感激の声を上げた。

銀子達に調教され、何時も股間に逞しい物を受け入れていないと我慢出来ない体に肉体改造された晴江の女体は、いったんバイブで点火された肉欲の炎を、村崎の肉棒に引火させようとするかのように、無意識に深く内部に呑み込んだ肉塊を締め付けた。

「おお！これは良い気持ちや！」

村崎が満面に笑みを浮かべて声を上げた。

そして、眼下にある全体刺青が施されたお椀型の乳房を揉み上げた。

その指が硬く凝った乳首を揉んだ時、晴江が思わず甘い声を上げた。

その甘い悲鳴を遮るように、薄い半開きの唇に村崎が分厚い唇を重ねた。

まだ疲労感で立ち上がれず、村崎の傍で蹲る暁美の前で、母と憎い男が対面座位で交わり、乳房を揉み上げられ口を吸われていた。

「さあ、さあ、いよいよ真打ちの登場だ！この芸を見たら皆さん驚くこと請け合いだ！」と、黄原が手を叩きながら、じっと村崎と晴江の交わりを見続ける男達に声を掛けた。

お竜が手に幾つものゆで卵が入った箆や、その他の小道具を持って現れた。

「お竜は、さつきから体を動かし詰めで、お腹が空いて仕方ありません。誰かお竜のお腹に卵を食べさせて下さいな・・・」

と、微笑みながら男達にゆで卵を配って歩いた。

お竜の意図を察した男達が、お竜の手からゆで卵を奪い合った。

一渡り卵が行き渡ってから、お竜が片脚を大きく上げて、開き切った股間を男達の方に向け、右手の指先で女の花園の柔らかい襞をゆっくり開いて行った。

男達の視線の先には、綺麗な色をした襞の奥に、ぬめ輝る華洞が開いていた。

お竜と視線が合った男が、黙って、その開け広げられたサーモンピンクの柔らかい秘孔に手にした卵の先を押し当てた。

すると皆のしている前で、男が手を離れた卵はスルスルと体内に吸い込まれて行った。

お竜の芸に唾然とする男に笑みを浮かべて、「どうもご馳走様！でもお竜のお腹は、卵一つくらいでは足りないわ！」

と、言うのと、股を割って尻を後ろに突き出したり、色々な体位を取りながら、村崎や取り巻きの男達が手にする茹で卵を、腰を蠢かして何個も次々に膣内に吸い上げていった。

お竜のその部分の鍛え上げられた吸引力に男達は目を見張った。

そして、卵の吸引が終わると、お竜は卑猥にクネクネと腰をくねらせ、男達に尻を向けると鶏の鳴き声を真似しながら、一つ一つ産み落として行った。

今が盛りと成熟した女の柔らかく肉付いた股間の幾重ものピンク色の襞を押し開いて、卵がその白く照り輝る表面を覗かせ、一個一個と産み落とされて行く様子に男達は、官能の芯を揺さぶられるように目を血走らせてその一点を凝視した。

一心不乱に猥褻な芸に集中することにより、この気も狂い出さんばかりの惨めな境遇を忘れようとするかのように必死の思いとなって、野卑な男達の嘲笑を浴びせられながら秘奥を晒すのであった。

この豊満な美女が演じる滑稽で卑猥な芸に、男達は笑いさざめき、盛んに喝采を送った。

お竜のその部分が持つ、常人には無い能力に気付いた剛沢は、特別に花電車のプロを呼んで特訓をさせていたのだった。

卵を吸い上げたり、吐き出したりするくらいなら、今では晴江でも暁美でも出来るようになっていた— 厳しい訓練の成果が出るのはこれからだ、と剛沢は醒めた目でお竜の艶技を見つめていた。

次に、お竜は白と黒の碁石を間隔をおいて幾つも畳の上に並べると、その置かれた碁石の上にゆっくりと尻を落として行った。

自らの秘裂を畳の上に置かれた碁石に押し付け、再びお竜が腰を上げた時には畳の上に置かれて碁石はその姿を消していた。

まるで手品のようなお竜の技に男達は歓声を上げて拍手した。

こうして、次々と畳に撒かれた白黒の碁石を肉孔の圧力だけで次々と体内に吸い込んで行った。

畳の上の全ての碁石を吸引し終わると、お竜は客に白か黒かどちらの碁石を出して貰いたいのか尋ねた。

村崎に随行して来たサングラスの男が白と言うと、畳に両手を後ろ手について、股を男達に向けて大きく開いて、腰を宙に浮かして、妖艶に腰をグラインドさせた。

妖しげに腰を振りながらも下腹の筋肉が、忙しげに蠢くのが男達の目に入った。

そして、飾り毛を失った隠す物の無い、剥き出しの股間の奥の複雑な襞が少し開くと、白い物が僅かに姿を現した。お竜は下腹に力を込めると、リクエストした男の方に向けて、まるでスイカの種を吐き出すように、プッと白い碁石を発射した。

これには、見守る男達も思わずフーと溜息を吐き、次に歓声を上げて拍手喝采した。

次に黒石と言うと、同じように妖しく腰を蠢かせて、黒石を吐き出した。

「上等の碁石は、黒石は本物の那智石、白石は高級な蛤の貝殻から作ってあるから、素人でも指先の感触だけで、目を瞑っていても白黒の判定は出来るが、アソコの中でその表面の滑り具合の違いを見分けて、選別して産み分けるとは大したもんや！」と、晴江の裸身を愛撫する手を休めて、村崎親分も感激して手を叩いた。

碁石を使った珍芸を終えると、次に賽子を二個使った珍芸の披露を始めた。

右手の細い指の間に二つの賽子を挟むと、へっぴり腰となった自らの股間を開いて賽子を挿入して、蹲踞の姿勢のまま腰を何度も振り立てた。

その蠱惑的な腰の回転で男達の間を楽しませた後、大きく脚を開いたまま畳の上に置かれた白布を撒いた30センチ四方ほどの盆菴の上に股間を下ろした。

「よござんすか？丁半どちらにお掛けなさんすか？」と、目の前の男に艶然と微笑みかけて訪ねた。

お竜から色っぽい目で見詰められた男が、ゴクリと生唾を飲み込んで、丁！と叫んだ。

「勝負！」と、自らの身体を丁半博打の壺に見立てたお竜が、盆菴の上から腰を持ち上げた。白い布上には、二つの賽子が一の目を上に向けて残されていた。二つの賽子はお竜の愛液に塗され、妖しく照り返っていた。

「ピンズロの丁！」と、剛沢が声を上げた。

見守る男達が、感極まってフーッと溜息を吐き、次に拍手喚声を上げた。

その後も二つの賽子を使って男達のリクエストに従って丁の目でも半の目でも自由に出して見せた。

この妙技に感動した男達から、お前、賭場の時もそうやってイカサマしてたんじゃないかーと、盛んに声を掛けられた。

男達の野卑な野次に晒されながらも、艶然と微笑んで自らの肉体を駆使した珍芸を次々に披露するお竜であった。

昼夜を分かつたぬ壮絶な修行の末とは言え、短い間に良くここまで技を身に付けたものだ・・・と、剛沢はその過酷な調教の様を思い出した。

花電車のプロによる、毎日休みの無い過酷な調教を受けて、体内から突き上げる苦痛に泣き叫び、悶絶し、股の間から無様に体液を溢れさせて意識を失っても、その都度下半身を痙攣させながら悶える体に水を掛けられたり鞭打たれたりして覚醒させられ、少しの休みも与え

られることなく、疲労しきった体に容赦なく次々と碁石を埋め込まれたり賽子を押し込まれ、意識は朦朧となりながらも、必死の思いでぼろぼろになった肉体を酷使して、膣の肉と褌を使って碁石をより分ける技や賽子を転がす技術を習得させられていた情景が臉に浮かんだ。しかし、いくらプロの過酷な調教を受けても元々素質が無ければ、こんな芸当は身につく物では無い・・・事実、晴江や暁美には同じような調教を施したが、ここまでには至らなかった。恐らくこんな素質を生まれながらにして持った女は、何千人に一人、いや何万人に一人くらいかも知れない。

そんな常人には持ち得ない素晴らしい能力を秘めた女が自分の手に落ちた幸福感に、剛沢は一人酔い痴れるのであった。

数々のお竜の秘芸に魅了された男達の興奮が少し落ち着いて来たのを見て、剛沢が懐から煙草を取り出して口に咥えた。

すかさず横から亜紀が咥えた煙草の先に火を点けた。

ふうーと一服して旨そうに煙を吐き出すと、「どうだ？お前さんも一服するかい？」と咥えていた煙草をお竜に差し出した。

剛沢から火の点いた煙草を受け取るとお竜は、その手を大きく開いた股間に持って行った。

そして、その秘奥の中心の秘孔にあてがうと、下腹の筋肉を緊張させた。

すると、赤い穂先が見る見る後退し始めた。

そして、次に再び下腹を緊張させると、夥しい紫煙が、お竜の秘孔から吐き出された。

何度も女陰を使つての喫煙を繰り返し、お竜の下腹の回りに濃い紫煙が漂っていた。

その妙技に唾然とした表情で見詰める男達に、「どうしたんですか？みんなそんな煙に巻かれたような顔をして？」と、濃い煙越しに艶然と微笑むのであった。

村崎の物を咥えていた晴江に代えて、花電車の珍芸を終えたばかりのお竜に交代させた。

村崎も散々女と遊んで来た男だったので、晴江の絶妙な膣腔には、充分堪能し、気もそぞろになりつつも、周囲に子分達が居る手前もあり、射精するまでには至らなかった。

剛沢は、お竜を犬の様に村崎の前に四つん這いにさせて、尻を高く上げさせると、晴江との交接により固く隆起した村崎の物で後ろから突かせた。

「大丈夫かいな？あんな凄い技を持ったオ●●●に入れたら、俺のん食い千切られてしまうんやないやろか？」と、尻込む村崎にお竜の方から誘い込むように尻を動かして、シットリと

湿りを帯びた柔らかく膨らんだ花肉をまだ晴江の愛液で濡れそぼる村崎の肉茎に押し当て、グイッと腰を押し出して体中に埋没させた。

村崎は、その柔らかく自分の物をネットリと締め上げ、胎内の深奥に向かって吸い上げようとするかのように微妙な運動を示す、温かい肉洞に思わずウツトリとした声を上げた。

最後に剛沢が用意したショーは、晴江が最も嫌がるショーであった。

それは、母と娘による白白ショーであった。

固唾を飲んで見守る男達の目前に薄い布団が敷かれ、晴江と暁美が布団の上に押しあげられた。

目に好色な光を宿らせた男達が、これから繰り広げられる、母と娘による淫猥なショーに期待して布団を取り囲むように集まって来た。

晴江にしても、さつきから満たされない体の疼きを感じてはいたが、さすがに憎い男達の目の前で、実の母子の醜態を演じることが耐えられず、布団の上に両手をつきながら男達に土下座して、涙を浮かべながら、そればかりは堪忍してくれるように哀願した。

剛沢が怒ったような顔をして、「ならねっ！成る程お前達は、実の母娘かも知れないが、今では母娘そろって大亜門戸会のために働く娼婦だ。そんな下らないことで恥ずかしがっていずに、さっさと初めて客を楽しませろ！」と、凄んだ。

「お母様、止めましょう・・・私是一向に構わないわ・・・」と、暁美が優しく微笑むと、晴江の手を引いた。

かつては奈和親分とも兄弟の杯を酌み交わし合い、同じ仲間として友誼を保って来た組の親分連中の前で、娘と交わらなければならないという気も狂いそうな程の屈辱と羞恥から逃れる唯一の方法は、逆に自らを肉欲の嵐の中に叩き込み忘我の境地に浸るしか道は無いと、哀しい諦めのような気持ちに浸ると、布団の上に仰向けに横たわる暁美の上に晴江が体を預けるように横になった。

晴江が唇を若く張りのある暁美の白い肌に這わせると、思わず暁美がウツと声を上げて、ビクッと片膝を収縮させた。

晴江はそのまま細くしなやかな指を、暁美の裸身に這わせながら、唇で全身をまさぐった。母親の愛撫に感じるのか、それともこの異常な環境が暁美の神経を掻き立てるのか、暁美の両の乳首が硬く凝って来たことを男達は発見した。

晴江はその隆起を始めた乳首を優しく口に含んで舌先で愛おしむように愛撫した。

暁美は恥ずかしそうに両手で顔を覆った。

暁美を責め立てる内に、自分も興奮し始めたのか、晴江も自分の硬く凝ってきた乳首を暁美の乳首に押し当てた。

仰向けに横たわる暁美の上に、自らの体を預け、乳房と乳房、下腹と下腹を擦り合わせた。もっと激しく腰を振れ！と、酒に酔った男が横から手を伸ばして、明美の秘部と自らの秘部を擦り合わせている晴江の尻をパシッと叩いた。

その嫌らしい手の感触に、晴江はまるで電気が流れたように腰をビクッとさせた。

いまや野卑な男たちの卑猥な声援と嫌らしい手に急き立てられるように暁美に挑む晴江の姿があった。

大柄の暁美の白い体の上に、細身の晴江が全身に汗を浮かべて総身彫りの極彩色の刺青を妖しく蠢かせながら男役となって責め立てた。

受けて立つ暁美も真っ赤に体が火照り汗を浮かべ母親の責めの前に恥ずかしげになよなよと全身を身悶えさせていた。

やがて半開きの唇から発する吐息が甘いものと変わって行き、股間が温かく潤って来るのが、男達の目にも分かった。

「嬉しいじゃ無いかよ！奈和の女房と実の娘が大蛤と赤貝の剥き身を堂々とさらけ出して、俺たちの前で白白を演じてくれるなんてよー！」

「パツクリと割れた二枚貝の間から、貝汁が溢れ出して来たぜ！」

男達の卑猥な野次も今は気にならないかの様に、むしろ逆に野卑な罵声が女達の被虐の快感を掻き立てるかの様に自らの女を濡らして、娘の体に挑んで行くのであった。

かつての権勢を誇ったヤクザの組の大姐とその実の娘が、落魄れて惨めな、なれの果ての姿をかつての同僚達の前で晒す姿に、痺れるような快感を掻き立てられた男達は、乳房と乳房を擦れ合わせ、下腹と下腹を押し付けあう二人の女の扇情的な姿に、「とんがった乳首と乳首を絡め合って、擦りっこしろ！」とか、「もっとワレメとワレメをぴったり合わせて、激しく腰を振り合え！」とか、「もっと腰を突き立てろ！」とか興奮して大きな声で囃し立てた。

今となっては、その男達の卑猥な野次も逆に心を燃え上がらせる応援のように聞こえていた。

暁美のシットリと潤いを示す股間に晴江が優しく手を添えた。

そして、貴重な物を扱うように、盛り上がった丘を中心とした柔肉を優しく揉み上げた。

いまや暁美は強制されずとも自らの股間を男達に向けて大きく開いていた。

そして、その中心からは豊かな愛液が、まるでこんこんと湧き出す泉の水のように滴っていた。

晴江は熱い愛液を流し続ける、乙女の花洞にしなやかな細い指を差し入れ、その内部をまさぐった。

同性の、しかも実の母親から自分の最も敏感な部分を優しく愛撫されて、暁美は体をビクビクと緊張させると、堪え切れず軽く失神した。

男達の卑猥な視線を浴び続け、異常な興奮の中で上気した暁美の白い肌が熱を持って桜色に染まっていた。

男達の粘っこい視線が二人の女の裸身に注がれていた。

軽く絶頂に達した暁美は、しばしその甘い余韻に浸った後、物憂げに体を起こすと、晴美の手を取って、「今度は、私の番よ・・・」と、笑みを浮かべて母親の目を見つめて、そのまま母親の唇に唇をそっと重ねた。

突然実の娘に唇を奪われた、晴美はウツと唸るよう声を上げると、全身から力が抜けるように布団の上にくずおれていった。

そして、仰向けに横たわる母親の上に今度は暁美が体を預けて行った。

柔らかい若い張りの在る体で、母親の体を十分に擦り立て、極彩色の刺青を施された両の乳房を優しく掌に包んで柔らかく揉み立て勃起してきた乳首にそっと口付けした。

娘の柔らかい唇が敏感な先端に触れて、晴江がビクッと上体を収縮させた。

そのまま、暁美は母親の腹の上で向きを変えると、晴江の開かれた股間に顔を埋めた。

両手の指で剃毛された母親の良く熟れた恥ずかしい花弁を優しく開いて、その内部をあからさまに晒すと、その中心向かって舌をそっと差し入れた。

突然の娘の舌による攻撃に晴美はウツと呻いて、なよなよと体を震わせた。

充血して柔らかく膨らんだ左右の花弁に熱い舌先が触れ、恥ずかしそうに勃起した陰核を優しく舌先で転がされ、「アアッ、嫌！」と、思わず甘い悲鳴を上げた。

「アアーン、イヤーンだってよ、いい年して随分甘ったれた声を出すじゃないか」と、男達から盛んに揶揄された。

攻撃を受け、ウツトリと霞む晴江の目の前に、剃毛され童女のように隠す物の無い娘の股間が開け放たれていた。

その甘い花のような香りを立てる、華洞を両手で押し広げると、おずおずと顔を上げて娘の股間にそっと口付けした。

晴美が母親の柔らかな口唇を自らの秘部に受けて、ウツと快感の電撃を受けたように顔を歪めた。

見物の男達は実の母娘による69の艶技に身を前に乗り出して、熱っぽい視線で食い入るよう見つめた。

お竜の体内に挿入して、鍛えられた膣壁によりリズムカルにしごき上げられ、快感に浸っていた村崎親分の分身もこの刺激的な情景に興奮が昂進したのか、お竜の膣内で一層固さを増した。

母と娘は、今はもう憑かれたように、互いの秘所に指を這わせて愛撫しあい、股間に顔を埋め、肉洞に舌先を挿入して互いの秘奥から流れ出す甘美な愛液を啜り合った。

見守る男達の熱気を巻き上げながら、そして男達の熱気に煽られるように、母と娘の行為は更に白熱していった。

時には相手を俯せにさせ、腰を高く擡げさせると、その迫り上がった尻の中心に存在する菊の花弁に唇を押し当て、舌を延ばし手その内部をまさぐった。

真に愛する者にしか出来ない没我の境地の愛情行為に見る者は言葉も上げず目を瞞って食い入る様に見詰め続けた。

我を忘れたかの様に、女同士の性行為に没頭し、激しく互いの愛を確かめ合っていた二人は、突然ウツと呻いて体を仰け反らし絶頂を迎えた。

二人同時に頂点を極め、体を緊張に仰け反らしたまま、しばしその余韻に浸った娘は、やがて力が抜けてくずおれるように母親の体の上に倒れ込んで行った。

そして、見物の男達の野卑な視線も気にならないのかのように、互いの裸身を抱きしめ合うと、大腿や下腹に優しく唇を這わせ、燃え上がった愛の残り火を確かめ合った。

「いやー、お見事、お見事、お前達何だかんだ口では、清まし込んだ事を言っていたが、本当はこういう事が好きだったんじゃないか？」黄原が手を叩き、卑猥な笑みを浮かべて近づいて来た。

「だけど、女同士の、指や舌を使った愛撫だけじゃ物足りないんじゃないか？」と、続けて聞いてきた。

女同士の技巧により、続けて2度軽く絶頂を極めたけれど、確かに黄原の言うとおりに、連日変態客から性具や陰茎により責め立てられ、就寝中も銀子から張り型を埋め込まれて鍛えられた体は、今やセックス依存症のような状態に変えられており、体内に太い物を埋められないと本当の意味での深い絶頂を迎えられない、性飢餓体質と成り果てていた。

軽い絶頂を経験した事により、逆に女体の深い部分では更なる快感を貪欲に求めて疼いているところであった。

黄原に凶星を突かれて、項垂れる二人の間に、黄原が長いディルドウをぶら下げて見せた。それは、ウナギのように太くて長い胴の両端に男性の亀頭を摸した物が付けられており、かつてお竜との行為において無理矢理使わされたことがあったが、今回の物はそれより二回りは大きな物であった。

その毒々しく太い先端部分は、並の日本人の大きさより遙かに大きく、これまで経験した客の中にもそのような大きなモノを持つ客はいなかった。

まだ男性経験の少ない娘には酷なのではないかと晴江は思った。

しかし、先ほどから自分の股間から沸き上がる渴望の疼きには耐えきれず、目の前にぶら下げられた、醜怪な性具におずおずと手を伸ばしてしまうのであった。

「許しておくれ、暁美・・・」

「良いのよ、お母様・・・」と、目に涙を一杯浮かべて太い性具を握り締める母親に、自分の体に発生している、ジンジンと疼く様に内部から突き上げるのと同じ苦悶が、母親にも襲っているということを理解した暁美が優しく応えた。

そして、晴江は黄原からディルドウを受け取ると、もどかしく自分の股間に埋めていくのであった。

暁美も母の苦悩を少しでも楽にするべく、その一方の端を自分の股間にあてがうと、力を込めて内部に没入させようとした。

性経験豊富で子供を産んだ経験のある晴江でも、そのディルドウは晴江の肉洞を内部から思い切り押し広げ、その大きさに息が詰まりそうになるのであったが、まだ経験の浅い暁美に取っては、大き過ぎる物であった。

暁美が辛そうに眉を寄せながら、息を殺して、なおも力を込めて、股間の筋肉を切り裂くように大きく押し広げ、ズブズブと自分の体内に埋め込んでいった。

畳の上に広げられた布団を取り囲む男達の目に、完全に埋没したディルドウが暁美の股間の柔肉を一杯に押し広げ、一寸の隙間無くぴっちりとはみ込んでいく様子が映った。

娘の張り裂けそうな股間を目にして、晴江は自分が実の娘の純潔性を破壊しようとする男達のために片棒を担いでいるのでは無いかと哀しい気持ちに襲われた。

自分もヤクザの組長の女房として、これまで何人もの罪も無い女を娼婦に仕立て上げる手伝いをして来た。

そして、そのような哀れな女たちの純潔を蹂躪して組の資金稼ぎのために平然と働かせて来ていた。

一方、これに矛盾するが、自分も世間の親並に、自分の娘の純潔性は守ってあげたいと思って来た。

しかし、天はその相対する矛盾を見逃さず、今天罰として私たちにこの様な業を架したのか、それともこれまで目高組のために肉体を磨り減らして来た何人もの女の恨みが呪いとなって、降りかかって来たのだろうか―と、あれこれ思いを巡らせていると思わず涙が流れ落ちた。

母と娘が性具の両端をしっかりと体内に収めたことを確認した黄原が、さっさと始めると晴江の肩を叩いた。

最初は互いに座位で向き合うような形で体を動かし始めた。

互いにゆっくりと腰を前後に動かすと、晴江の体内に収められた先端部分が醜怪な顔を秘裂から覗かせたり、柔らかい女の源泉に隠れたりした。

曉美の方は、まだ隙間無くしっかりと食い絞めており、余裕が無く辛そうに眉を顰めて、腰を振り続けた。

やがて、股間から突き上げる、おぞましい快感の濁流の巻き込まれたように、晴江は大きく仰向けに仰け反り、空いた両腕で自分の乳房を激しく揉みしだき始めた。

曉美の体もようやくこの巨大な物に馴染め始め、肉洞にも潤いが出て来て、ピストン運動が出来るようになってきた。曉美の体内に埋没していた性具が外部に引き出されようとする時、そのえらの張った大きな亀頭部が、曉美の赤く充血した、体内の襞と一緒に引きずり出し、押し込まれる時は、肉孔の周囲の筋肉を巻き込んで埋没する様子が、男達の目にハッキリと映った。

膣内部で前後に暴れる巨大な亀頭部はこれまで味わった事のない、息も止まるような苦痛を曉美に与え続けた。

しかし、そのズンズンする息も止まるような苦痛が、次第に不可思議な快美感に変わり始め

るのを、男達の嘲りも嫌らしい視線も気にならなくなった、靄が掛かったようにボンヤリとする頭の中で感じ始めていた。

一方、晴江の方は巨大な亀頭が巻き起こす、凄まじい快感に巻き込まれ、自分を完全に見失ったように、唇を半開きにして、涎を垂れ流し、訳の分からない事を呟きながら、左手で自らの乳房を荒々しく揉みしだき、右手で股間に勃起した陰核を激しく刺激していた。

そして、更なる強い快感を求めるかのように、性具を驚掴みにすると自分で激しく前後に突き動かした。

その激しい動きは、当然もう一端を啜える娘にも伝わり、暁美が悲鳴を上げた。

そこには、理性をかなぐり捨て、浅ましく性の頂点を求めて逝き狂う、牝の本能に目覚めた、一匹の獣がいるように暁美の目に映った。

可哀想なお母様、早くお母様を楽にして上げないと・・・と、母親の醜い姿を眺めて、目に涙を浮かべ、自らの懊悩と闘いながら、母親の苦悩を解決しようと哀しい決心をする暁美であった。

暁美は、意を決して体を起こすと、快感に悶え狂う母親の上に体を預け行った。

人間としての理性をかなぐり捨てたかのように、快感に悶え狂う晴江を見ながら、「こんなに効き目が有るとは思わなかったな・・・」と、黄原が独り言を漏らした。

実は双頭のディルドウの一端に銀子から受け取った催陰剤を塗布しておいたのであった。親分子分の間柄による遠慮や母子の間の情や父の愛人に対する反発など複雑な感情の蠢く暁美とお竜や晴江との間に無理矢理レズビアン関係を結ばせるため肉体調教時に使用した事のある恐ろしい効果を発揮する秘薬がタップリと塗り込められており、いまその激烈な効果を発揮し始めたのであった。

母親の乱れぶりを見て、又あの恐ろしい秘薬が使われたのだと暁美は理解した。

そして、その秘薬の効果から母を助けるためには母を絶頂に導く以外に無い事を知っていた。とは言え、塗り込められた秘薬の効果を打ち消して絶頂に導くのは、今の自分の精力を使い果たさねばならない程大変な努力が必要な事も経験していた。

それでも、冷酷で淫猥な男達が見詰める中で、悶え狂う母親を早く楽にして上げようと、自らの苦悶と闘いながら、晴江を絶頂に導こうと努力する暁美であった。

暁美は激痛と闘いながら、激しく強く腰を振り立て、母親の乳房を揉み、涎を垂れ流す口に口付けして舌を差し入れた。

暁美の母親を早く絶頂に導こうとする哀しい努力を眺めながら、この催陰剤を使うのは初めてだが、強烈な快感が絶え間なく襲う割には、何時までも絶頂を迎えることが出来ない、女性に取っては地獄のような薬だなーと、思った。

強烈な快感に支配され、股間から愛液を滝のように溢れさせ、まるで小便を垂れ流したように、畳の上に惹かれた布団をビショビショにして悶え狂う母親と、その母親にとどめを刺すことにより、一刻も早くその快感地獄から助け出そうとする娘の、肉と肉の格闘に男達は、目を血走らせ、声をあげることも忘れて、食い入るように見つめた。

互いに汗に塗れた素肌を擦り付けあい、母親の性感帯を必死で責め続ける暁美の姿があった。激しく股間を出入りする性具も今は、苦痛は消え失せ、代わりに大きな快感の高波となって暁美を襲っていた。

暁美の必死の努力が実ったのか、それとも催陰剤の効果が薄れてきたのか、晴江の様子に変化が見られ始めた。

自らも限界を通り過ぎた快感の渦に巻き込まれながらも、母親が頂点を迎えるのも近いと感じた暁美は、朦朧とする意識の中で最後に力を振り絞り、腰を激しく振り立て、汗に塗れた下腹と下腹を重ね合わせ、勃起した乳首と乳首を擦り合わせた。

その瞬間、母と娘は悲鳴のような大きな声を発して絶頂に達した。

激しい性の格闘の末に精魂使い果たした母と娘は、意識を失ったかのように崩れ落ちた。

この母と娘の凄まじい崩壊の姿を間の当りにして、これまで幾多の女と遊び、大概の性的興奮には慣れた村崎であったが、とうとう堪え切れず、お竜の体内に突き立てていた怒張がビクンと反応すると、堰を切った様に激しく精液をお竜の膣内に放出した。

宴会がお開きになった後も、凄まじかったショーの余韻を楽しむかのように村崎とその取り巻き達が楽しそうに語り合っていた。

男達は最前まで眺めていた女達による激烈で淫猥なショーの興奮から未だ冷めやらず、口々に感想を述べあっていた。

その時、「お食事の用意が出来ました。」と、村崎一行が占める和室の襖を開いて、剛沢に率いられた大亜門戸会の一統が入って来た。

和室故に村崎達一行は、座椅子に座っており、上の方は見えないが、大亜門戸会の三下達が数人掛かりで何やら大きな木のまな板の様な物を担いで来ていた。そのまな板は全部で3枚

あった。

三下達が重そうに、巨大なまな板を村崎達の目の前に下ろすと、村崎一行は目を丸くして驚いた。

「女体盛りとは、洒落ているじゃないか！」

見ると、一枚一枚の巨大なまな板の上には、全裸の晴江とお竜と暁美が横たわっており、手足をまな板の四隅に大の字に縛り付けられていた。その身動き出来ない女達の裸身の上や体の周囲には、旨そうな寿司や刺身やオードブルが所狭し、と並べられていた。

「田舎故、何も無くて申し訳ないが、こんな物でも摘んで下さい。」と、剛沢が村崎達に挨拶をした。

男達は歓声を上げると、我先にと箸を手に手に女達が横たわるまな板の周りを取り囲んだ。男達が、一斉に女体の上に並べられた美味に箸を延ばし始めた。

美しい女体の上に並べられたご馳走を歓声を上げてついでに男達に、銀子や剛沢の愛人達が酌をして回った。

男達の箸が自分の体を、突き回す不快感に女達はじっと耐えていた。

やがて、男達に酒の酔いが回り、食欲が満たされて来ると、男達は目の前の身動き出来ないようにまな板に固定された無防備な女達に悪戯を始めた。

食べ物を取る振りをして、女達の柔らかい体をあちこち突いたりして、女達に悲鳴を上げさせたり始めた。

「おお！ここにフルーツが在った！」と言って、暁美の乳首を箸で摘んで引っ張り上げようとしたり、「こちらには、イクラが在ったぞ！」と、箸で女の股間を搔き分け、姿を現した赤く充血した陰核を摘み上げようとして、仲間同士で笑い合った。

抵抗出来ない自分達に狼藉を加え、快感に酔い痴れる男達を恨めしげな目で見詰めて、

「昔、杯を交わし会った男の女房や娘にこんな事をするとは・・・お前達はそれでも渡世人の端くれか？任侠の世界に生きる人間として恥というモノを知ったらどうだ！」

晴江が込み上げて来た悔しさに涙を溜めて叫ぶ様に言った。

「おいおい！このアマ、素っ裸で大股開いて恥ずかしいモノを堂々と見せ付けながら、俺たちに説教しようとしているぜ！」

それを聞き咎めた男が、ニヤニヤと淫靡な笑いを見せて、晴江の肉襷を摘んで大きく左右に押し広げて、内部構造を皆の前に示しながら笑い声を上げた。

「何を古臭い事言っていやがる！」

別の男が、晴江を睨みながら凄むように言った。

「この世界ではな、一番嫌われるのは負け犬なんだ！水に落ちた犬は散々叩かれて、尻穴の毛まで筆り取られるのがこの世界の掟なんだ！」と、晴江の隆起した肉芽を捻り上げるように摘み、晴江に悲鳴を上げさせながら喚いた。

「お前たちもこの世界に一度は足を置いた人間なら分かっているだろう・・・この世界では女はしゃぶり尽くされるだけの存在なのさ・・・お前たちがただの醜女^{ぶす}だったらこんな目には合わなかったろう。まあ、綺麗な女に生まれて来たことを呪うんだな・・・」

酒がまわった男が嬉しそうに晴江の大きな陰核を指先で弾きながら口にした。

男の指で何度も敏感な部分を弾かれその都度悲鳴を上げながら、男の言う通り自分のただの女に過ぎず男社会の中でしゃぶられるだけの人間だと、思い知らされるのであった。

「ほら、皆さん食後のフルーツをお持ちしたわよ」と、男達の食欲が満たされ、女達への悪戯が始まったことを理解した銀子が、気を利かせて、バナナやイチゴなどのフルーツとズッキーニや胡瓜や茄子やトウモロコシなど生の野菜を一杯に盛った大きな箸を持って来た。

「生の野菜は体に良いのよ。」と、男達に目の前に箸を置くと、銀子の意図を理解した男達がゲラゲラ笑いながら果物や野菜を手にした。

バナナの房から大きなバナナを一本もぎった男が、晴江の股間にそのバナナを埋め込もうとしていた。

銀子達から施された過酷な調教により、女達の二つの肉孔は何時でも前技無しでも、太い筒具を呑み込めるように鍛えられていたので、男が無理矢理ねじ込もうとした大きなバナナも晴江の女陰は抵抗無く呑み込んで行った。

太くて長いバナナを半分ほど、晴江の膣内に埋め込むと。大きく反り返った部分が、まるで男根のように晴江の股間から立ち上がっていた。

「前々から、お前のことを男勝りの女だと思っていたが、そんな立派な物を隠し持っていたとは知らなかった。」と、股間に食い込ませたバナナの表面を撫でながら男が笑った。

バナナを優しく撫でる男の手の動きが秘孔内に伝わり、晴江がビクッと身体を震わせた。その動きは怒張を突然撫でられた男のように見えた。

この股間から男根を突き出すような滑稽は姿に、銀子達も思わず、つられて笑い声を上げた。次に、男は晴江の股間から突き出したままになっている、バナナの皮を剥き出した。

そしてバナナをしっかりと啜る秘孔の根元まで皮をむきおわると、「どうだ？今まで皮被りだったのが、包茎を治して立派なチンコにしてやったぞ！」と、続けて周囲を笑わせた。隣に座っていた男が、酔ってフラフラとした足で、晴江の股間に近づくと、その股間から屹立しているバナナに顔を近づけ、臭いを嗅ぐような仕草をして、いきなり食べ始めた。それを見た男達が、「お前、チンポが好きだったのか？お前はホモか？」と、バナナを旨そうに頬張る男をからかった。

隣では、「若い女のここは良い香りがして、味も甘いや！」と、暁美の女陰に次々とイチゴを潜らせてタツプリと体液に塗れさせて味付けした艶々よ濡れ輝るフルーツを美味しそうに頬張る男がいた。

「おい！胡瓜の塩揉みを作ってみろ！」と、太い胡瓜を手にした男が、いきなりお竜の股間に突き立てた。

太くて反り返った表面に棘のある胡瓜を、無理矢理呑み込まされてお竜が悲鳴を上げた。

「こら、股の間にもっと力を入れてもっと揉まんか！」と、胡瓜を握った男がお竜に命令した。

男に命じられて、仕方なくお竜も体内に埋め込まれた、太くて棘のある胡瓜を力一杯締め付け始めた。

お竜の膣の圧力を楽しむかのように、胡瓜を握った男が、胡瓜を出し入れしてお竜に喘ぎ声を上げさせた。

「塩揉みだけじゃなくて、胡瓜の糠味噌漬も作ってみろ！」と、お竜の尻の下に手を差し入れ双臀を上げさせてお竜の後門にもう一つの胡瓜をねじ込んだ。

股間の前と後ろに角のように二本の胡瓜を啜え込んだ、お竜の滑稽な姿に男達が爆笑した。剛沢の愛人達も恥ずかしくて見ていられないと言うように、プツと吹き出すとプイッと顔を背けた。

お竜の苦悶を示すかのように、股間から突き出した二本の胡瓜の先端がブルブルと震えていた。

「お前も糠味噌漬を作ってみるか？」と、男が茄子を手にするると晴江の菊花にねじ込もうとした。

5センチ程の直径のある太い茄子であったが、日夜激しい調教を受け続けた女体は、前の穴も後ろの穴も、事前の準備無しで何時でも受け入れる事が出来る体となっていたが、男の気を引くかのように、乱暴な行為にイヤイヤとすねるように晴江が尻を振って甘い抵抗を示し

た。

この晴江の甘美な反抗に劣情を掻き立てられた男が、晴江の尻を叩くとその中心に乱暴に茄子をあてがい、晴江が小さく悲鳴を上げるのも構わず、左右にねじ回しながら力づくでズブズブと菊の蕾を割って内部に押し込んで行った。

無理矢理ねじ込まれた茄子は、董色の皺を押し払って埋没して行き、やがて、その小さく開いた菊花の中心からへたの部分だけが体外に顔を見せるだけとなった。

茄子を直腸内に留めたまま、その後暫くの間、前の部分に二本の指を突き入れ直腸内に埋め込まれた茄子の具合を確かめるように撫で回したり散々悪戯をした後、

「もうそろそろ糠味噌も良い具合に漬いたろう・・・」と、晴江の尻を平手で叩いた。

晴江が尻に力を入れると、太い茄子が菊の蕾を割ってゆっくりと排出されて来た。

晴江の体内には挿入されていなかったへたの部分の指で摘んだ男が、「良い具合に漬かったようだ。実に臭い糠味噌の臭いだ・・・」と、晴江の体温で十分に暖められた、湯気が立ち昇りそうな茄子に鼻を寄せてクンクンと臭いを嗅ぐ仕草をして、周囲の男達を笑わせた。

「さて、味の方はどうかな？」と、片手で晴江の口をこじ開けると、便臭のする茄子を口の中にねじ込んだ。

「自分の作った糠味噌漬けじゃないか。味わって食えろ！」と、蒼白となり嘔吐を催しそうな顔をして茄子を口に含む晴江に命令するのであった。

「お前、花電車の技でこれを呑み込んで出して見ろ！」と、べろべろに酔った男が、鮪のにぎり寿司を掴むと、お竜の股をこじ開けて、無理矢理股間に押し込もうとした。慌ててお竜が女陰の緊張を解き、男の押し込んだにぎり寿司を体内迎え入れた。

しばらくお竜の体内に留めた後、男が小皿を手にして、お竜の股間に押し当て、ここに出せと命じた。

お竜が膣壁に力を入れて体外に押し出すと、ベツリとお竜の体液が塗された、形が崩れたにぎり寿司が皿の上に現れた。

「何だ！これは？ボロボロじゃないか？何と言ういい加減な花電車だ！」と、お竜の下腹をピシャピシャと叩いた。

「それに何だ？このオコ臭い寿司は！」と、寿司の載った小皿を自分の鼻の前に持って来てクンクン嗅ぐ仕草をして、「こんな物が食えるか！」と、お竜の口を無理矢理こじ開けて、お竜の体液が染みこんだ寿司を押し込むのであった。

暁美の傍では、辛子醤油をたっぷりと付けた鰹の刺身を一切れ箸に摘んで、「お嬢ちゃんもお腹が空いたろう？今刺身を食べさせてやるからな・・・」と、暁美の股間をこじ開けると、左手で女陰を押し広げて、辛子醤油のたっぷりと付いた刺身をねじ込もうとしていた。暁美は恐怖を感じて目を見開いて、男の行動を追っていたが、男達に逆らうことは出来なかった。突然膣内に激しい刺激と痛みが襲った。男が無理矢理刺身を暁美の体内に押し込んだのだった。

暁美は、体を硬直させ目に涙を一杯に浮かべ男の暴力に堪えた。

それを見ていた男達が、真似して他の女達にも、刺身を股間に埋め込もうとした。

「あー！辛子は付けなくて下さい！」と、哀願するのを、「それならワサビなら良いか？」と、ワサビ醤油をタップリと付けた刺身をねじ込んで女達に悲鳴を上げさせるのであった。

「アアッ！何を入れたの？」直腸の内部から突き上げる強い刺激にお竜が涙を浮かべて聞いた。

「へへ・・・さつきは前の穴に寿司を食わせてやったから、今度はガリを後ろの穴に突っ込んでやったのさ」

酒臭い息を吐きながら、指先には、なおも多くの生姜を摘んだまま、身悶えるお竜の尻穴を開いて男が、嫌らしい手付きで更に埋め込もうとするのであった。

「おい！ワサビが切れているぞ！」男の大きな声が上がった。

剛沢の愛人達が慌てて駆け寄り、生のワサビを大急ぎで摺り下ろした。

目の前に積み上げられたワサビの大きな山を掴むと男は、晴江の肛門をこじ開け腸内にそのワサビの固まりをねじ込んだ。

その強い刺激に晴江の口から悲鳴が上がった。

この乱痴気騒ぎの中で、男達に悪戯されて悲鳴を上げて身悶える女達を剛沢の愛人達が蔑むような目でじっと見つめていた。

一人の男が塗り箸を持って、苦悶するお竜の股間を狙った。狙ったのは秘孔の上に開孔した尿道口だった。狙いを定めた箸は細い尿道口を貫いて突き刺さった。深く突き立った箸は男が手を離しても抜け落ちる事が無く、お竜の股間から下に垂れ、お竜の身悶えを増幅するかの様に末端がまな板の上で踊っていた。

お竜が激痛に顔を歪ませ、涙を流しながら、取ってくれるように男に哀願した。

男が力任せに引き抜くと、抜き出した後にポッカーリ開いた孔から、尿が少しまな板の上に溢れた。抜き取った箸は先端が少し濡れていた。

男はその箸を嘗めて、「少し、塩味がする」と、ニンマリと笑って言った。

それをまねて別の男が、箸の先端に辛子をタツプリと塗してから、箸を暁美の尿道に突き刺した。

その敏感な薄い粘膜を襲う余りの強烈な刺激に暁美は体をビクビクと痙攣させる千白目を剥いた。

しばしの間、苦悶に打ち震える女の姿に満足した男が、箸を抜き取った。

その瞬間、箸が取り去れてポッカーリ開いた孔から、勢い良く温かい真黄色い尿が噴き出し、まな板や未だその上に置かれていた食べ物をビショビショと濡らし始めた。

一度始まった放出は、尿道に残された辛子を洗い流すまで終わらないかのようにであった。

剛沢の愛人達が慌てて布巾を手に、周りを拭き始めた。

「何だ、何だ、この女は！食べ物の上に小便を垂れやがって！」

後で食べようと除けておいた高級な寿司を小便で台無しにされた男が気色ばんだ。

この陰悪な空気に、銀子が咄嗟に機転を効かせて、

「いえ・・・ね・・・皆さん、食事を終えられて、この子はお茶をお出ししたんですよ。」と、取り繕ったので、

「上手いこと、言いやがる！」と、男達が笑い声を上げた。

その後も酒に酔った男達により、色々な野菜や果物やビール瓶などあらゆる物を前後の孔に押し込まれるなどの狼藉を受け、乱痴気騒ぎ繰り広げる男達に責められる女達の悲鳴は夜が深けるまで続いた。

「これから、ちょっと食後の余興を始めたいと思います・・・」と、女達を載せたまな板を片付け、散らかった周りを手早く片付け終わった後、剛沢がまだ酒を酌み交わしている村崎と同行者に向かって話し始めた。

「これから、食後の余興の一つ競馬を楽しんで頂きたいと思って準備しました・・・競馬と言っても普通の競馬とは少し違う・・・皆さんは北海道でやっている『ばんえい競馬』と言うのをご存じですか？」と、周囲の酔った男達を見回しながら、準備の整うまでの時間稼ぎを兼ねて説明始めた。

村崎会の男達もこれから始まる余興に興味を持って、説明する剛沢を注視した。

「ばんえい競馬とは普通の競馬と違って、コースに曲線が無く、200メートルの直線だけで争う。

そして、この短い直線コースには、途中2カ所の障害、すなわち坂が作ってある。馬たちは重しを載せた重い櫓を引きながらこの2カ所の坂を乗り越えてゴールに達するという寸法さ・・・」

剛沢が子分に目配せして、廊下と仕切っていた襖をサッと開けさせると、日本間の前の一直線の長さ20メートルほどの廊下には何時の間に設置されたのか、木で作られた坂状の障害が二つ間隔を空けて置かれていた。

廊下の幅一杯の長方形の箱の前後にスロープになった箱を組み合わせて組み立てられているようであった。上り坂のスロープの箱の奥行きは3メートルほどあり高さは1メートルほどであった。従って3メートル進む間に1メートルの坂を上り、頂上の1メートルほどの台を進むと、また坂を下る事になる。

2つ目の障害は奥行きは最初の障害と同じくらいであるが、台の高さは1.5メートルほどあり、一つ目を比べるとかなり急峻な坂となっていた。

鎖のついた首輪を嵌められ、大亜門戸会の三下達に犬のように引き立てられて来た全裸の女達が廊下の端で四つん這いの姿勢を取らされていた。女達の口にはボールギャグと呼ばれる大きなゴルフボールのような形の猿轡が噛まされ、こじ開けられた口からボールが抜け出さない様にボールに取り付けられた革のベルトが頬と鼻の両側を通過してガッシリ後頭部で固定されていた。猿轡により言葉を封じられた、声を上げる事も出来ない女達がこれからの自分達に架せられるであろう過酷な仕打ちに怯えているのか、互いに寄り添うように身を寄せ合っていた。

互いに声を掛け合って励まし合う事も出来ず、不安そうに体を触れあわせながら、寄り添う女達の傍には、食堂で使うような木製のワゴンが3つ置かれていた。

ワゴンの取っ手には、3本の紐が結び付けられており、それぞれの紐の端には毒々しい色をした大きなローターがぶら下がっており、振動して互いにぶつかり合いカチカチと音をさせて跳ね上げていた。

「さあ、これで概略判ったろう・・・女達はアソコに3つのローターを咥え込み、ローターから伸びる紐を結び付けたワゴンを引っ張って、二つの坂を越えてゴールに向かうという寸法だ・・・」と、得意げに剛沢が説明した。

酔った男達はこれから始まる卑猥な女のレースに、生唾を飲み込んで、スタート地点に控える裸の女達を注視した。

「馬券も用意しておいたぜ。第1コースがハルエノクイーン、第2コースがアケミノプリンセス、第3コースがオリュウドラゴンだ。」と、得意げに喋る剛沢に、珍妙な馬の名前を聞かされて男達が爆笑した。

「皆も知っての様に、オリュウドラゴンの花電車で鍛えられたアソコは強力だから、ハンデとして10キロの重りをワゴンに積む。若いアケミノプリンセスは5キロ、一番年寄りのハルエノクイーンは3キロだ」

元々博打には目の無い男達であるので、剛沢の説明を聞き、粹順とハンデを伝えられると、これから繰り広げられるであろう妖艶な女達による卑猥な競争に心が煽り立てられ、信じられない数の一万円札の束が飛び交い、狂ったように馬券を買いあさった。

準備が整い、四つん這いの姿勢のまま尻を高く上げさせられた三人の女達の体内に剛沢の愛人達により振動する3個のローターが次々と収められて行った。

同性の女達に股間を割られ、ローターを詰め込まれる羞恥と惨めさにお竜立ちは俯いて床を見つめながら激しく首を振った。

三個のローターに繋がれた紐の長さはそれぞれ微妙に違っており、三個のローターは膣内で一列に並ぶように収められた。女達は四つん這いのまま、膣内で荒れ狂うローターの紡ぎ出す狂おしい刺激に悲鳴を上げそうになるのを我慢するかのように眉間に皺を寄せて、猿轡に声を出す事も封じられて、顔を床に押し付けてじっと堪えていた。

ワゴンから伸びる3本の紐がヒクヒクと痙攣する充血した肉洞内に消えていた。

内部から突き上げる刺激に堪えられないのかのように、高く上げた尻を時々ピクピクと動かす女達の卑猥で滑稽な姿に興奮した男達が馬券を握り締め歓声を上げて指笛を鳴らした。拳銃を手にした男が、銃口を天井に向けた。

男の合図により女達は、顔を上げてこれから自分達が挑む障害に目を向けた。

四つん這いの女達の間からは最初の高さ1メートル程の障害もまるで立ちはだかる巨大な壁の様に見え、その先の様子は見る事が出来なかった。

男が天井に向けて空砲を発射して、レースが始められた。

静止していた重りを積んだワゴンを動かす際に、女達は肉孔の筋肉を思い切り締め上げて、ワゴンに結び付けられた紐を強く引いたが、その反作用としてローターの振動が女達の肉壁に内部から鋭い刺激を与えた。そのため一瞬馬がいなくなような甘い声を上げて、腰をブ

ルツと震わせた。

一旦動き出すと、抵抗の少ない床面をワゴンは女達の秘奥から伸びる紐に引かれて、ゆっくり進み始めた。女達は横一線になって進み差は無かった。

馬券を握り締めた男達が、興奮しながら自分の賭けた女に声援を送った。

ローターの刺激とそれに誘発された愛液により、滑ってローターが飛び出さないように膣孔をクイックイッとリズムカルに締め付けながら女達は犬のように這ってワゴンを牽引した。短い乗馬鞭を手にして、黒光りするエナメル地の皮のブラジャーと皮のホットパンツと皮のブーツを履いたSMの女王のような姿をした銀子が女達の背後に仁王立ちとなり、女達に鞭を飛ばした。

ほとんど差の無いまま、たちまち最初の坂に差し掛かった。坂を一気に乗り越えるべく手前で加速した女達であったが、そのまま坂を乗り越える事が出来ず、後僅かな坂の途中で立ち往生してしまった。

坂を逆走しようとするワゴンの抵抗を、股間を必死に締め上げて堪える女達であったが、肉洞の筋肉を締め上げれば締め上げるほど、内部に収められたローターは意地の悪い刺激を女達に与えた。

女達は息も出来ず、顔を真っ赤にして必死の思いで、坂の頂上までワゴンを引き上げようとしていた。

「ほらほら、どうしたの？もっと股に力を入れて引かないと駄目でしょう！」と、銀子が手にした鞭で、必死に堪える女達の背中や尻を気合いを入れるように叩いて回った。

上り坂で苦闘した女達であったが、それでもジリジリとワゴンを引き上げ、最初にお竜が坂を乗り越え、やや遅れて暁美が後に続いた。それからかなり遅れて晴江がようやく障害を突破した。

時間にしては、それほどの時間では無かったが、苦闘にのたうつ女達には永遠に掛かる時間のような気がしていた。

そして男達には、最初の障害でこれほど苦悶した女達が、次の更に険しい障害で見せるであろう、一層大きな苦悶に期待して激しい声援を送った。

二番目の障害に最初にたどり着いたのはお竜であったが、やはり一気に上る事は出来ず坂の途中でワゴンが立ち止まり、必死の思いで引き上げようとしていた。しかし、重い重りを載せられたワゴンはなかなか引き上げる事が出来ず、時間が過ぎていく内に、暁美が追い付くと全身を真っ赤に染めて、渾身の力を込めてジリジリと坂を上り始めた。

お竜も半分ほど坂を上ったところで、ふと息を吐いた瞬間に、力が抜けワゴンが下に降り始めた。

そして、一端下がり始めたワゴンの重みに抗し切れず、ワゴンに引きずられるように、そのまま坂の下まで後退して行ってしまった。

暁美は坂の途中で喘いで高度を稼ぐことが出来ず、お竜も振り出しまで戻ってしまったところに、晴江が追いついて来て、再び三人の女に差が無くなったことで、レースの行方は判らなくなったと、男達は興奮して自分の賭けた女に再び激しい声援を送った。

再び横一線となった女達が険しい障害に挑んで、緘口具を咬まされ声を上げる事も出来ずウーウーと馬の鳴き声のような苦しそうな声を上げ、荒い息を吐きながら全身ビッショリ汗まみれとなって苦闘していた。

体内で荒れ狂うローターを必死で食い絞めて、急坂に挑む女達からは、次第に理性や羞恥は消え去って行き、何かに突き動かされるかのように喘ぎながらワゴンをジリジリと引き上げて行った。

そんな女達の尻を銀子が狂ったような笑い声を上げながら鞭打って励ました。

見守る男達のボルテージも最高潮に達していた。

全身を真っ赤に染めて、ビッショリと汗に塗れ、苦悶の表情を浮かべて眉間に皺を寄せて坂に挑む女達には、朦朧とした意識の中で、もはや恥も外聞も無くなったかのように、荒い息を吐き、大きなボール状の猿轡を詰められ息する事も不自由な口からは涎を垂れ流して、ただ銀子の振るう鞭により、闘争の本能が呼び覚まされているかの様に、目の前の頂きに向けて狂おしい歩みを続けていた。

ブルブルと尻を震わせ、ピクピク痙攣を繰り返す華洞からは夥しい愛液を滴らせており、女達の肉体的状況をハッキリと示していた。

興奮した女体から立ち昇る咽せるような匂いに煽られ、見守る男達も股間を熱くしながら、体を震わせ狂気のような声を上げて声援を送った。

憑かれたように坂をよじ登る暁美が最も先行しており、お竜と晴江が僅かな差で続いていた。三分の二ほど坂を上ったところで、ヌルヌルした体液に塗されたローターが一つ暁美の股間から突然飛び出した。

ズボッと大きな音を立てて、夥しい体液と共にローターが宙に舞った瞬間、応援する男達から大きな声が上がった。

反射的に股間に力を込めたので、残りのローターが体外に引きずり出されることは阻止した

が、ワゴンの重みを二つのローターに受けてズシンとした衝撃が暁美の肉洞を襲った。

残り二本の紐でワゴンを引く事になった暁美が必死に股間に力を込めた。

ピクピクと股間の筋肉を収縮させて必死に堪える様子に暁美に賭けた男達が、頑張れー！と声援を送った。

汗まみれになり、喘ぎながら坂を上るお竜も重いワゴンの抵抗に堪えかねて、遂にローターを一個体外に引き出されてしまった。

残された二本の紐にワゴンの重さがズンと掛かり、お竜を膣内から責め上げた。

晴江も堪え切れず、一番手前のローターを引きずり出されてしまった。

「そんな、汐を吹くだけじゃなくて、早く坂を登れ！」

と、坂の途中でワゴンの抵抗に堪えかねて立ち往生する女達を見守る男達が野次った。

ワゴンに繋がれたローターを体外に出さないように、股間に力を入れる度に、膣孔からは熱い樹液がビュッ、ビュッと真後ろに向かって勢い良く吐出された。

女達の通った跡はまるでカタツムリが通った跡の様にヌルヌルする愛液で濡れ光っていた。銀子が急坂とワゴンの重さにたじろぐ女達に渴を入れるように、大きなかけ声を上げながら、次々と狂ったように尻に鞭を当てた。

たちまち女達の尻は赤く腫れ上がり、鞭の苦痛で股間を緊張させる度に、夥しい汐を後ろに迸らせた。

女達は全身を朱に染め、荒い息を吐きながら、苦しそうに眉間に皺を寄せ、口元からは寝穢く涎を垂らして、白目を剥き、今にも絶頂を迎えそうに見えた。

股間から突き上げるローターの女芯を揺さぶりたてる振動に煽り立てられ、今すぐにでも快感に身を投じて楽になりたいという女体の欲望をかりうじて封じ、ただ何か判らない本能に追い立てられるように、女の恥ずかしい筋肉を酷使してワゴンを引くという無様な姿をさらしながら、無意識に頂上を目指しているかの様であった。

遂に暁美が最初に障害の頂上にたどり着いた。

頂上の僅かな平らになった部分に身を預けた時に気が緩み、これまで必死に堪えていた肉欲の封印が思わず外れてしまったのか、呻き声のような鋭い声を上げるとそのまま、くずおれるように頂の平らになった部分に前のめりに倒れ込んでしまった。

「おお！坂を登り詰めた所で、絶頂に達してしまったぞ！」

暁美の変化を目敏く見付けた男達が大声を上げた。

絶頂を迎えた暁美はそのまま、体をピクピク痙攣させながら、意識を失って台の頂上に横た

わった。

絶頂を極めて、激しく汐を吹き出し、弛緩した暁美の体内からズボッと大きな音を立ててローターが飛び出した。

暁美の体は頂上まで登り詰めていたが、まだワゴンは頂上の僅かに手前の坂の途中にあったので、引き手を失ったワゴンはそのまま坂を転がり落ちて行った。

「アケミノプリンセスは失格だ！」と、剛沢が冷たく宣言した。

暁美に賭けていた男達が、感極まった大声を上げると忌々しげに馬券を投げ捨てた。

意識を失った暁美をよそに、今にもイキそうになる女体の欲望をかろうじて抑え、坂の途中で喘ぎ続けるお竜と晴江であった。

女達は、既に二つ目のローターも体外に引きずり出され、最後のローターを必死に食い絞めて最後の上り坂に挑んでいた。

ワゴンに結び付けられたままの女の体内から引きずり出されたローターが、耳障りな音を立て、女の名残の愛液の飛沫を跳ね上げながらコースの上で跳ね回っていた。

女達が通過した後に、ダラダラと愛液のすじを引きながら、最後に残された力で股間をギュッと引き締め、険しい坂を体を左右に揺らしてフラフラとよろめく様に前に進む姿に、男達は堪え切れなくなりズボンのチャックを開いて股間の物を取り出すと、激しくしごき立てながら、我を忘れたように熱く激しい声援を送った。

激しく息を吐き、白目を剥き、猿轡を詰められた口の端からダラダラと涎を垂れ流しながら、朦朧とした意識の中で先にお竜が頂上にたどり着いた。晴江は頂上まであと僅かの所で喘ぎ続けていた。

ローターの端が膣孔から見え隠れし、今にも引きずり出されそうに、内部から盛り上がる膣孔を必死に食い絞め、激しく腰を振り立てワゴンを頂上まで引き上げようと努力する女の姿に声も上げる事が出来ず男達の目は釘付けとなった。

心身共にボロボロになりながらも、遂にお竜がワゴンを障害の頂上まで引き上げる事に成功した。そして、そのまま下り坂をワゴンに後ろから押されるように進んで最初にゴールにたどり着いた。

その後に遅れて晴江がゴールインした。

二人の女はゴールインと共に、これまで必死の思いで堪えていた、快感の封印を解いたのか、怪鳥の鳴き声のようなけたたましい悲鳴を上げ、体を強張らせると、一気に絶頂に達し、そのままバツタリと倒れ込んでしまった。

興奮した男達が一斉にゴールに駆け寄ると、何か訳の分からない叫び声を上げながら、女達を取り囲み、勝利の祝福のシャンペンシャワーのように白濁した液を体をくの字に折って痙攣し続ける女達の体に浴びせ続けた。

「見ての通り、一着はオリュウドラゴン、二着はハルエノクイーン、アケミノプリンセスは失格だ。3連単当てたヤツは居るかい？」と、剛沢が見渡した。

見事馬券を的中させた男が、大声を上げて、得意そうに馬券を差し上げた。

当たりを外した男達が恨めしそうに、喚声を上げる男を見つめていた。

「何時まで、気持ち良さそうに寝ているんでー！」と、黄原が絶頂を極めたまま、肩を上下させて荒息を吐き、ゴールで横たわる女達の尻を思い切り蹴り上げた。

「さっさと起きて第二レースの準備をしないか！」と、顔中男の白い粘液を浴びせられた、疲労困憊して足腰立たない女達に怒鳴りつけるのだった。

村崎会の来訪以来、休むこと無く、羞恥と肉体的苦痛を味わわされ続け、最早身動きする事も覚束ないほど疲労困憊しきった肉体に、今また新たな苦痛を与えようとする、黄原の残酷さに、精神的に耐えられなくなった女達は大声を上げて泣き叫び始めた。

そんな女達の涙もこの残酷な男達には心地良い音楽の様にしか響かないのか、銀子が早く起きて次のレースに備えるよう鞭で女達を叩いて回った。

ひとつ切り大声で泣き叫び、少し平静を取り戻したのか、女達は涙に咽んで床に倒れ伏したまま、猿轡に言葉を封じられているため声に出して抗議する事も出来ず、恨みのこもった目で黄原の方を見上げた。

そんな女達の敵意のこもった目に対抗するかのように、笑いながら、「次は、ケツの穴にこれをぶち込んでワゴンを引くんだ！」と、ポケットから鮮やかな色をしたピンポン球のような球を繫いだ紐を取り出し女達の鼻先にブラブラさせた。

男達の残酷な意図を悟った女達は、涙に潤んだ哀しい目をして目の前に揺れる紐をじっと見つめた。

「第二レースはアナルビーズを後の穴に詰めてワゴンを引くレースだ！新しいハンデは・・・」と、剛沢が粹順とハンデを発表した。

前のレースで大金を失った男は、損を取り返そうとして、大金を得た男は更にその金を増やそうとして、興奮した男達により前にも増して現金が飛び交った。

再びスタート地点に集められた、女達に四つん這いの姿勢を取らせると、再び剛沢の愛人達

がピンポン球のようなプラスチック球を数珠つなぎにした紐を、尻穴に押し込んでいった。

「これぐらいの物、ワセリンを塗らなくても入るわね？」と、直径4センチ程のプラスチックの球体を菊花に押し当てると親指の腹に力を入れて体内に押し込んだ。

晴江達の良く調教された尻穴は、プラスチック球を押し当てられると、見る見る柔らかく開き、押されるままにスポッと球体を呑み込んだ。

何事も無かった様に閉じた蕾からはプラスチック球に繋がれた紐が垂れていた。

紐には3個の球が5センチ程の間隔を空けて数珠つなぎに繋がれていた。

一端をワゴンの手すりに結び付けられた紐に取り付けられた3個の球を全て腸内に収めて、レースの準備は完了した。

最初のレースで、ワゴンを引いて障害を越える事がどんなに苦しいことか骨身に滲みて思い知らされた女達は、疲労しきった肉体に新たに架される、耐え難い責め苦に絶望的な色を浮かべながら、哀しげにゴールの方を見つめた。

号砲が鳴り再びレースが開始された。

重いワゴンに繋がれた紐がピンと張り、手前のピンポン球が今にも飛びださんばかりに内部から蕾を押し広げた。

銀子が女達を励ますように鞭の一撃を女達の尻にくれた。

女達は尻に力を込めて、グッとプラスチック球を食い絞め、腸内に押し上げると、ワゴンが緩やかに動き出した。

再び開始された、妖艶な女達による卑猥なレースに、馬券を握り締めた男達が興奮して股間を摩りながら喚声を上げ続けた。

疲労しきった体に鞭打ち、全身汗まみれとなり何とか第一の障害を越えて、第二の障害に達した時、先頭は暁美、僅かに遅れてお竜、そしてかなり遅れて晴江の順であった。

第一の障害は、三人とも必死になって何とか越える事が出来たが、険しい第二の障害では、女達は苦闘し、晴江も追いついて来て再び横一線となり、勝負の行方は判らなくなった。馬券を握り締めた男達が、熱狂して声援を送った。

急坂でワゴンが滑り落ちないように、顔を真っ赤にして息を詰めて尻穴を食いしばり苦闘する女達の姿があった。

全身を上気させ顔を朱に染めてジリジリとワゴンを引き上げる、ほとんど差の無い女達の傍らに仁王立ちした銀子が、甲高い笑い声を上げ、大声で叫びながら、狂ったように苦悶する女達の全身に鞭の嵐を降らせた。

若い曉美が僅かにリードして坂の途中で堪え、お竜が後を追っていた。

必死に二人を追う晴江の尻穴の蕾が内側からモリモリと盛り上がり、蕾を内側から少しずつ破いて行き、毒々しいプラスチックの艶々した表面が外部にチラチラと見え出した。

固唾を飲んで見守る男達の目前で、ズボツという音を立ててプラスチック球が肛門を割って飛び出した。

坂道の途中にあったワゴンがその長さ分落下した。思わず尻穴に力を入れて残りの玉が飛び出すのを防いだが、落下するワゴンの重さが衝撃となって、ズンと晴江の直腸を襲った。肛門から突き上げる激痛が脊髄を駆け上り脳天を直撃した。

激烈な衝撃に堪えきれず悲鳴を上げ、倒れ伏すように斜面に腹ばいとなり荒い息を吐きながら体を痙攣させていた。

斜面に蹲ったままの晴江に銀子が、再び四つん這いの姿勢となって這い出すまで鞭を振るい続けた。

汗まみれになり、全身を赤く染めた女達が、再び朦朧となりながらも、鞭に追い立てられるようによろけながら勾配に挑んでいた。

絶え間なく直腸を襲う苦痛と、内部に収めた球を離すまいと必死に直腸と肛門の筋肉を緊張させる度に、それにつられて膣腔の筋肉も緊張した。その刺激が女達に得も言われぬ妖しげな感覚を呼び覚まし始めていた。

苦しい運動で体温が上昇し、水を浴びせられように汗に塗れた上気した肌からは濃厚な女の体臭を立ち昇らせ、苦闘に痙攣する股間からは咽せるような牝の性臭を発し始めていた。

プラスチック球を逃すまいと、ギュッ、ギュッと尻穴に力を入れる毎に、つられて緊縮した前の穴から熱い愛液を真後ろに向かってまるで水鉄砲の様にビュッ、ビュッと吹き出し初めた。

「おお！女達が発情しているぞ！」と、女達の変化を見付けた男達が感極まったような声を上げた。

男達の指摘のように、四つん這いの姿勢ため下に垂れた乳房の先端に位置する乳首は痛いほど隆起し、赤く充血して柔らかく肥大した陰唇の頂点に在るいじらしい木の芽は、ピンと表に突き出して何かを求めるようにフルフルと震え、白目を剥いて、坂登りに苦闘して身悶える女達の顔は、上気してアクメを迎える寸前のような苦悶とも恍惚ともつかない表情を浮かべて、鞭打たれ真っ赤になった尻の狭間から、まるで噴水のように絶え間なく夥しい量の汐が吹き出していた。

女達も遂に、肉体の苦痛を快感へと転じることが出来るようになったか・・・と、女達が悶絶する様子を見ながら剛沢が思った。

此処に連れ込まれて以来、男達の獣欲の餌食として昼夜を分かたぬ心身の苦痛を味わい続け、漸く被虐の苦痛を性的快感に転じることが出来るまで肉体を改造されたことにより、娼婦として一回り大きく成長したように感じるのであった。

そんな剛沢達の視線を気にする余裕も無く、朦朧となり手足をよろめかせて、女性器を真っ赤に充血させて愛液をダラダラ垂れ流して、もはや自分達が人間であった事も忘れたかのようになり、喘ぎながらも何かに憑かれたように必死に坂をよじ登ろうとする女達の姿がそこにあった・・・

村崎の寝室に当てられた和室に、二組の柔らかい厚い布団が惹かれ、電気スタンドの照らす枕元には寝酒や飲み水やティッシュボックスなどが用意された。

先に布団の上に寝間着一枚で胡座をかいて待ち受ける村崎のもとに、高手小手に縛り上げた晴江と暁美が剛沢と黄原に縄尻を取られて引き立てられて来た。

引き立てられて来た哀れな母娘の姿を目にして村崎は、剛沢め、趣向するな！と、ニヤッと笑みを浮かべた。

一糸纏わぬ上半身に、両腕を背中に回され、きつく縛り上げた縄は前に回って柔らかな乳房の上下を二巻き三巻きして暁美の巨大な乳房を絞り上げる様に前に突き出させ、晴江の刺青を施された乳房を蠱惑的に強調していた。

艶のある雪白の裸身を晒す二人の下半身には、暁美の場合鶉色の腰巻きが、そして晴江には浅黄色の腰巻きが、形良く張った腰と艶めかしい太股を覆い隠す様に身に着けられていた。その二人の姿は、まるで戦国時代の敗残の奥方と姫が敵方に生け捕りにされ、敵将の前に恥辱の姿を晒す情景を連想させた。

晴江達を連行する男達の後に、大量の性具を収めた木箱を下げた銀子が後に続いた。

哀れな母娘は、村崎親分の来訪以来休む間も与えられず、度重なる性の饗宴に駆り出されていたため、さすがに疲労の色を浮かべていたが、剛沢の愛人達から身体を洗い清められ、村崎の寝室に連れ込まれる前に、目の下に出来た隈に厚く白粉を塗り込められ、やつれた肉体の苦役の痕跡を包み隠すように唇に紅を引かれて美しく化粧され、艶々しく髪を結い上げら

れ、全身にそしてその部分には特に濃厚に香水を擦り込まれていた。

亜紀達の妙に優しい、そして晴江達の美貌を妬むような邪険な態度で、村崎の前に奉げられる生贄の羊を彩っていくのだった。

剛沢から今回の村崎達への応接が大亜門戸会の浮沈にとって如何に重要なものであるかを言い含められた愛人達は彼女達なりに一生懸命尽くしているのである。

「これからあなた達は、親とも慕って頼りにしていた村崎親分から、ここの部分を思いっきり突かれるのね。これまで受けた恩をお返すするためにも嬉しそうに腰を振って喜ばせるのよ」

と、亜紀が晴江のその部分を撫でながら口にした。

「ほら、香水を塗ってあげるから、もっと股を開くのよ！」

「ああ・・・香水位自分で塗れます・・・」

既に何度も愛人達の前に羞恥の部分の晒し続けて来た晴江達であったが、いまだに、この唾棄すべき女達の目に股間を開いて隠された女の花園を晒すことに、言いようの無い羞恥を覚えるのであった。

「駄目よ！今回の饗応には粗相が無いよう剛沢から厳命されているのよ。塗り残しが無いようにじっくりと塗って上げるわ。」

香料を晴江の秘孔の奥深くにまで擦り込みながら亜紀が、淫靡な微笑みをたたえて、じっと晴江の目を見詰めながら囁いた。

「ああ・・・恥ずかしいわ・・・」

「何よ！男からじゃなくて同性の目から見られるだけだから恥ずかしい訳ないでしょ！」

亜紀の指先で繊細な襞を押し開いてその奥深くにまで男の獣欲を掻き立てる淫靡な香料を擦り込まれながら、亜紀の冷酷な視線を避ける様に閉ざした瞼の間から一滴の涙が流れ落ちた。

「村崎親分は、これまで何千人もの女を抱いて来たという性のベテランで、年を取っても絶倫で知られているようだから、あなた達のこの部分もこれから大活躍しそうね？」

香住も暁美の秘奥に香水を擦り込みながら笑って言った。

剛沢の愛人達の言うように、この苦境からの救出の最大にして最後の希望の綱と期待した村崎にこれからこの身を穢されるのかと思うと、奈落の底に落ちて行くような絶望感に打ちのめされるのであった。

「話によると村崎親分はこちらの方も目がないと云う話だから、下品な臭いを出して嫌われない様に、良く香水を擦り込んでおきましょうね。」

隣で暁美に化粧をしていた遥香が、腰を屈めて自分の方に尻を突き出すよう命じた。

暁美は歳の近いこの陰険な女の目に無防備な双臀を突き出す事に羞恥を覚えたが、「何やっているのよ？もっと尻を突き出して、両手で尻タブを開くのよ！」と、邪険に命じられて逆らうことも出来ず、自らの手で臀裂の狭間を押し広げていった。

腰を屈めて目の前に開陳された小菊を繁々と見詰めながら「お嬢さんのお尻の穴はいつ見ても可愛いわね！」と、可笑しさを堪え切れないというように呟いた。

「何人もの男のモノを此処に啜え込んだ筈だけど、変形もしてないし変色もしてないし、余程銀子さんの調教が良かったのね・・・」

と、菊の座を指で撫でながら呟くように言った。

そのゾクッとするような妙に優しい指使いに、唇を噛んだ。

アヌス用として特別に調香された香料を手にするると、いきなり暁美の背後から、菊の形をした部分に指を添えてその皺の一本一本を解きほぐすように香水を擦り込み始めた。

二人の女から前後の淫靡な孔をまさぐられて、小さく悲鳴のような声を上げて暁美が腰をくねらせた。

そんな剛沢の愛人達の嘲り笑いの中で、二人は目に涙を溜めながら美しく化粧されたのであった。

美しく彩られたその美貌の下に隠された、やる瀬の無い疲労感と絶望感を伴った陰りが逆にゾクッとするような妖しげな色香を漂わせていた。

豊かな胸の上下に二重、三重の縄を掛けられ、柔らかな乳房を前に向かって括り出すような扇情的な母娘の姿を見て村崎が舌なめずりをしながら嬉しそうな笑みを浮かべた。

嚴重に女達を縛り上げて連れてくるように頼んだのは、武闘派の組の女だけあって、晴江達も空手技を使う事を知っている村崎が、冷酷に目高組を見捨てた自分に抱かれる時に逆上して暴れ出すことを恐れた事と、縛り上げられ抵抗の出来ない女を躡ることが好きな村崎の歪んだ性癖によるものであった。

村崎の言い付け通り、晴江を村崎の隣に正座させると、暁美の縄尻を床柱に繋いで正立させた。

先ず、晴江の体を充分楽しんで、その男女の絡みを娘に見せ付けようという村崎の魂胆なの

だろう。

村崎に何か不足は無いかと確認してから、剛沢達は寝室を立ち去った。

後には村崎と目高組の母娘だけが残された。

この後、奈和が親とも慕って忠誠を尽くしていた男に親子して穢されることになるのかと思うと、逃れられない定めとは言え目頭が熱くなり、思わず目を閉じる晴江達であった。

一方、別の部屋では、村崎会の随行者が一部屋に集まり、まるで狼の一群が一匹の子羊を取り囲むように目に隠微な欲望の光を湛え舌なめずりしながら、全裸のお竜を取り囲んでいた。

「向こうは男一人に女二人で、こちらは男13人に女一人か・・・」

と、一人の男が呟いた。

「まあ、そう、^{ひが}僻むな。ベテランのお竜姐さんだから、全員を同時に楽しませてくれるさ・・・ただし、同時に相手して貰うには、全ての穴という穴を一度に使って貰わなければな・・・」

と、別の男が愚痴をこぼす男の肩を叩きながら言った。

男達の作る輪の中心に敷かれた布団の上にひざまずいたお竜は、両手で股間と乳房を野卑な男達の目から隠しながら、伏し目がちに、そっと自分を取り囲む男達を見まわした。

ほとんどの男は、昔、村崎に率いられて目高組を訪問した時に、お竜が壺を振る賭場にも遊びに来たことのある、奈和親分と同格の村崎會の最高幹部を構成する見覚えのある連中だった。

目高組でも接待の為に、彼らに組の売春婦を宛がって饗応したものであるが、男扱いに慣れたベテランの売春婦でも、彼らが相手では身体が保たないと嫌がって、泣き出すほどの彼らの性豪ぶりは耳に入っていた。

そして今は自分が売春婦となって、ベテランの娼婦が一对一で相手しても敵わないほどの性の猛者である13人の男を同時に相手して、この身を捧げなければならなくなった境遇の惨めさをじっと噛みしめていた。

「女は三つの穴を持っているし、それに、壺振りで鍛えたしなやかな手を持つお竜姐さんの手コキの技術は大した物らしいから同時に五人だな。くじ引きで先ず誰が何処に当たるか決めよう。外れたヤツは最初はケンだ。」と、紙を持ち出して線を書いて阿弥陀籤を作り始めた。

男達は、ワイワイと楽しそうに籤を引いて、やった俺は前だ！とか、後ろからやるのは初めてだとか、なんだ俺は手コキかと騒ぎながら、一斉に寝間着を脱ぎ始めた。

籠にあぶれた男達は美女と男達の絡みを、酒を飲みながら見物しようと、酒を酌み交わし始めた。

目を伏せたまま大人しく布団の上に正座するお竜を全裸の男達を取り囲んだ。皆色取り取りの鮮やかな刺青を彫り込んだ逞しい男達で、股間から垂れる男性のシンボルも逞しい太さと長さがあった。その上、何人かの男は男根に真珠を埋め込んだ禍々しいモノを持っていた。

「フフ・・・久しぶりに壊し屋ジョージの業物が本領を発揮しそうじゃないか？」

男達の中でも一番多くの真珠玉を埋め込み、変形した醜い外形を晒す肉塊をこれ見よがしにお竜に見せ付ける丈治という名の村崎會の幹部の隣に立った同僚がジロジロと無数の真珠を呑み込んだ不気味な男の武器を見詰めながら面白そうに声を掛けた。

「ああ・・・調子に乗って山の様に大小の真珠を埋め込んだのはいいが、この所、大げさにギャーギャー大声を上げて痛がったり、裂けて血まみれになる女ばかりで、これが活躍する場が無かったが、久しぶりにたっぷりと楽しめそうだけ・・・」

と、自分の醜い物をゆっくりとさすり上げながら丈治が唇の端を上げて冷酷な声を発した。

「唯でさえ、並の女には啜えられないようなぶつとい物に、そんなに真珠をぶち込めば、普通の女ならぶっ壊れてしまうぜ！」

と、隣に並んだ男が酔いの回った顔で大声で笑い声を上げた。

柔肉を求めて舌なめずりする肉食獣のような、男達の発するムンムンする牡の体臭に囲まれ、この男達にこれから前後から串刺しにされるのかと思うと、さすがのお竜も恐怖に震え、全身が蒼白となり震えを止める事は出来なかった。

「どうした？お竜姐さんともあろう者が、小娘みたいに体を震わせて・・・」

お竜の恐怖心を見て取った男達が卑猥な笑みを口元に浮かべて、ジリジリと布団の上に正座するお竜に近づいた。

「お前たちは昔の仲間だった女の体を食ろうと言うのか！」

恐怖に耐えかねたお竜が涙声を上げた。

これらの昔からの喧嘩慣れした男達には、本気になって空手技を繰り出しても敵わないことを知っているお竜は、虚しい抵抗の様に叫び声を上げた。

「そうさ、目高組の壺振りから売春婦に商売替えしたお竜姐さんの門出を昔の仲間達で祝ってやろうと言うのさ・・・」

淫欲を湛えた笑みを浮かべ、そう答える村崎會の幹部達に、最早全ての抵抗は虚しいと観念

するお竜であった。

涙に霞むお竜の目に、男達の股間の物が禍々しくその鎌首をもたげ、見る見る固さを増していくのが分かった・・・

「前々から、あんたみたいな別嬪さんを嫁に貰うて、奈和の奴は果報者やと思うてておったが、儂もあんたを抱ける事になって幸せや。」

惨めな姿を晒す母娘を前にして、イソイソと寝間着と下穿きを脱ぎ捨てると正座する晴江の隣にドッカと腰を下ろした。

そして、全てに絶望したように首を項垂れて正座する晴江を自分の傍に引き寄せると、肥満した体を密着させ、刺青を施された乳房を両手で嫌らしく撫で回し、腰に捲いた布間から手を内部に差し入れ股間に指を匍わせながら酒と煙草の混じった臭い息を吐いて、晴江の耳元で囁くように言った。

これまで親とも信じて仕えて来た、村崎から惨い仕打ちを受け、今また村崎の嫌らしい指で体を撫で回されて、鳥肌の立つような嫌悪感を覚え、身を固くして、本能的に少しでも離れようと身を反らしてしまうのだった。

そんな晴江の様子も気にならないかのように、身動きを封じるように晴江を背後から肥満した自分の腹の方に抱き寄せて、左手で晴江の乳房を騁りながら、腰に捲いた布の中に入れた右手で下腹を撫で回し、やがて股間に指を伸ばし始めた。

「昼間は、子分達の手前、充分楽しむことも出来なんだけど、今度は邪魔もんはおらへん。気兼ね無^おおーゆっくり楽しませて貰うで・・・」

正座してピッタリと閉じた太股を搔き分けるように、無理矢理太い手をねじ込み、女の最も深い部分に指を這わせ始めた。

女遊びに慣れた村崎は、でっぴりと肥満した太い手に関わらず、以外に器用な指先で、シットリと湿り気を帯びた秘境に在る濃いピンク色した真珠の粒を探り当てると人差し指と薬指を使って、先端を剥き出しにして、中指の指先で優しく弾いた。

村崎の巧妙な指使いにより、敏感な神経の集中する急所を責め立てられ、晴江は小さくウツと声を上げて体をビクッと仰け反らした。

晴江の示した反応に満足したかのように、村崎は更に指を奥の方に進め、牝芯の中心に中指を宛がうとそのまま中に突き入れた。

何時でも何処でも、事前の準備が無くても、受け入れる事が出来る娼婦の体に調教されてい

た晴江の牝芯は、村崎の指をスルリと迎え入れた。

村崎は中指を根元まで差し入れると、温かく潤った極上の内部構造を堪能した。

右手で晴江の女性自身を味わいながら、左手で晴江の後ろ髪を鷲掴みにして、顔を自分の方に向けさせると、晴江の薄く形良く引き締まった唇に、自分の厚い唇を押し付けた。

無理矢理舌先を晴江の口内に押し込むと、村崎のアルコールの混じった煙草臭い唾液が晴江の口内に流れ込んで来た。

これまでに何千人もの女を抱いて来たと言っただけあって、村崎の指にはまるで魔性の物が潜んでいるかの様に晴江の官能を的確に搔き立てた。

村崎に唇を奪われながら、心では拒んでも自然と体が求め始めている晴江が居た。

直ぐ傍の柱に立位で縛られたままの暁美は、瞬きもせず、そんな二人をじっと見つめていた。僅かに母親の下腹を覆う淡青い薄い布の下で村崎の指が淫靡に動き回る様子が目に映っていた。

乳房と股間を柔らかく揉み上げられ、最初、青ざめていた母親の身体が次第に薄く桜色の染まっていくのが分かった。

「奈和の奴は、あんさんのココに突っ込む前に、こうやって丁寧に体を解してくれただか？」晴江の全身の性感をモソモソ撫でながら、この美熟女の柔肌を独占していた奈和に嫉妬するように問いかけた。

一瞬、性に関して意外に淡白であった夫を思い出す晴江であった。

その晴江の表情から二人の閨の様子を想像したのか、「如何にも一徹者で融通の利かん奈和らしいな！」と、笑い声を上げた。そして、「儂は違うで！一穴主義の奈和と違おて、これまで何千人もの女を天国に送って来たんや！あんさんも夢見心地にさせてやるで！」と、セカセカと指先を動かしながら口にするのであった。

「さて、剛沢の奴が、自由に使ってくれと言うて、置いてった箱の中身を見せて貰おうか・・・」一渡り晴江の全身を愛撫した村崎が、枕元に置かれた大きな木箱の方に手を向けた。小型旅行用スーツケース程の大きさの木箱の観音開きの扉を開けると、中にはバイブレーターや張り型やその他の女体責めの道具が整然と分けられて収められていた。

「成る程、剛沢が自慢するだけのコレクションや・・・」

子供がおもちゃ箱の中を楽しそうに掻き回すように、禍々しい形をした色々な性具に手を伸ばした。

「ほう？これは珍しい・・・これは虎のチンポか？」

と、薄黄色い半透明の樹脂で成形された張り型を手にした。

恐らく勃起した雄虎の性器を型取りして作った物であろうが、人間の物と比較にならないくらい巨大で随所に突起が飛び出した禍々しい物であった。

「そう言えば、奈和の奴も背中に立派な虎の彫り物をしてたな・・・決めた！これで楽しんで貰おう。」

と、雄虎の性器を手にしてニコニコしながら晴江の方を向いて宣言した。

晴江はその鋭い突起が随所に飛び出た巨大な性具をぞっとした目で見つめた。

「お嬢ちゃんの方は、晴江姐さんと絡んでいる間に退屈しないように、こちらで楽しんで貰おうか。」

と、周囲に何個もの大きなイボイボが付いた太い張り型を取り出した。

正座していた晴江をそのまま前に押し倒して、布団の上に尻を高く擡げた姿勢を取らせると、腰巻きをそろそろと上に捲りあげていった。

既に今日何度もこの男の目に晒した秘部ではあるが、男の生臭い息が直接当たるような間近な位置から眺められる事に言い様の無い羞恥を感じ、村崎の手で徐々に捲り上げられ、大腿が露わとなって尻が露出させられながら、布団の顔を埋めて、ああっ・・・と、呻き声を上げた。

「何や？もう、こんなに濡れてるやないか。僕の指遣いだけで感じてもうたんかいな？ホンマに好きな女やで・・・」

と、腰巻きを尻の上まで捲り上げ、露わとなった股間を眺めて満足そうに言うと、さっと下腹の周りに纏い付いていた布を取り去った。

最後の盾となっていた薄い布切れを奪われ、晴江がヒッと悲鳴を上げた。

晴江を布団の上に仰向けに寝かせて股を大きく開かせると、黄原から薦められた催陰薬を張り型の表面に塗して、晴江の女芯を覆う襷を優しく開きその中心に押し当てた。

「ああ・・・怖いわ！ああ・・・助けて・・・」

青ざめた顔を左右に振り立て、凶悪な性具を敏感な箇所押し当てられた瞬間、恐怖に体をビクッと縮めるのであった。

「大丈夫や！亭主のチンポやと思うて、伸び伸びと腹に収めればええんや・・・おお！こう言う間にも、こんなトゲトゲのある太い物がどんどん呑み込まれて行きよるわ！」

人間の女体には過酷な形をした、凶悪な性具であったが、晴江の鍛えられた牝芯は、驚いた事に易々とそれを啜え込んで行き、とうとう根元まで完全に姿を消した。

全身に刺青を施され、そこだけ女性の白い素肌を残す部分から、半透明の樹脂製の握り部分だけを外部に突き出したまま、禍々しい張り型の形状に繊細な内部を傷付けられることを恐れて身動きも出来ず、両脚を大きく開いたまま横たわっていた。

「お嬢ちゃんはこっちや」

と、イボの付いた太い張り型を手にした村崎が立ち上がると暁美の方に近付いて来た。

まるで海坊主の様な薄い頭をして相撲取りの様に肥満した、裸の身体で右手に巨大な性具を握り締めてニヤニヤ笑みを浮かべてこちらにやって来る化け物じみた男に暁美はゾッとしてブルブルと身体を震わせた。

自分の父親の所属する大親分と云うことで、これまで何度も目高組を訪れた時も、無理に愛想笑いを浮かべて迎えた暁美であったが、これまでこの男の醸し出す不気味な雰囲気や女ならではの感覚で感じており、心の中では嫌悪していたのであった。

そんな暁美の表情も気にせず、身体を傍に寄せた村崎は、柱に立位に縛り付けられた暁美の薄いピンク色の腰巻きを捲り上げて、その下に隠されていた股間の様子をシゲシゲと観察した。

男の目から避ける様にツルツルに剃毛された股間をピッタリと閉ざしていたが、その合わせ目にはジットリと湿っている様子が目に入った。

「なんや？お嬢ちゃんも濡らしているやないか！母親の感じる姿を見ているだけで、自分も感じてしもたんかいな？ホンマに親子は良く似ると言うけど好き者の女やで！」

と、嬉しそうに笑い声を上げると、サッと腰巻きを取り上げた。

生暖かく大腿を覆っていた布が奪い取られ、外気が剥き出しの女性器に触れて、暁美がヒッと身体をくねらせた。

村崎は嬉しそうに笑みを浮かべ、まるで播り粉末の様に巨大な張り型全体に催陰剤をタップリと塗り付けると、立位の暁美の股間を押し割って、張り型を無理矢理突き立てた。

暁美の体も、何時でも受け入れる事が出来る娼婦の体に改造されていたので、村崎に押し込まれるまま、抵抗無くズブズブと深く埋め込まれていった。

「儂がお前の母親とやっている間、一人でそれで楽しむんや！気持ち良すぎて落としたらお仕置きするから、落んように股に力入れとくんやで！」

と、村崎が張り型から手を離して命じた。

催陰剤の効果か、股間に突き立てられた途端に、膣の壁を通してジワッと熱い物が下腹に込み上がって来た。

村崎が暁美に張り型を突き立てている間に、布団の上に横たわる晴江の下腹には妖しい変化が現れていた。

股間が熱く火照り、言いようの無いむず痒さが膣内を襲っていた。

下腹を振れば、張り型の周囲に植え付けられた鋭い突起が、膣壁を傷付けることになるのではないかという恐れで、身動きもせずじっとしていた晴江であったが、体の内奥を通してこみ上げる搔痒感に思わず、小さく下腹を振った。その瞬間ゾクッとするような鋭い快感が膣壁に発生し、電流のように背骨を駆け上がり脳髄に達した。

ああ・・・この張り型を村崎の手によって握り締められ、男の力で前後に動かされたらどのような強烈な快感が襲う事になるであろうかと、ぞっとするような思いと、早く片をつけて、この疼く様な搔痒感から楽にして貰いたい思いが交差して、晴江は、暁美に張り型を埋め込むのに夢中になっている村崎を恨めしそうに目の先で追った。

ジンジンと膣内からこみ上げて来る痒さに堪らず尻をモジモジさせながら、暁美への張り型取り付けの終わった村崎がこちらに向かって来る時、何故かほっとしたように感じた。

ところが、村崎は晴江の元に戻っても、張り型を操作して晴江を追い上げるようなことはせず、煙草臭い舌先で顔の周りを舐め回し、耳の穴を擦ったり、指先ですっかり屹立した乳首を弄ったりして、晴江に苦悩を味合わせ続けた。

股間からはジンジンとする搔痒感が突き上げ、堪えようとしても堪らず、淫猥な性具を呑み込まされた股間を無我夢中でギュッと締め付けていた。

そんな晴江の懊悩にまるで気が付かないかのように、村崎は相変わらずゆっくり乳房を揉み上げながら、鼻の穴に舌先を差し入れ内部をまさぐったり、耳たぶに唇を寄せて、耳穴をそっと舌先で舐めたりして、晴江の肝心な箇所への責めには回らなかった。

夫からもされた事の無い粘着質の舌先の愛撫を受け、嫌悪感から顔を背けながらも、股間から突き上げる痛切な快美感にも煽られて村崎の粘っこい執拗な愛撫にも不思議な陶酔感を感じ始めていた。

そんな晴江の体調の変化を確認しながら、唇と舌先で耳周りの愛撫を続けて、アップに結い上げた長い髪に鼻を押し付け、高価な香水の香りと混じった毛根から立ち昇る濃厚で甘酸っぱい熟れた女の匂いを肺胞の奥まで取り込もうとしているかの様であった。

熟女の体臭を十分に堪能して満足したのか、村崎の狙いが下の方に移動し始めた。

村崎の肉感のある厚い唇が、晴江の刺青を施された張りのある形の良い乳房を撫で回し、柔らかく乳首を含み舌先でコロコロと硬く屹立した乳首を転がした。

長年女との情事を重ね、女を泣かせるコツを熟知した村崎の柔らかく良く動く指先と肉厚の唇が、やがて、臍の周りまで降りて来て、舌先を臍の穴に入れその神経の集中した内部をまさぐり始めた。

その村崎の巧みな絶技に、小さく悲鳴を上げて、煽り立てられながらも、もうすぐ自分が今最も苦悩している所に降りてくるという期待感で、股間が厚く潤って来るのを感じていた。ところが村崎はそんな晴江の懊悩に気が付かないかのように、わざと女体のその中心部を無視して、通り過ぎると、太股に顔を押し付けて柔らかい内腿を愛撫し始めた。

急所を外されてその周辺を刺激されるじれったさに、思わず鳴きたいような思いになりながら、股間をモジモジと振るわせた。

焦らされて大分頭に血が上っているようだな・・・と、村崎は焦れったそうに腰を蠢かして、夥しい愛液を垂れ流しながら、充血した性器に挿入された性具を自らの筋力で動かそうとしている晴江を見てほくそ笑んだ。

ふと、柱に立位で縛り付けられた暁美の方に目をやった。

暁美も催陰剤の効果で、女体は肉欲の渴望に煽り立てられ、更に目の前に繰り広げられる自分の母親と村崎の愛欲の図に目は釘付けとなり、その視覚的刺激に更に肉欲を燃やしたてながらも、両手を塞がれている為、自分ではどうする事も出来ず、腰をモジモジと動かして身悶える姿が目に入った。

「まるで、人間ポンプやな・・・」

暁美の様子を見た村崎が呟いた。

ダラダラと愛液を太股まで垂れ流しながら、その中心に突き立てられた張り型を自らの膣壁の筋肉を駆使して吸い上げ、吸い下ろし、張り型に植え付けられた大小のイボイボの効果を楽しむように、股間に埋め込まれた張り型を自らの力でピクピクと上下に動かしていた。

その動きは手で張り型を動かすのに比べれば、小さな前後運動であり、到底飢えた女体が満足する物では無いが、今現在暁美を襲っている肉欲の凄まじさを感じ取ることが出来た。

そんな女達の懊悩を更に焦らし上げるかのように、村崎の動きは更に下の方に降りて、晴江の左足を手に取ると大きく持ち上げ、五本の足指を順番に口に含み、丁寧に舐め上げ、小指の付け根の股の部分の柔らかい皮膚を舌先で刺激した。

村崎に足首を持ち上げられて大きく開いた股間の中心では、巧みな村崎の舌技により一層快

感が煽り立てられ苦悶する晴江の状態を示すように、濃厚な牝の性臭を撒き散らしながら、突き立てられた張り型がピクピクを蠢いていた。

肝心な部分には手を触れないまま、女体を上から下まで、愛撫し終えた所で、村崎は晴江の体を俯せにして、そのまま尻を高く上に持ち上げさせた。

そして、両手で尻たぶを掴むと思いつき左右に押し広げた。

奥に秘められた肛門が村崎の目の前にまざまざと晒される事になり、激しい羞恥に悲鳴を上げた。

村崎は、パツクリと広げられ、露わとなった、張り型を啜って悶える直ぐ上の部分の佇まいを暫くの間しげしげと観察するようにしていた。

熱く熱気を帯びた菊座の周辺と性具を突き立てられピクピク痙攣する女芯からは剛沢の愛人達から塗り込められた高貴な香水の香りと混じって、温泉の源泉から立ち昇る熱せられた硫黄の蒸気の様思わずムツとする濃厚な性臭が立ち昇っていた。

その女の発する姪臭に煽られたかのように、突然村崎が晴江の菊花に唇を押し当てた。

突然の村崎の後門への攻撃に晴江は短く悲鳴を上げて、反射的に蕾をギュッと閉じた。

村崎はそんな晴江の緊張で硬く閉じた菊の蕾の皺を一つ一つ解きほぐすように舌先で撫で上げた。

本来排泄の用に給する不潔な場所を嘗め回されるという汚辱感と不快感に最初は激しく嫌悪した晴江であったが、ざらつく舌先が微妙な神経を散りばめた繊細な粘膜の上を這いずり回る刺激が何時の間にか不快感を押し退け始めていた。

全身に散りばめられた数多の女の快感の壺を心得ている村崎は、経験に裏打ちされたテクニックを駆使して丹念に嘗め回し、頑なに閉ざされていた後門の緊張が徐々に解かれて行く事を意識した。

晴江がその余りの気持ち良さに支配され緊張を解いたのを見計らって、柔らかくなった肛門内に深々と舌を差し入れ、スベスベした腸の内部を舌先で掻き回した。

突然の村崎の分厚い肉片の侵入に、羞恥と快感の交差する刺激を受け、頭はパニックとなり、神経は麻痺して、目の前は靄が掛かったように白くなり、絶頂に達した。

その様子を憑かれた様に目視していた暁美もまるで空気中を電気が流れたかのように体をビクビクと二三回痙攣させるとガクッと体の力を失った。

獲物に群がる飢えたハイエナのように何人もの淫欲の虜となった男達が、一斉にお竜の柔肌

に群がり、そのシットリとしたきめ細かな肉体の感触を堪能していた。

お竜は村崎会の幹部達により前後の禁断の穴を串刺しにされ、更に口も逞しい男根に占領されていた。

以前、大亜門戸会の何人もの三下達に同時に攻められた事があったが、女慣れしていない若い男達ばかりだったので、女の穴に入れられても鍛え抜かれたテクニックにより、そのまま満足して直ぐ放出して終わったので、それ程時間は掛からず、単に若い男達の人数の多さと回数の多さによる苦痛が主であったが、今回は逆に女遊びの経験が豊富な男達ばかりであり、自分の開発された女体を駆使して男達を放出させようとしてもその前に、熟達した男達のテクニックに煽り立てられ自分の方が先に追い立てられてしまうような状態であった。

仰向けに寝た男の上に俯せになって体を預け、前を逞しい肉塊に突き立てられながら、その押し広げられた股の奥にひくつく菊の蕾にもう一人の男が隆起した肉塊を押し付けた。

精力絶倫の男達の太い物を前後に押し込まれた時、その両方の穴を破竹切れんばかりに押し広げられ、息も止まるような激痛に身悶えたが、その二本の男達から押し付けられた圧力に体が慣れて来た時、男達はこれまでに経験を積み重ねて来た女体責めのテクニックを駆使してお竜を責め立て始めた。

当初お竜を責め苛んだ苦痛はいつしか妖しい快感に形を変えお竜の肉体を内部から搔き立て始めていた。

女責めに熟達した男達はお竜の表情を窺い互いに阿吽の呼吸で腰を使い、時には激しい勢いで突き立てお竜を燃え上がらせ、時には優しく動かして興奮を鎮めさせ、一方が引くと一方が押し、時には同時に深々と刺し貫き、お竜の鍛え抜かれたテクニックを出す隙も与えず責め立てるのであった。

銀子から調教された性技を駆使して男達を先に放出させるという目論見は脆くも破壊され、性の巧者の男達により煽り立てられ燃え上がらされ、男達から手脚を掴まれ絶頂へと続く坂道を無理矢理引き摺られて行く様に追い立てられていくのであった。

「お前のチンポに入れた真珠が俺のチンポを刺激して妙な感じだぜ！」

腸と膣の間の薄い隔壁越しに二つの男根が擦れ合い、お竜の後門を背後から突き立てる男が下になって前門を突き立てる男に声を掛けた。

「俺の真珠玉は女を喜ばすために入れたんだが、男まで喜ばすとは思わなかったぜ！」

と、下からお竜を攻める男が面白そうに笑い声を上げた。

二人の男に前後からサンドウィッチにされ苦痛に顔を歪めていたお竜の悲鳴に甘い声が混じり始めたのを見計らい、頭の方に向かった男が、苦しそうに早い息を吐くお竜の口をこじ開けると、その隆々と屹立した物をお竜の口にねじ込んだ。

口腔深く突き立てられ、まともに呼吸も出来なくなり、酸素欠乏に喘ぎながら朦朧とする中で必死に啞えさせられたものを舌先でしごき上げた。

「おい！自分だけ楽しんで無いで、俺たちの物をしごくんだ！」とお竜の両脇に胡座をかいて男女の絡みを堪能していた男達がお竜の手を掴むと、自分の隆起した物を握らせた。

前後上下の三つの穴を男達に占領され、追い立てられ朦朧とする中で両側に座る男の肉塊を何かに憑かれたように必死にしごき続けた。

その間にも男達の技巧を積んだ責めは激しさを増し、お竜を後戻り出来ない高みにジリジリと追いつけて行った。

男達に串刺しにされたまま、お竜は体を一瞬ビクッと硬直させると絶頂に達し、下に寝る男の体の上にガックリと弛緩した体を預けた。

「お前、娼婦のくせに客より先に自分だけ逝ってどうする？」と、怒張を食い絞めていた筋肉が緊張を失っていくさまに腹を立てたように男達がお竜を叱った。

「お前、何時まで時間を掛けているんだ！早くフィニッシュさせて交代しろ！」と、順番が来るまでの間、花札で時間を潰していた見物の男達が不満そうにお竜をなじった。

男達に怒鳴られながら、何とか自分を鼓舞して男達を逝かせようと体を振るい立たせるお竜であった。

男達を逝かせるまでの間に何度も逆に男達に逝かされながらも最後の力を絞って何とかお竜に絡む男達を追い込むことに成功した。

その瞬間、男達のドロドロとした熱い粘液が前後の穴に注ぎ込まれ、同時に口内に流れ込んだ濃厚な粘液に呼吸が止められ、一瞬意識が遠くなった。

最初の男達は何とか自失に追い込むことに成功したが、後に何人もの精力絶倫の男達が控えていることを思うと絶望的な気分になり落ち込まされた。

既に体は疲労困憊していたお竜で在ったが、獣欲に逸った男達はお竜を十分に休ませるだけの優しさを持ち合わせておらず、フラフラになったお竜の手を掴むと自分の体に載せ上げ前門を破り、更に別の男が後ろの門を破って侵入して来た。

ただ男達の慰み者とされ、獸的な本能に急き立てられるかのように、自分の快感を食うだけのために荒々しく腰を前後に激しく振り立てる男達から肉体を翻弄される屈辱と惨めさに、流石のお竜も涙を流してワンワンと狂ったように泣き叫び始めた。

「賭場では凜とした顔して壺を振ってた鉄火姐さんのお竜姐御が大声で泣きじゃくって、こんなにも女らしくなったなんて驚きだぜ！」

男達は大声で涙を流し続けるお竜に憐憫を感じることなく、むしろ男勝りの烈女を此処まで貶めたことに痛い程の快感を感じているかのようであった。

二人の男からサンドウィッチにされて哀哭するお竜の前にノソリと立った男が、悲哀の涙に咽ぶお竜の顎を掴んで、苦痛と疲労と惨めさの余りに泣き叫ぶお竜の口をこじ開けると、太い怒張を口中深くねじ込みお竜の叫びを奪った。

ボタボタと涙を流しながら、声を封じられた口で、嗚咽のシャックリを繰り返しながら男のモノを啜えるお竜であった。

そんなお竜の嗚咽による喉の痙攣が、男に格別の快感を呼び起こさせるのか、男はお竜の喉の奥まで自分の隆々と勃起したモノを突き立て、お竜の髪を鷲掴みにしてお竜の頭をリズムを取って振り立てながらウツトリとした溜息を吐いた。

体は綿の様に疲れきり、腰は鉛のように重く、全身がキリキリと痛み、最早少しの力も残されていないのに、この性に長けた男達を相手にすることが出来るのであろうかと思うと、男達から全ての穴を激しく責め立てられながら、絶望感に打ち拉がれるお竜であった。そしてこの後も相手すべき男達はまだまだ多く残っていた。

「こら！何だ！この緩い穴は！もっとケツに力を入れて締め上げろ！」

お竜を責め立てる男達が不満そうに声を上げお竜の豊かな尻を平手でピシャリと殴打した。そして、命じられるままに必死の思いで股間に力を込めると、思わず下腹から痛切な刺激がジュンとこみ上げて来た。

いけないと思って堪えても、制御の効かなくなった体は、巧みな男達の腰使いに追い詰められて、止める事も出来ず登り詰めて行くのであった・・・

艶々と愛液に塗された張り型が暁美の足下に転がっていた。

先ほど極めた絶頂に、立位に柱に縛られた暁美の体は、まだピクピクと痙攣していた。

母親がイカされるのを見て、自分も同時にイクとは、催陰剤により神経が過敏になっているとは言え繊細な子やーと、村崎はシクシクとすすり泣きするように鼻を鳴らす暁美をじっと

見つめた。

自分の膝元では、晴江が布団の上に体を横たえ、絶頂の余韻の様に体を振るわせていた。

地下深く蓄えられたマグマが地殻を引き裂いて、地上に吹き上がり、噴火したように、女体の奥深くに眠る肉欲が催陰剤で活性化され、村崎の巧みな手技と舌技により、肉体の殻を突き破って吹き上がり、爆発したようなものであった。

しかし、女体の奥に秘められた大量の肉欲のマグマは、この程度の小爆発で治まるはずは無く、最初の小爆発が切り開いた大地の小さな裂け目を完全に引き裂く様に、更に大きな爆発を伴わなければ、この女達の肉欲が終止符を打つ筈が無い事を村崎は見抜いていた。

暫し絶頂の余韻に浸っていた女達に、再び催陰剤が効果を復活させ始め、体内から劣情を煽り立てられているかのように、顔と下半身が赤く熱を帯び、股間をモジモジとさせ始めた。村崎は床の間の柱に縛り付けられていた暁美の縄を解くと、自分の前に正座させた。そして晴江にも暁美と並んで正座させると、

「どや、お前達は、これで無いと満足でけんのやろ？」と、自分の隆起した肉塊を目の前の二人の女に見せ付けた。

自分の内部から突き上げる、激しい衝動に、二人の女は飢えた目つきで目の前の醜怪な物を凝視しながら肯いた。

「どや、舐めてみい。」と、二人の後ろ髪を鷲掴みにすると交互に、二人の唇を熱く熱を持って膨張した肉塊に押し付けた。

「どや？美味しいか？」と、母娘に交互に口に含ませながら聞いた。

「美味しいです・・・」

内部から突き上げる抑制の効かない衝動に煽り立てらるまま、女達は譫言のように応え、口内に含んでは優しく舌先で愛撫した。

母と娘の濃厚な口技に満足し、隆々と屹立した肉塊をそそり立てながら、先ず暁美を布団の上に仰向けに寝かせると、その横たわる暁美の上に晴江を俯せに寝かせた。

娘の柔らかい大きな乳房の上に母親の小振りで堅い乳房が重なり、母娘は同時にウツと声を上げて体を震わせた。

重なる女達の両脚を思い切り広げさせると、二人の女の花園が上下に直線上に重なるように村崎の目の前に在った。

母親の毒々しいまでに成熟した秘所と、娘の開花してこれから満開を迎える柔らかな秘所が上下に重なっていた。

そして、異なった趣をたたえる二人の花園は、しっとり潤いを溜め、男を迎え入れる準備が整っていた。

その卑猥な情景に村崎が舌なめずりをするように、じっと眺め回すと、自分の肉塊に手を添えて軽く扱き上げた。

父とも思って慕っていた、大親分から穢される瞬間が来たと、母娘は観念してそっと瞼を閉じた。

そして一方では、邪悪な薬の効果で肉欲に暴走を始めた体は、早く肉の喜びを得たくて仕方が無いかのように、花芯から愛液をドロッと滴らせた。

「アッ！イヤ！」と、下になった暁美が上擦った声を発した。

村崎の怒張が暁美の湿潤した女体に分け入ったことが、柔らかい下腹を互いに接する晴江にも肌を通して伝わって来た。

「ああ・・・若いおなごのここは気持ちが良いのお・・・」

と、何度か暁美の華洞に突き立てながら、ウツトリとしたように呟いた。

一方暁美の方も、この何千人もの女の股間を貫いて来たという肉棒に突き立てられ、まるで、この男神により随喜の涙を流し、歓喜に狂った女達の情念が、そのままこの肉茎に濃縮して宿されており、それが一機に自分の膣内に流れ込んで来る様な、魔力じみた怒濤のような性感に搔き立てられ堪える事も出来ず身悶えるのであった。

「どや、母親の方の、ここの具合は？」

と、暁美の愛液を全体に塗して艶々と濡れ輝る怒張を晴江の花芯に押し当てた。

大亜門戸会の娼婦に身を落として、これまで数々の男に抱かれて来たが、かつて夫が親子の杯を酌み交わし、親とも慕っていた男に身を任せる事になって、

「ああ・・・あなた！許して・・・」と、晴江は心の中で詫びた。

「おお！さすがはこの娘の母親や！ええもんを持っているやないか・・・」

村崎が感激したように叫んだ。

晴江の方も、村崎のまるで悪魔がかった男根の脅威の前に、自分の夫に対する不貞を恥じる事も忘れたかの様に身悶えた。

それは、夫の逞しいが何処か潔癖性を秘めた情交とも、剛沢の暴力性を帯びた獣的な情交とも違い、剛沢の肉茎に比べれば数段落ちる肉塊の大きさではあったが、膣内で自分の快感のスポットを的確に抉り立て、何か魔性の物が潜んでいるのでは無いかと疑う程、まるで滝川

の水が一機に流れ込んで来る様な怒濤の様な快感が股間を襲うのであった。

「こんな、ええ女と毎晩してたなんて、奈和の奴は幸せ者や！」

村崎は晴江の体内で暫く往復運動してその極上の内部を堪能すると、抜き出して、再び曉美に突き立て、曉美の中で往復した。

村崎の熟達した腰使いと、催陰剤の効果が、再び意地悪く二人の女を体内から燃え上がらせ始めていた。

晴江も曉美も村崎の怒張に激しく責められ、無理矢理押し上げられるように頂点に押し上げられ、後僅かの所まで絶頂を迎えそうになると、すっと抜いてもう一人の下腹に移ってしまった。

村崎の物が抜き去られ虚ろとなった肉の狭間は、その内部の柔らかな褻が物欲しげにヒクヒクと痙攣し、イヤらしい熱い樹液をまるで腹を空かせた犬がご馳走の前で涎を垂れ流す様に、ジュークジュークと垂れ流していた。

ピッタリと接した柔らかい下腹の脂肪を通して、相手の体内に村崎の逞しいモノが激しく出入りする様子が伝わって来て、その柔肌を通して伝わって来る甘い刺激が、早く自分の中に入れて欲しいとの動物的な欲望を掻き立てた。

村崎から焦らし抜かれて、再び自分の所に帰って来るまでの間が何と長く感じられる事か・・・内部から激しく突き上げる肉欲の疼きに耐えかねて、村崎の物が往復運動している曉美の下腹に、その肉洞を出入りする肉塊の動きを共有しようとするかのように晴江は下腹を強く押し付けた。

そして、しこった乳首を曉美の乳首に擦り合わせた。

この母親の渴望した性欲に煽られた行為が、村崎に責められる曉美を更に燃え上がらせた。自分の女肉を突き立てられ責められながら、今や燃え上がる性欲の疼きで見境も無く母娘が裸身を絡め合い、互いに貪り合うように口を吸い合う姿に、村崎は腰を振り立てながら有頂天になった。

年甲斐の無い激しい運動に、上半身汗まみれになり、フウフウと息を吐きながら、

「そろそろイクで！どっちの中にフィニッシュして欲しい？」と、自分のモノで喘ぎ続ける女達に声を掛けた。

「ああ！私の中でして下さい！」

晴江が気もそぞろに声を上げた。

「イヤ！私の中でして！」

暁美が泣き叫ぶように叫んだ。

自分のテクニックの前に押さえも効かず舞い上がってしまった二人の美女の身悶えぶりに満足したように微笑んだ村崎は、晴江の熟した肉門の奥深く自らのモノをズブズブと埋没させて行った。

村崎は、晴江の体内に思いのたけを放出すると、その瞬間晴江は電流が流れたように体を硬直させた。

そして、その母親の動きは体を密着する娘にも伝染して、暁美も同時に体を硬直させた。

晴江の良く鍛えられた肉洞はその瞬間、激しく動いて、村崎の怒張を柔らかく締め上げ、村崎の放出したものを胎内深く呑み込もうとするかのように収縮を繰り返した。

放出を終わった後も、自分の肉塊が離れるのを拒むかのように、まるで女体の最深部にまで吸い上げようとするかのように蠢き続ける温かい肉洞に村崎は身を埋めたままその余韻に浸っていた。

激しい絶頂を極めた事で、漸く催陰剤の呪縛から解き放たれたのか、二人の女は放心したような顔をして、陸に打ち上げられて魚のように口を開いて早い息を吐きながら互いに抱き合うように横たわっていた。

二人の開いたままの股間からは、夥しい愛液がまだ滴り落ちていた。

暫く母と娘が裸体を接し合いながら横たわる姿を見ていたが、村崎の人並み外れた性欲は、この全裸の母娘のしどけない姿を眺めている内に、股間の肉塊が再びモリモリと屹立し初めていた。

布団に横たわる晴江の腕を掴むと、力尽くで自分の方に引き寄せた。

村崎が再び自分の疲弊した体を貪ろうとしている事に気付いた晴江は、村崎の方に体を引きずられながら、

「ああ・・・、もう勘弁して下さい」

と、譫言のような小さな声を上げて村崎に許しを請うた。

「あんたらは、さっきから何遍もイッて満足したかも知れんけども、儂は今日まだ二回しかイッて無い。儂は1日に4、5回イかんと満足せんのか。あんたも娼婦やったら客が満足するまで奉仕せなあかんで。」

と、晴江を胡座を組む自分の膝の上に載せ上げ、背後から乳房をまさぐりながら言った。

晴江はこの男の飽くなき精力に心底 恐怖を感じながら、身動きも出来ず柔肌を与え続けて

いた。

柔らかな脂肪を置いた太股を押し広げて、村崎の大きな手が奥深くに回り、尻たぶを割ってその狭間を撫で始めていた。

相撲取りのように肥満し、腕も太く、まるで小振りの男根のように太くて丸い指にどの様な魔法じみた能力が秘められているのか分からないが、これまで何千もの女を抱いて来た村崎の指先は信じられない程、素早く、繊細にそして器用に動き回り、今絶頂を窮めたばかりの肉洞を内部からまさぐり、晴江の体を再び燃え上がらせ、その奥に残された果汁を搾り上げると、その女体から生み出されたネットリとした蜜を指に塗したまま、その後の菊の花弁にも似た部分に押し当てた。

外観からは窺い知れない、女慣れして女体の弱点を知悉した器用な指使いに、繊細な神経を散りばめた箇所には微妙な刺激を加えられ、いまや晴江の後の穴の筋肉が柔らかく開き始めていた。

「どや？ 奈和の奴はお前さんのココを使こたことが在るか？」

指先で後ろ側の秘孔を騁りながら尋ねた。

村崎から与えられる不可思議な刺激の中で必死に頭を振り立てる晴江に、
潔癖症の奈和らしいのうーと、淫靡に口の端を歪めると、

「どや？ 今度はここを使ってみよか？」

突然、菊の蕾を破って中指を奥深く内部に突き立てて来たので、晴江はウツと呻いて苦しげに眉を寄せた。

大亜門戸会の娼婦に墜とされて、男達に身を売る間に、何度も男達から菊門を侵犯された経験はあったが、何時も激しい苦痛を感じるだけで、快感を覚えたことはこれまで無く、まるで男の同性愛者のように菊花を貪る男達に嫌悪と屈辱感しか感じたことが無かった晴江であった。

それが、村崎の指には、まるで体内の淫蕩な血を寄せ集める磁力のような力が秘められているかのように、村崎が捏ね回す直腸の周囲では熱い血がドクドクと渦を巻き、無意識の内に村崎の指を締め上げているのに気付いた。

村崎の悪魔じみた指先の動きに、すっかりと魅了されてしまったように、顔を紅潮させた晴江は、甘く吐息を吐き、拗ねる様に鼻を鳴らしながら、魔性の指先に肉洞を委ね、早く村崎の逞しいモノで自分の菊花を貫いて欲しいとでも言う様に、腰を身悶えさせるのであった。

乱交の嵐に曝される母娘

「おお！これはええわ！よう絞まるわ！」と、己の肉塊を晴江の後門に突き立てながら、村崎が感激して叫んだ。

大亜門戸会の娼婦に身を落としてから、尻穴を犯されるのは、勿論初めてでは無かったが、最後の希望として縫ろうとした、村崎から前の穴に引き続いて後ろの穴まで穢されることに、言いようの無い悲痛さを感じていた。

「どや？ええか？気持ちええやろ？」

晴江の快感のポイントを一つずつ探るように腰を動かしながら、辛そうに眉根を寄せハアハアと息を吐き内奥から込み上げる快感に煽り上げられている様子の晴江に問い掛けた。

村崎の悪魔じみた指先に自らの身体の奥底に眠っていた魔性の快感の壺をこじ開けられてしまったように、村崎が浅く深く腰を動かす度に、その部分がキュキュと絞まり、村崎に得も言われぬ感激を与え続けた。

「どや？奈和の奴は、おまんさんのここでしこたことあるんか？」

快感に有頂天になりながら問い掛けた。

性行為に関してはノーマルであった夫は、そのような変態的な性行為を求めたことは無く、背後から突き立てられながら晴江は、尊敬する夫を冒瀆するような村崎の言葉に激しく頭を振った。

「そうか・・・こんなええもんも知らず、全身不随になってしまうて、奈和の奴も可哀想なやつちゃな・・・」

肥満した腹を晴江の腰部に密着させて、うしろから激しく晴江を責めながら村崎がポツリと独り言を呟いた。

晴江は男達に体をひさぐようになってから、これまで何度も尻穴を使われた経験はあり、暴力的に突き立てられる性具や男性器の攻撃による一方的な蹂躪により自分の意志に反して、無理矢理絶頂に追い上げられた事は何度もあったが、常に引き裂かれるような痛みと、気味の悪い違和感を覚えるだけで、男達の一方的で加虐的な行為に激しい嫌悪を感じることはあっても真の肉体的快感を感じたことなど無かった。

しかし、女遊びに長けた村崎の巧みな動きに、何時しか最初に感じていた不潔な排泄孔を突

き刺される気味の悪い痛痒感は消え、ジワジワと、なにやら妖しげな快美感が不快感に置き代わりつつあった。

虚ろになった前門がジュンと湿り、思わず愛液が一滴糸を引いて落ちた。

村崎の巧みな手捌きが、柔褌の間からまるで立て爪指輪の中心に燦然と輝く宝石の様にツンと突き出した肥大した肉芽を摩り、その周囲を被う包皮を柔らかく剥き上げてその根元まで晒し、真珠玉のようなピンク色した表面を柔らかく撫で回し、更にその下の華洞の内部を柔らかくまさぐった。

女体の泣き所を熟知した指先の技に晴江は、思わず甘い悲鳴を上げ、堪らない様に腰を振った。

村崎の熱く膨張した肉塊は、直腸を裏側から撫で上げ、その得も言われぬ感触に鼓動は早く成りドクドクと熱い血潮が流れ込んだその部分は、何時しか奥へ奥へと村崎のモノを誘う様に蠕動運動を始め、入り口部分のリング状の筋肉は村崎のモノの根元をギュッギュッと締め上げた。

村崎により搔き上げられた背徳の快感により、意識は白く飛びそうになりながらも、これまで身体の奥深くに隠れていた、自分でも気が付かなかった、肛門性交に歓喜する変態性を引きずり出された事に恐怖感を憶え、ゾットするような悪寒が背筋を駆け抜け身体をビクッと震るわせた。

夫を裏切り、夫の主筋に当たる男とまぐあい、堪えようも無く快感を与えられる罪悪感と、不潔な器官を使って交接するという背徳感が、ない交ぜになって晴江の心を苦しめたが、それを押し流すような圧倒的な悪魔じみた快感が込み上げ、頭も身体も痺れた様に呑み込まれつつあった。

銀子の調教により鍛えられた後門の筋肉は、肛交の快樂に目覚め始めた心と一つに結び付きとなって、まさに心技一体となって、自発的にその機能を発揮し始めていた。

村崎は胡座をかいた姿勢のまま腰を上下に動かして、晴江の腸内に自分の隆起したものを出入りさせていた。

そして、そのピストン運動の快感を更に増幅するために、晴江の腰を両手で支えると自らの腰の動きに合わせて、激しく上下に晴江の体を揺さぶった。

大柄の村崎親分にとって小柄な晴江の体を持ち上げて上下に動かすことなど造作も無い事であった。

村崎の高々と隆起したモノが晴江の腸内にリズムカルに深く浅く出入りした。

その腸内を蹂躪するような激しいピストン運動が晴江の快感を舞上げるのか、胡座座りの村崎に尻を預けたまま、正面に向いた両脚をM字に大きく広げ、村崎の助けをするようにリズムを合わせて双臀を上下させる様になっていた。

激しい上下運動で縄により縊り上げられ、前に突き出した鮮やかな刺青の彫り込まれたお椀のような形の良い乳房がリズムカルに上下に弾んだ。

全身にビッシヨリと汗を浮かべて、荒々しい息を吐きながら、目をうつすらと閉じ唇を半開きにしたまま、その部分から込み上げて来る快感をじっと感じているかのようであった。

後手に縛られたままの暁美が布団の上に横たわったまま、最前から村崎に尻穴を責められて歓喜する母親の姿をじっと見詰めていた。

母親も自分と同じように肛門性交を極度に嫌悪しており、激しい肛門での交接の末、快感とは程遠い苦痛の中で意識を喪失する事はあっても、これまで一度もその部分で性的快感を感じたことが無い事を知っていたが、今村崎から責め上げられ、押さえも効かず、男に尻穴を差し出し、その心地良い陶酔感に支配されてしまっている母親の姿を目の当たりにして信じられない表情で布団に横たわりながら瞬きもせず見詰めていた。

上半身を激しく上下させながら、全身が火の玉のように燃え上がってしまった晴江がこのまま尻穴を貫かれたまま絶頂に達することは時間の問題と感じられた。

晴江を背後から串刺しにしながら、村崎は何を思ったか、枕元に置かれていたインターフォンに手を伸ばした。

「おお・・剛沢か？儂や。ちょっと来てくれ」

と、インターフォンに出た剛沢を呼び出した。

村崎の突然の呼び出しに、驚いたように寝所に剛沢が駆け付けた。

黄原と銀子も後に従って来た。

「おお、剛沢か・・突然呼び出して、済まなんだな・・」

と、相変わらず高手小手に縛られたままの晴江を胡座をかいた自分の前に置いて、後背位で後ろの門の攻略しながら、剛沢の方を向いてニコニコ笑いながら話しかけた。

一方、剛沢は村崎の肉棒で背後から刺し貫かれる晴江の様子を見て驚いた表情を浮かべた。あれほど肛門性交を嫌悪していた女が、背後から菊花を深々と突き立てられ、村崎に抱かれ

ながら喜悦の表情を浮かべ、憑かれたように自ら腰を激しく振っていた。

その激しい腰の動きが、強制されたものでは無く、自らの内奥から突き上げて来る激しい快感により突き動かされているもので有ることは、正面に向けて大きく開いた股の間から夥しい花蜜を滴り落としている事からも理解出来た。

両乳房の先端で乳首がツンと尖り、その固く痼った乳首を背後から村崎が手を伸ばし両手の指先で摘むように揉み上げていた。

ツルツルに剃り上げられた秘所は、大きく股を開いているため、パツクリと正面にその姿を拵げ、汗と分泌された粘液でテカテカと輝き、秘奥の割れ目からは、充血して大きく膨らんだ肉の芽が前方に向けて突き出していた。

「この女、一晩でアナルの快感を知ったか？」

剛沢が胸の内で呟いた。

「貴方のお母様も漸くここの気持ちよさが分かるように成ったようね・・・」

銀子が微笑みながら俯せに横たわる暁美の菊花の上を指で押さえた。

突然銀子の指で、恥ずかしい所を触られて、ヒィと小さく悲鳴を上げた。

そして、自分の母親と村崎の背徳の情交に引き込まれるように見詰める間に、股間を濡らしてしまっていることを銀子に知られるのを恐れるように尻をグッと閉めた。

「一旦ここの気持ち良さを覚えたら、自分で腰を振って、お尻の穴を突き出して、突っ込んで欲しい！ーて、自分からお客様におねだりするようになるわよ。」

なおも暁美の菊花を指先で弄びながら銀子が呟く様に言った。

銀子の指先で優しくその部分を撫でられながら、イヤイヤとするように腰をくねらせた。

「貴方も、村崎親分に鍛えて貰えば、ここの気持ちよさに直ぐに目覚めるわよ」

これまで何千もの女の随喜の涙を搾り取って来た、まるで女の呪いをその身に封じ込めた様な村崎の魔性を帯びたモノの持つ力を熟知している銀子が、淫靡な目で暁美を見詰めた。

「この女、もうすぐイキそうやから、ちょっと待ってとてくれ・・・」

込み上げる快感に全身を赤く染めビッシヨリ汗を浮かべ火の様に燃え上がってしまった晴江の体を背後から抱き締め、弾む乳房を揉み上げたり、股間に手をやって弄びながら村崎が剛沢に言った。

今や晴江は剛沢達が間近に居て、自分達の情交を凝視しているのも気付かない様に、汗に塗

れながら、全身を真っ赤に燃え上がった体を激しく振り立てていた。

そんな晴江にトドメを刺す様に、村崎が一際深く強く晴江の腸内に自分の禍々しいモノを突き立てた。

その瞬間、イッ！と唸ったかと思うと、まるで雷撃を受けたようにビクビクと身体を痙攣させ、そのまま村崎に上体を預けるように激しく体を硬直させた。

腸内深く埋め込まれたままの村崎のモノを信じられない程強く締め上げ、村崎に得も言われぬ快感を与えると、そのまま貝が水を噴き出す様に愛液を激しく前方に向かって放出した。

「おお！汐まで噴きおったで！そんなに良かったのかいな？この女」

村崎が一仕事終えた様にホッと息を吐きながら、嘖然として見詰める男達に笑いながら話かけた。

これまでアナルセックスを嫌悪し続けていた晴江が村崎の尻穴攻めの末、激しく絶頂を迎えた様子に、剛沢も黄原もそして暁美も呆然と見詰めるのであった。

これまで経験した事の無い様な強烈な絶頂を迎えて晴江は、ぐったりと脱力した様子で、村崎から煽り立てられた性感の残り火に全身が占領されたままなのか、目の前に剛沢達の姿を見付け、不潔な器官を責められて恥ずかしくも絶頂を極めた姿を見られたことが分かって、女として最も恥ずかしい所に突き立てられたままの自分の浅ましい姿を剛沢や銀子達に見詰められても気にする余裕すら無く、痴呆者のような表情で、全身を紅潮させ、むずかるように身悶えながら、後門を村崎の後技に任せていた。

晴江の膣孔から噴き出した愛液は50センチ以上も飛び、目の前の布団を飛沫でグッショリと濡らしていた。

その激しい決壊の跡を示す様に開いたままの孔からは、サラサラと愛液が流れ続けていた。そして、自分にこんなにも強烈な快感を与えて呉れた肉棒に感謝を捧げるように、まだ腸内に含んだままの肉茎を軟体動物のように優しく締め続けていた。

時々快感の余韻が再び込み上げて来るのか、下腹の筋肉がピクッと痙攣し、股間の二つの孔を結ぶ筋肉に締め上げられて、愛液が間歇泉の様に迸り出た。

その様な女の反応に満足した様に、村崎が晴江の後ろ髪を鷲掴みにして、グィと自分の方を振り向かせた。

そして、快感の余韻に浸る女の顔を繁々と見詰めて、その薄い唇に自分の鱈子のような唇を押し当てた。

性感に支配され放心状態の晴江は、拒絶すること無く、唇を開いて男の舌と舌を絡め合わせた。

剛沢達が居ることも意識出来ないかのように、憎むべき自分達を裏切った大親分に対して、雌の本能が命じるままに、長い時間濃厚な接吻を交わす目高組の大姐の姿を、悪人達がニヤニヤ笑いながら見守った。

全てを終えてホットした様に村崎が剛沢の方を向いて、目を見詰めると、

「お前さんには、色々感謝している。昼間は親子固めの杯を取り交わしたが、どや？これからこの女を仲立ちにして、兄弟の契りを結ばへんか？」

と、息も絶え絶えの状態の晴江の秘裂を指先でまさぐりながら、村崎から責め立てられる晴江の正面に呆然と立ち尽くす剛沢に声をかけた。

村崎の突然の申し出に少し驚いた様子を浮かべたが、勿論異論は無く、

「喜んでお受けさせていただきます。」と、応えた。

そうかそうかと言うように嬉しそうに首を振ると、両手で剃毛され覆い隠す物の無い蠱惑的な花園を大きく押し広げた。

剛沢の目に、赤黒く充血した柔らかな果肉がピクピクと隠微に痙攣し、中心部から一滴の粘っこい愛液がツーと畳の上に滴り落ちるのが目に入った。

壮絶な絶頂を味合わされた後、漸く意識を取り戻し始めていた晴江は、村崎により掻き上げられた性感に朦朧とする中で、自分達をあっさりで見捨てた憎い村崎に後ろから責められながら、今また敵の剛沢から前を責められるのだと判り、悲痛な気持ちで心は一杯になって行った。

しどけなく口を半開きにした晴江が、視線の合わないような目でボンヤリとこちらを見つめる前で、黒ネクタイを外し、ブラックスーツを脱ぎ捨て、ワイシャツを脱いで、下着を次々と剥ぎ取り全裸となって行った。

「これは、これは、凄い持ち物や！」

剛沢の股間で隆起するモノを間近に見て村崎が感嘆の声を上げた。

「さあ、その業物でこの女を前から刺すんや・・・それで、儂らは、本物の義兄弟や！」と、背後から突き立てたまま、晴江の体を支えるようにして立ち上がらせた。

剛沢は村崎に誘われるままに、晴江の前門に挑み掛かって行った。

立位で大男二人にサンドウィッチにされ、小柄な晴江の足は床から離れ宙吊りの状態となり、前後二カ所の穴で自分の体重を支えるように、二人の男から深く挟り立てられていた。

深く埋め込まれた剛沢の巨大な肉塊と尻穴を挟る村崎の肉塊に、自分の体重を預け、息も止まるよう苦痛に、額に汗を浮かべて喘ぐ晴江に、

「お前さんも売春婦なら上手に前と後ろ穴を動かして同時に満足させるんやで。それで農らは目出度く義兄弟の固めの儀式や！出来へんかったら出来るまでやらすで！」と、激しく腰を突き立て、息を弾ませながら、晴江の苦悩を無視するかのよう、冷たく声を掛けた。

高手小手に縛られたまま、布団の上に俯せになって、無言のまま二人の男に前後から騎られる母の姿を哀しげに見つめる暁美に銀子が優しく声を掛けた。

「さあ、お母様は当分忙しくなるから、貴方の番が回ってくるまで、退屈しないように私が相手して上げるわ・・・」

と、言うとき銀子は純白のワンピースを足下に脱ぎ捨てた。

スマートな浅黒い肌に良く発達した胸と縊れた腰が、暁美の目に入った。

黄原が気を利かして後ろからブラジャーのホックを外すと、弾むように形の良い乳房が溢れ出た。

そして薄いTバックのショーツを脱ぎ捨てると、股間を覆っていたこんもりとした硬そうな縮れ毛が姿を現した。

自分の裸身を人目に晒す事に恥じる様子も無く、ウェーブのかかった長い髪をさっと掻き上げると、そのまま、その全裸の体を暁美の上に身体を預けて行った。

暁美をひっくり返すように自分の正面を向けさせると、暁美の乳房に自分の乳房を重ね互いの乳首を絡ませ合いながら、股をこじ割り、押し広げた暁美の剃毛されたツルツとした股間に、自分の縮れた硬い飾り毛を擦り付けた。

突然の銀子の行為に驚きながらも、息も止まる様な自分の母親の激しい情交を見せ付けられた直後で、抵抗の気力も湧かないのか、まるで性人形のように大人しく銀子に身を任せる暁美であった。

見守る黄原の目に二つの陰部を丸出しにして体を寄せ合う二人の美女の姿が映った。

銀子はウツリとした目で、暫く暁美の顔を優しく見つめると、甘く唇を合わせて来た。

それまで人形のように意識を表に現さなかった暁美が、銀子に唇を奪われてハッと我に返ったように身悶えた。

思わず反らせそうになった暁美の顔を両手でそっと押さえて、暁美の抵抗を無視する様に柔らかく唇を合わせ、舌先を暁美の口中に差し入れて来た。

その銀子の巧みな口吻に、暁美は不可思議な陶酔感を感じたのであった。

何時もの獣のような男達から、一方的に女性器を蹂躪され、無理矢理絶頂に追い立てられる理不尽なセックスと違い、ネットリと纏わり付くような甘美な銀子の愛撫に、これまで味わったことの無い快美感に心を奪われて行くような気持ちになって行った。

優しく唇を貪り、両手を巧みに駆使して、暁美の性感帯を粘り着くように刺激し、互いの下半身を擦り合わせるように愛撫を続ける銀子に、暁美の女体はこれまで味わったことの無い、奥深い不思議な昂揚感に、何時しか身を委ねて行くのであった。

自分の性欲を満たす事だけを目的に力任せに責め立てる残忍な男達と違い、柔らかく相手の身体をほぐす様に愛撫を繰り返し、体の奥底に眠る真の女の快美感を優しく引き出すような、時間を掛けた濃密な行為に桃源郷を彷徨う様にうっとりとした表情を浮かべるのであった。大きく広げた相手の股間に自分の股間を押し当て、互いの性器をこすり合わせ愛技に没頭する二人の女の接点からピチャピチャと妙なる音が流れ出ている。

「本当に可愛いわね・・・」

と、レズビアンの手管で煽り立てられ夢見心地に浸るような暁美の様子を、粘っこい目で観察しながら、頃は良しと、銀子は右手を枕元に置かれた性具入れに伸ばし、中に入っていた太いバイブを挿んだ・・・

公衆便所

お竜の背後から激しく腰を突き立てる男の赤銅色の肌が汗で光っていた。激しく荒い息を吐きながら、最後の追い上げに、お竜の牝芯を強く突き立てる男の背に彫られた閻魔大王の刺青が男の背中の筋肉の緊張に伴って歪み、汗に濡れて艶々と輝いていた。

ウォーッ！ウォーッ！と、快感に感極まった男が獣の叫び声のような雄叫びを上げ、最後の放出の瞬間を僅かでも先に延ばそうと歯を食いしばったまま、トドメを刺すように一層腰の動きを強くした。

お竜は13人の果てしなく精力絶倫の男を同時に相手して、得も言われない快感をもたらす三つの穴にそれぞれ13回ずつ男を迎え入れ、全ての男の獣欲を搾り取り、今最後に残った

男が、お竜を背後から責め立てているのであった。

全部の男を相手にした疲労感で、顎と言わず腰と言わず、全身はキリキリと痛みを発していた。

男達に突き立てられ放しであった、三つの穴はすっかり痺れきり、今はその感覚を全く失っていた。

男が獣欲を掻き出そうとする肉穴は、全く感覚を失っていたが、それでも、朦朧とする意識の中で、男が絶頂に達するのは間近に迫っていることを感じていた。

そして、薄れ行く意識の中で、最早その機能を停止していた華洞の筋肉に、内部に啞えた男のモノを締め上げるよう最後の命令を送った。

「いくぞ！いくぞ！」と、大声を上げた男は、その瞬間絶叫のような大声を上げて、その激しかった前後運動を弱めた。

最早、肉洞の神経は痺れきり、男の放出した瞬間を感知することさえ出来なかったが、男の所作から、最後の男が体内に熱い精液の放出を終えた事が判って、長時間に及んだ苦痛からこれで解放されると、ほっと緊張を解いた刹那、貧血を起こしたように目の前が暗くなって行くのを感じた。

果てしない苦痛と疲労感の中で意識が朦朧となりながらも、やっと最後の男の精を絞り上げた直後に意識を失い、執拗な男達から解放されたお竜は、死んだように布団の上に横たわっていた。

激しく女肉を酷使し続け、酸欠状態に陥った肉体が酸素を欲しがり、無意識の中でもまるで陸に打ち上げられて魚のように口をパクパクとさせ、苦しげに息を吐く為に上半身が動くので、まだ生きている事は分かるが、13人もの性豪を相手に自分の咀嚼器官と生殖器官と排泄器官の外部に開かれた孔を休む間もなく男達に与え続けた末、最早意識は完全に無くなっているようであった。

「流石のお竜姐さんもとうとう昇天なさったぜ！見ろよ！口から泡を吹いてぶっ倒れているぜ！」

と、苦しげに息を吐く半開きに開いたままの口から泡の混じったドロリとした粘稠な白濁した液を滴り流すお竜を見て男が笑った

「それは泡じゃなくて俺たちのザーメンだろう！」

と、男達が大声で笑い合った。

お竜の体内に放出し終えて満足した男達が、ぐったりとしたお竜の白い裸身を見詰めながら愉快そうに酒をすすり、嘲り声を上げていた。

溜まっていた精液を放出し終え、少し落ち着いた男達は、酒を酌み交わしながら、全身の穴と言う穴から白い粘液を垂れ流して、うずくまるお竜の淫靡な姿をじっと見つめ続けていた。

「いけない！体が冷えて小便がしたくなって来たぜ！」

と、一人の男が突然声を上げた。

「とは、言っても教えられた便所は少し遠かったしな・・・何処か手近な所に便所は無いかな？」

便所、便所と、大げさに左右を見回すように言いながら、ふと、お竜の方を眺めると、「おお？ここに便所が在ったじゃないか！」

と、わざとらしく大声を上げたので、周囲の男達が可笑しそうに大声を上げて笑い合った。

男はお竜に近付くと、お竜の腰を掴んで自分の方に引き寄せた。

お竜は完全に意識を失って、ぐったりとしていたが、男の硬いモノが再び自分の菊の蕾を裂いて、容赦なく侵入して来た事を心の片隅で感じ、「ああ、もう止めて下さい・・・」と、無意識に呟くように力なく哀願した。

そんなお竜の切ない哀願に構うことなく、男は意識が朦朧とし、弛緩してだらしく開いたままとなっていた菊花の中心に無理矢理ズブズブと自分のモノを突き立て、強引に根元まで尻穴に埋め込むと、そのまま自らの緊張を解いた。

夢見心地のようなボンヤリとする意識の中で、僅かずつではあるが、痺れが取れ感覚が蘇り始めた後ろの肉穴に突き立てられた男の太い肉のパイプを通して熱い液体が、奔流のように腸内に侵入して来たことを自覚して、お竜が小さく悲鳴を上げた。

「へへ、結構溜まっていたぜ。おお！まだ出やがる・・・」

13人の男による陵辱に疲弊しきって、弛緩していたお竜の肛門が、それでも漸く回復し始めた本能による反射反応で、柔らかく男の肉茎を括り上げたことにより、男根の中の狭まった尿道を小便が通過して行く感触を楽しむかの様に男がウツトリと声を出した。

疲労しきったお竜の体には、最早男の乱暴に抵抗する力は残っておらず、ぐったりとしたまま男に最後の一滴まで放出させてしまった。

男がお竜の腸内に排泄を終えて、満足してお竜の体から離れると、周囲を取り囲むように見物していた別の男が立ち上がり、「おれも小便がしたくなった。」と、お竜の尻に挑み掛かる

のであった。

疲労困憊して全身が痺れたように身動きも出来ないお竜は、すすり泣きしながらナヨナヨと小さく腰を揺すって拒絶の意志を示すことしか出来なかったが、逆に男からはおいでおいでするように尻がうねっているように感じられた。

お竜は、か細い抵抗を示しただけで、大人しく男のモノを受け入れ、体内に放出させ続けていた。

「これが本当の公衆便所だな・・・」と、お竜の腸内に自分の排泄液を注ぎ込みながら男が楽しそうに呟いた。

更に入れ替わるように別の男が、お竜の菊門を割った。

既に先人の残した、排泄液で腸内は満たされ、突き立てた筒先を濡らした。

突き立てた男根と肉の壁との隙間を通して黄色い液体が滲み出た。

酒をしこたま食らった男達の尿には大量のアルコールが混じり、尿臭とアルコールの刺激臭が滲み出た液から発していた。

朦朧としていた意識も漸く取り戻して来て、男達が突き立てる肉の器官もゆっくりとその感覚を取り戻しつつあった。

意識が明晰になると共に、お竜は自分が置かれている余りにも惨めな立場をはっきりと理解すると、かつての女渡世人としての意気地もすっかり失って、大声を上げて泣きじゃくり始めた。

そんなお竜の悲嘆に泣き崩れる姿を眺めながら男達は、

「あの男勝りのお竜姐さんも、公衆便所代わりされて悔し泣きしているぜ！」

と、面白そうに指差して笑い会うのであった。

抵抗する力も気力も最早残されておらず、男に尻を貫かれたまま、身も世もなく泣き崩れる女盛りの美女に男達は同情することなく、逆に被虐の快感に心を掻き立てられる様であった。女の体内に突き立てたまま、排尿することは普通の男では困難であるが、性技に長けた男達は自分を上手にコントロールして、次々と腸内に排泄し終えて行った。

都合七人の男が無抵抗なお竜に排泄液を注ぎ入れた。

小便の成分は腸内の液の成分と近いいため、グリセリン液のような急激な作用は現れなかったが、七人分の小水は大腸内に重苦しく滞留し、更に尿中に含まれたアルコール残分が腸壁を刺激して、内部からお竜を苦しめ始めた。

下腹を襲う膨満感は、やがて大腸全体の蠕動運動を促し、悲哀の涙に暮れていたお竜の意識

を現実に引き戻して行った。

「アアッ・・・苦しい！」と、お竜が体を横たえたまま腰を振った。

「ああ・・・もう駄目！・・・もうイキます、イキます、・・・イクッ！」

上気して額は汗に塗れ、上品にセットしてあった黒髪も、今は、おどろに乱れて、乱れた黒髪が額にべっとりと張り付いた妖艶な顔を激しく振り立てながら、絶え絶えの息の下で苦しそうに呻くように一言叫ぶと、村崎と剛沢にサンドウィッチにされ、二人の怒張により前後の穴を蹂躪されていた晴江が、一瞬体を硬化させ二人の肉茎をグッと喰い絞めると、次に白目を向いて全身を弛緩させた。

「この女、また自分だけ先に逝きよったで！ホンマにアホかいな。儂ら二人に同時に満足させ一と言うとるのに、自分だけ楽しんどったら、何時まで経っても兄弟の契りが結べんやないか！」

村崎がなおも激しく晴江の後の孔を責めながら、グツタリと放心したような晴江を怒鳴りつけた。

「八の字筋を思い切り動かして、前と後の男のモノをもっと上手に締め上げるんや！銀子達から調教されて此処の筋肉も鍛えられたと聞いてたけど、まだまだ鍛え方が足りんとのちゃうか？」

「どうも済みません。これまでの調教が手緩かったようです。」

前から晴江の花芯を突き立てながら剛沢が村崎に詫びた。

激しく頂上を極めぐったりする晴江の頬を何度も平手打ちすると、

「おい晴江！この俺に恥をかかせやがって！」

と、残忍な顔で絶頂を迎えて朦朧としたままの晴江を睨み付けた。

「これが終わったら、村崎親分にご満足頂けるようになるまで、また一から調教のやり直しだ！」

眉根を深く寄せ、涙を浮かべた気弱そうな目を薄く開いて、苦悶の表情を浮かべながら苦しように息をする晴江を正面から睨み付けて剛沢が怒鳴りつけた。

あの恐怖の肉体調教を再び強制されるのかと思うと、心の底から恐怖心が舞い上がり、恐ろしい記憶を振り払おうとするかのように、激しく頭を振りながら、

「ああ・・・それだけは、お許し下さい。一生懸命お二人を満足させる様努めます！」と、涙

を浮かべながら哀願するのであった。

そこにはかつての颯爽とした女親分の貫禄は微塵も無く、ただ残酷な肉体調教の恐怖に怯え、必死になって自分の二つの羞恥の器官を駆使して、嗜虐者達に奉仕しようとする哀れな女の姿しか無かった。

その哀切を漂わせるかつての猛女の姿は男達の嗜虐性を一層昂じさせ、媚肉の中に突き立てたモノを更に硬化させるのであった。

晴江達は、同時に二人の男を相手にしても大抵の遊び慣れた程度の男なら簡単にイカせる位の能力は、銀子の調教とこれまでの客を相手にした経験により身に付けていたが、村崎や剛沢は並の性豪では無かった。

銀子達に鍛えられた筋肉と習得した技術を駆使して男達を追い上げようと必死に男達の肉塊を締め上げ、大抵の客でならとっくに射精して果てているはずであるが、幾千もの女との交接を通して性技に長けた男達は、次々を晴江の繰り出す必死の技をしのぎ切り、晴江が疲れ果てて、更に自ら繰り出した技で逆に自分自身の性感も耐えようも無く昂進しているのを見計らって逆襲に転じると、あらゆるテクニックを駆使し執拗に責め上げ、何度も晴江に惨めな絶頂感を味あわせて来たのだった。

晴江を仲立ちとして兄弟の契りを結ぶと言いながらも、村崎も剛沢も、持ち前の嗜虐性を發揮して、最初から晴江を前後から責め罵り、哀れな女を肉欲地獄に突き落とし肉感の極地に懊悩する姿を観察することを目的としており、容易に解放する気など毛頭無かったのだ。

「ホンマか？二人同時に満足させることが出来るまで、このまま一日でも二日でも突き続けるで・・・」

村崎が穏和な表情を崩して、その下からヤクザの凄みのある表情を浮かべて、衰える事の無い肉塊を突き立てながら聞いた。

そのドスの利いた声に、冷たい汗が流れ落ち、心の底から恐怖感が舞い上がって来た。

晴江は二人の男に挟まれ、この性の怪物のような二人の男を同時に相手することに絶望的な気持ちに襲われながらも、目に涙を溜め苦悶の表情を浮かべながら肯くのであった。

「アアッ！イキます！」と、叫ぶと銀子に組み敷かれた暁美が身体を硬直させた。

「ホホ・・・この娘は、本当に可愛いわね。」

銀子が自分の身体の下で快感の余韻に浸りながら身悶える暁美を見下ろしながら満足そう

に呟いた。

豊かな愛液を滴らせる股間には、まだバイブレーターが突き立てられたまま振動を続けていた。

銀子は立ち上がると、「この娘を虐めたがる男達の気持ち、よく分かるわね・・・」と、布団の上に横たわったままの暁美を見下ろして呟いた。

「私も楽しませて貰うわよ・・・」と、口元に微笑みを浮かべると、何やらベルトのような物を手にした。

ベルトはT-字帯のような形になっており、その中央のベルトの革を挟んで両側には男の肉茎を摸した太くて長い物が取り付けられていた。

銀子は、へっぴり腰の姿勢となり股を大きく開くと、その一端を自分の秘裂に押し当てて、そして、そのまま太い張り型を自らの体内にズブズブと収め始めた。

並みの男のモノより数段大きな筒具は銀子の柔肉を押し開き、体内に没していった。

そして、ベルトに取り付けられた筒具を根元まで体内に収め終わると、淫靡な形状の張り型の大きさを自らの肉体により知覚した様に、うっーと、一つ息を吐いた。

一瞬身体を制止させ、一つ息を吐いて、その陰具の肉洞内での座り心地を確認した様な素振りを見せた後、テキパキと張り型の取り付けられたベルトを自らの腰に固定した。

貞操帯のような形をしたベルトの股間の部分からは巨大な張り型が、そそり立つ様に前に突き出していた。

「まるで男みたいに勇ましい姿じゃないか！」

これまで黙って見守っていた黄原が、銀子の姿を可笑しそうに笑いながら手を叩いた。

銀子は黄原にからかわれて、少し照れたような表情になって、

「そうよ！これから男になってこの女を責めるのよ」と、キッパリと言い切った。

そして、未だに前の穴にバイブを突き立てたまま身悶える暁美を、裏返す様に布団の上に俯せにすると、前の穴から溢れ出した粘液に塗され、ピクピク収縮を繰り返す、後ろの穴に腰に付けた張り型の先端を押し当てた。

そして、暁美の腰を持ち上げる様に起こして、犬の様に尻をもたげさせると、そのまま張り型をズブズブと腸内に収めていった。

暁美の女肉を貫き通す抵抗感が、股間のベルトを挟んで連結したもう片方の張り型に伝わり、銀子の秘肉を刺激するのか、二人の女が同時にウツと声を上げて身体を震わした。

「アアー、良いわ！本当に良いわ・・・」

暁美の菊の蕾を割って今や根元まで収めた張り型を通して、暁美の前門に突き立てたままのバイブの振動が銀子の秘孔にも伝わり、銀子がウツトリした声を上げた。

そして、更に刺激を楽しむかのように暁美の尻に突き立てたまま腰を前後に動かし始めたのだった。

銀子の卓越した腰の振りに支配される様に、一度絶頂の極め、まだ神経が過敏となったままの暁美は銀子に煽り立てられ、淫靡な呻き声を発し始めた。

「どう？村崎親分ほどじゃ無いけど、お尻の穴も良いものでしょ？」

暁美の後口を腰に着けたもので抉りたてながら、相手の表情を観察しながら尋ねた。

銀子の握り締めるバイブで前門を攻められ、腰の淫具で後門を責め立てられ、眉間に皺を寄せながら、アー！イイ！アー！イイ！と鼻を鳴らす様な声を上げていた。

黄原の見守る前で暁美も銀子も興奮して体温が上昇し、汗を浮かべ雌の芳香を立ち昇らせながら、獣じみた声を発する様になっていた。

その二人の女の痴態に刺激されたように黄原が、フラフラと立ち上がると衣服を次々と脱ぎ捨て、パンツを下ろして、いきり立つ物を取り出した。

そして、暁美を後背位で責め立てる銀子の背後に近づいた。

銀子の尻を縦に割るベルトを横にずらすと、その下から僅かにセピア色を帯びた形の良い菊花が姿を見せた。

「ちょっと！何するのよ？」

銀子が後ろから悪戯を始めた黄原の方を振り向き非難した。

「まあ、良いじゃないか・・・」と、ニヤッと笑うと黄原は、その菊の蕾にそっと唇を押し付けた。

銀子が堪らず身体をブルッと震わせた。

黄原は口唇での愛撫を充分行くと、次に舌尖を銀子の輪状の筋肉の周りにはわせ、そのまま舌尖を堅く尖らせて菊の蕾を割って内部に差し入れた。

舌を深く内部まで差し込むと、銀子の反応を楽しむ様に、リング状の入り口部分を全周に渡って内側から嘗め回した。

黄原の突然の舌尖の攻撃に銀子がウツトリとしたように鼻を鳴らした。

そして丹念に銀子の菊花に舌尖を這わせて、華肉が柔らかく潤ったのを確認すると、自分の堅くいきり立った物を蕾の中心にあてがった。

「止めてよ！イヤよ、イヤよ・・・」

黄原の巨根でズブズブと菊の花弁をこじ開けられ、内部に挿入されるのが、いかにもくすぐったそうに銀子が腰を振った。

黄原の人並み大きな怒張を何事も無かったようにすっかり呑み込んだ銀子の直腸は、ネットリとそれを包み込み柔らかく締め上げた。

「あーっ・っ・いい！やっぱりお前のアヌスは最高だ・っ」

銀子の尻穴に突き立てたまま、黄原がウツトリするような声をあげた。

「そうよ！後ろの穴だって、前の穴だって、まだまだこんな小娘達には負けないわよ！」

後ろから深く挿れられながら銀子が応えた。

「こうなったら、三人で楽しもうぜ！」

黄原は更に強い快感を求めて、ゆっくりと腰を前後に振り始めた。

「アアッ！イイッ！」黄原の逞しい怒張のピストン運動を受け入れながら、銀子が堪らない様に声を上げた。

そして、快感に咽ぶ銀子の腰の動きが、ペニスバンドを通して曉美を責め立てた。

その銀子の刺し貫く疑似ペニスに刺激され曉美が歓喜の声を上げた。

「ようよう！お前ら、仲睦まじい所を見せてくれるじゃないか！」と、剛沢が晴江を責め立てながら首をこちらの方に回して、面白そうに声を掛けた。

右手で曉美の股間に突き出した木の芽を優しく愛撫しながら、左手でパイプを握り締め曉美の前門を犯し、更にペニスバンドに取り付けられた張り型で後門を責め立てる銀子。

その銀子の両の乳房を揉み上げながら、銀子の肛門に怒張を突き立てる黄原。

晴江をサンドウィッチにして責め立てる剛沢や村崎の見守る前で、曉美、銀子、黄原が三重連結となり、堪らない嬌声を上げ身体を悶えさせていた。

「アアッ！苦しい！」

お竜が全身に冷や汗をびっしりと浮かべて、苦痛に身を振りながら、悲鳴を上げた。

男達から代わる代わる大量の聖水を注ぎ込まれた事により、排泄感が誘発されて来た事を男達が認識した。

お竜の周囲を取り囲むように座り、美女の苦悶を酒の肴にするかのように、互いに酒を酌み交わしながら、淫猥な眼差しでお竜の身悶えを楽しんでいた。

「どうした？お前便所のくせして、生意気に大便をヒリ出そうってのか？」と、一人の男が

野次った。

「いくら便所でも便壺に溜まった糞は掻き出さなくっちゃいけないだろう。まあ汲み取り便所みたいなもんだな・・・」と、酒に酔った別の男が可笑しそうに笑った。

こうして男達に卑猥な言葉を浴びせられ続けながらも、お竜の便意はいや増しに高まり、全身が冷や汗に染まり、体を海老のように折り、苦しそうに悶え続けていた。

「アアッ・・・お願いします。トイレに行かせて下さい・・・」と、この残忍な男達に希っても無駄とは知りつつ、目に涙を浮かべて哀願した。

「何？便所だと？何処の世界に公衆便所が駆け込む便所がある？」と、お竜の哀願を無視して面白そうに声を上げた。

その間にもお竜の喘ぎは一段と激しさを増し、このままでは崩壊に近い事を感じた。

「そうだな・・・このまま便壺が壊れて、ここらに撒き散らされても困るしな・・・」と、男が周囲を見回すと、床の間に生けられていた生け花が目にとまった。

男はその生け花に手を伸ばすと、生け花を剣山ごと長円形の大きな水盤から外して脇に置き、空になった水盤を手にしてお竜の元に戻って来た。

「へへ・・・お誂え向きの物が在ったぜ・・・」と、水盤の水を空になったアイスペールの中に空けると、大きな和室用のお膳の上に並べられたビールや酒を片付けて、お膳の上に陶器の水盤をドンと置いた。

「どうした？糞をしたいんだろう？」男達がニヤニヤ笑いながらお竜を見つめた。

ああ・・・私は、何時も野卑な男達に見られながら、排泄しなければならないのね・・・と、便意も限界に達していたお竜は、自分の定めを諦めて受け入れるかのようにフラフラと起き上がり、力が入らない身体でお膳に這い上がろうとした。男達が面白そうに刑台に登ろうとする美女の蠱惑的な柔肌に手を掛けて押し上げた。

未だ苦痛と疲労の残る体でフラフラとお膳の上に登りつめると、男達が据え付けた有田焼の豪華な長円形の水盤を跨いだ。

便意は限界を超えて高まっていた。

「へへ、お竜姐さんも糞をする時はそんな格好をなさるのかい？」と、お膳を取り囲んで、下から見上げるように座る男達が卑猥に頬を歪めながら聞いた。

「そんなに近寄って飛沫が掛かっても知らないわよ・・・」と、下から双臀に顔を近づけて見つめる男達に、お竜がふて腐れたように呟いた。

男達に逆らっても、最後は力尽くで、男達の望む通りにさせられてしまうことを分かっている

たお竜は、捨て鉢な気持ちになって、男達の下劣な期待に挑戦するように、わざと水盤の上に跨る肉付きの良い股間を大きく広げ、自らの媚めかしい秘部を目を血走らせて覗き込む男達の目に堂々と晒すのであった。

「つべこべ言っただけで、さっさと始めろ！」と、焦らされて男達がお竜に怒鳴った。

大きな水盤を跨いで大きく広げられた会陰部の終端に位置する深い皺を寄せた蕾が、さっきから忙しくピクピクと収縮を繰り返しており、決壊は間近で在る事を男達は、気が付いていた。

不意に収縮が止まり、次に見る見る内部から大きく蕾を膨らませると、堰を突き破ってお竜の排泄が始まったことに男達は喚声を上げた。

落下微塵の羞恥図をかつての同じ一門の仲間と信じていた男達の目に晒すことは、やはり堪えられない屈辱なのか、歯を食いしばり眉根を寄せて、全身を紅潮させ肛門括約筋を強く緊張させていたため、いきなり大量の排出とはならず、菊花の割れ目を通して染み出す汚物の溶液が、ポタポタと大粒の雨のように水盤の底を叩き、黄褐色の濁液を菊口から滴らせていたお竜であった。

しかし、お竜の努力も虚しく、一度穿たれた破口は、内部の強い圧力に負けて徐々に拡大し、やがて土砂降りの雨のように濁液を放出し始めた。

最初に男達から注ぎ込まれた黄色い液体が夥しく噴出して、水盤の底を激しく叩き飛沫を上げた。

「ワーッ！こいつは汚いや！」と、お竜の排泄口に顔を近づけて凝視していた男達が、思わず悲鳴を上げて後ろに仰け反った。

その大慌ての様子に他の男達から笑い声が上がった。

こうして男達がお竜の腸内に注ぎ込んだ小水を主体とする濁液が水盤の中にたつぷりと黄色い池を作って行った。

体内を責め苛んでいた小水による圧力が減少して、少し楽になったのか、一旦お竜の排泄が止まった。

そして暫しの静寂の後、お竜が身悶えるように腰をブルッと振ると、大きく菊門が開き、赤黒い内部の肉壁を晒す排泄口から男達の精の名残を留める白い粘状の液体がドロドロと流れ出た。

代わる代わる10数人の精液を注ぎ込まれていたため、その量の多さに男達は目を白黒させた。

男達に注ぎ込まれた汚辱の体液を排出し終えた後、再び暫しの静寂が流れた。

「何だ？もうお終いか？肝心な物はどうした？」と、男達がなじった時、お竜は一瞬眉根を顰めてウツと呻いて、下半身をブルツと振った。

その瞬間ブリツというような空気が漏れるような音をさせて、お竜の肛門を割って太い茶褐色の物が、どつと飛び出して水盤の上に勢い良く落下し、ビシャビシャと黄色い液を跳ね上げた。

「このアマ、とうとう始めやがったぜ！」

男達は美女の脱糞姿に思わず喚声を上げた。

肛門の出口を扼していた、茶褐色の大きな固形便をブツと音を上げて嘔き出した後、それに続いて、開け放たれた通路からニュルニュルと軟状便が、蛇が巣穴から這い出す様に水盤に向かって落下して行った。

「へへ・・・俺たちが見ているからって、気を使って随分お淑やかに垂らすじゃないか？昔の仲間じゃ無いか・・・俺たちを気にせず、のびのびとブツといヤツを垂らせば良いじゃないか・・・」

かつての仲間の組の親分連中の前に惨めな排泄図を晒す羞恥に堪えられず両手で顔を覆い、嗚咽を上げながら、野卑な男達の聞くに堪えない声に包まれて、次々と水盤の上に太いロープのような便を産み落として行くお竜であった。

水盤には男達の小水の混じった黄褐色の不潔な液体の海の中に茶褐色の便が島のように浮かんでいた。

男達は産み落とされた便塊と大声で泣きじゃくるお竜を交互に見詰めて嘲笑した。

「どうした？かつての同門の男達の前で、糞を垂れて恥ずかしいか？」

「そんな、顔を隠してないで綺麗な顔を見せてくれよ！」

羞恥と屈辱に歪む顔を隠していた両手が男達により無理やり剥ぎ取られ、再び顔を隠せないように後ろ手に縛り上げられた。

「どうでい！お竜姐さんのこの恥ずかしそうな顔をよく見てやれよ！」

男達の前に再び醜態を露呈してしまったことに、顔を赤く染め涙を流して項垂れるお竜を見付けて得意そうに大声を上げた。

「男勝りのお竜姐さんが、俺たちの前でこんなベソをかくとは思わなかったぜ！」

項垂れて顔を背けようとするお竜の顎に手を掛けると、涙を流して嗚咽する顔を皆の方に無

理やり向かせるのであった。

「どうだ、これだけ放り出せば、すっきりしたんじゃないか？もうオマルを片付けても良いだろう？何時までも置いてたら臭くて堪らんぜ！」

一旦固形物の排泄は終わったが、いまだに苦しそうに腰を震わせ、次の放出が在ることを見抜いた男が、わざと水盤に手を掛けて、お竜の股の間から抜き去ろうとした。

「待って！まだ持って行かないで！」

「お前！こんだけ糞を放り出しているのに、まだ出るって言うのか？」

男が大声で笑いながら叫んだ。

下腹から突き上げる、痙攣に苛まれお竜が嗚咽しながら哀しげに首を縦に振った。

「それじゃ、もっとウンコを出しますから、オマルを持って行かないで下さい。と、言ってみろ！」男が勝ち誇ったようにお竜に詰め寄った。

「皆様にもっとお竜がウンチをする所をお見せしますから、・・・まだオマルを持って行かないで下さい！」

進退窮まったように、目に涙を浮かべながら、強制された屈辱の哀願を男達の前で述べるお竜であった。

その言葉が終わらない内に、ウッと溜息を吐き顔を蹙めた。

「このアマ、又始めやがったぜ！」

「へへ・・・ブリブリ音をさせて、ボトボト落ちて行くじゃないか。」

「この女、一体腹ん中にどんだけ糞を溜め込んでいたんだよ？」

腸内の深奥に残されていた大量の汚物が外界に送り出される様を見続けながら、男達が口々に揶揄した。

「いい気なもんだぜ！のびのびと太い糞を出しやがってよ！・・・おおっ！今度のヤツは一段と大きいじゃないか？」

「それに今度のヤツは又一段と臭いぜ！・・・オメー！俺たちに腹の中に溜まった臭い物を嗅がせて仕返ししようって魂胆じゃないのか？」

隠すことも出来ず、羞恥に染まった顔を男達に晒しながら、排便を続けるお竜に男達は、罵声を浴びせながら大声で笑いさざめいた。

再び始まった排便は、大腸内の汚物を全て流し去るまで止めることは出来ず、何時果てると

も知れず、水盤の上に太くて長い便の山を築いて行った。

お竜の肛門から垂れ下がる、茶褐色に艶々と輝る便は、お竜の体内に巣くっていた大蛇が外に飛び出した様に水盤の上に長々と蝮局を巻いた。

「随分と溜まっていたじゃないか？それにこの臭さはどうだ！」と、男達がお竜の排泄図を見つめながら野次を飛ばした。

「男達に見られながら、伸び伸びとこんな臭い大グソをするとは、元目高組の賭場で組を代表して壺を振っていた女とは思えないぜ！少しは恥って物を知ったらどうだ」と、毒づいた。

男達の卑猥な揶揄に顔を真っ赤に染め泣き叫びながら、腰をモジつかせていたお竜であったが、突然発作を起こしたように、「アアッ！イヤ！」と、一声叫ぶと、押さえの効かなくなったお竜は前の方からも放出を始めた。

突然始まった激しい放尿は、水盤の中に収まらず、お膳の上で弾け飛び畳まで濡らした。

「このアマ、大糞を放りながら今度は、堂々と小便までオッ始めたぜ！全く恥知らずな女だぜ！」と、男達が呆れたように声を上げた。

一人の男が慌てて、空のビールジョッキでお竜の放水を受けようとしたが、ふらつく腰のため上下に振れる軌道で、ジョッキの中に納まらず持つ男の手をビシャビシャと濡らした。

ジョッキを手にしたままオロオロする男の様子に笑い声が上がった。

「こんなに畳まで濡らしやがってよ！どうしてくれるんだ？」

男達が放出を続けるお竜に詰め寄った。

「ああ・・・ご免なさい・・・ご免なさい・・・」

大きな噴出音を伴う激しい放出により、お竜の恥辱の穴から放出された汚物は細かな飛沫となり、お膳の回りやその下の畳にも拡がっていた。

「こんなに臭い物を辺り構わず撒き散らしやがって！それでもお前は侠客の端くれか？！恥を知りやがれ！」

男達から怒鳴られても最早自力では噴出を止める事の出来ないお竜が泣きながら謝り続けた。

男達に野次られ、羞恥に全身を赤く染め、悲痛な声で泣き叫びながら、何時までも前と後から排泄し続けるお竜の姿があった。

水盤の上はお竜の体内から噴出したドロドロした汚物が山の様に積み重なり、今にも溢れ出しそうになっていた・・・